









紅印

紅印

第二獨步集

國木田獨步作

□新潮社出版□

解題

「第二獨歩集」は、獨歩の死後、遺稿として公にされたもので、云ふ迄も無く彼の最後の短篇集である。その簡潔深刻の作風は、此篇に至つて極點に達し、千練の七首、深く肺腑を刺すの概を示して居る。「二老人」は、彼のあらゆる創作中最も老熟した作といふ事に衆評一致し、「竹の木戸」は、これが爲めにその死の前の病勢を強めたと云はれたほどの力作で、それ丈に、亦、非常に傑出した短篇である。稍々長い「窮死」の外、「疲勞」「節操」「眩の侮辱」など、皆、極く短いものであるが、寶玉の如き貴重作品として、世に推稱されてゐる。

本書は、なほ之に添ふるに、「暴風」「親子」の二篇を以てした。「暴風」は、彼の唯一の長篇で、「日本新聞」に連載されたものである。歿するの前年八月稿を起し、病の爲めに書き續ける事が出来ず、未完のままに残されたものであるが、非常な意氣込で始めた作品だけに、この部分のみでも、頗る價值高きものとなつて居る。

第二獨步集

國木田獨步

竹の木戸

(上)

大庭真藏といふ會社員は東京郊外に住んで京橋區邊の事務所に通つて居たが、電車の停留所まで半里以上もあるのを、毎朝缺かさずテク／＼歩いて運動には恰度可いと言つて居た。温厚しい性質だから會社でも受が可かつた。

家族は六十七八になる極く丈夫な老母、二十九になる細君、細君の妹のお清、七歳になる娘の禮ちゃん、之れに五六年前から居るお徳といふ女中、以上五人に主人の眞藏を加へて都合六人であつた。

細君は病身であるから餘り家事に關係しない。臺所元の事は重にお清とお徳が行つて居て、それを小まめな老母が手傳て居たのである。別けても女中のお徳は年こそ未だ二十三であるが私はお宅に一生奉公をしますといふ意氣込で權力が中々強い、老母すら時時此女中の言ふことを聞かなければならぬ事もあつた。我儘過ぎるとお清から苦情の出

二

る場合もあつたが、何しろお徳はお家大事と一生懸命なことから結極はお徳の勝利に歸するのであつた。

三

生垣一つ隔て、物置同然の小屋があつた。それに植木屋夫婦が暮して居る。亭主が二十七八で、女房はお徳と同年輩位、そして此隣交際の女性二人は互に負けず劣らず喋舌り合つて居た。

初め植木屋夫婦が引越して來た時、井戸がないので何卒か水を汲まして呉れと大庭家に依頼みに來た。大庭の家では其は道理なことだと承諾してやつた。それから彼是二月ばかり経つと、今度は生垣を三尺ばかり開放さして呉れる、さうすれば一々御門へ迂廻らんでも濟むからと頼みに來た。これには大庭家でも大分苦情があつた、殊にお徳は盜棒の入口を造へるやうなものだと主張した。が、しかし主人眞藏の平常の優しい心から遂に之を許すことになつた。其方で木戸を丈夫に造り、開閉を嚴重にするといふ條件であつたが、植木屋は其處らの藪から青竹を切つて來て、これに杉の葉など交ぜ加へて無細工の木戸を造つて了つた。出來上つたのを見てお徳は

「これが木戸だらうか、掛金は何處に在るの。こんな木戸なんか有るも無いも同じこと

だ』と大聲で言つた。植木屋の女房のお源は、これを聞きつけ、

『それで澤山だ、どうせ私共の力で大工さんの作るやうな立派な木戸は出来るものか。』と井戸邊で釜の底を洗ひながら言つた。

『それぢやア大工さんを頼めば可い。』とお徳はお源の言葉が癢に觸り、植木屋の貧乏なことを知りながら言つた。

『頼まれる位なら頼むサ。』とお源は軽く言つた。

『頼むと来るよ。』とお徳は尙一つ皮肉を言つた。

お源は負けぬ氣性だから、これにはむつとしたが、大庭家に於けるお徳の勢力を知つて居るから、逆らつては損と蟲を壓へて

『まアそれで勘辨してお呉れよ。出入りするものは重に私ばかりだから私さへ開閉に氣を附けりやア大丈夫だよ。どうせ本式の盜賊なら垣根だつて御門だつて越すから木戸なんか何にもなりやア仕ないからね。』と半分折れて出たのでお徳は

『さう言へばさうさ。だからお前さんさへ開閉を嚴重に仕てお呉れなら先ア安心だが、お前さんも知つてるだらう、此里はコソ／＼泥棒や屑屋の悪い奴が彷徨するから油斷も

間隙もなりや仕ない。そら近頃出來たパン屋の隣に河井様で軍人さんがあるだらう。彼家ぢやア二三日前に買立の銅の大きな金盃をちよろりと盜られたさうだからねえ。』

『まア如何して』とお源は水を汲む手を一寸と休めて振り向いた。

『井戸邊に出て居たのを、女中が屋後に乾物に往つたぼつちりの間に盜られたのだとサ。矢張木戸が少しばかり開いて居たのだとサ。』

『まア、眞實に油斷がならないね。大丈夫私は氣を附けるが、お徳さんも盜られさうなもの少時でも戸外に放棄つて置かんやうになさいよ。』

『私はまア其様ことは仕ない積りだが、それでも、ツイ忘れることが有るからね、お前さんも屑屋なんかに氣を附けてお呉れよ。木戸から入るにや是非お前さん宅の前を通るのだからね。』

『え、氣を附けるともね。盜られる日にや薪一本だつて炭一片だつて馬鹿々々しいからね。』

『さうだとも。炭一片とお言ひだけれど、どうだらう此頃の炭の高値いことは。一俵八十五錢の佐倉が彼だよ。』お徳は井戸から臺所口へ續く軒下に並べてある炭俵の一を指

して、『幾千入つてるものかね。ほんとに一片何錢に當くだらう。まるでお錢を涼爐で燃して居るやうなものサ。土竈だつて堅炭だつて悉な去年の倍と言つても可い位だからね。』とお徳は嘆息まじりに『眞實にやりきれや仕ない。』

『それにお宅は御人数も多いんだから入用ことも入用サね。私のとこなんか二人限だから幾千も入用ア仕ない。それでも三錢五錢と計量炭を毎日のやうに買うんだからね、全くやりきれや仕ない。』

『全く骨だね。』とお徳は優しく言つた。

以上炭の噂まで来ると二人は最初の木戸の事は最早口に出さないで何時しか元のお徳お源に立還り、べちやくちやと仲善く喋舌り合つて居たところは埒も無い。

十一月の末だから日は短い盛で、主人眞藏が會社から歸つたのは最早暮れがかりであつた。木戸が出来たと聞いて洋服のまゝ下駄を突掛け勝手元の庭へ廻はり、暫時は木戸を見てたゞ微笑して居たが、お徳が傍から

『旦那様大變な木戸で、御座いませう。』と言つたので、

『これは植木屋さんが作らへたのか。』

『さうで御座います。』

『随分妙な木戸だが、併し植木屋さんにしちやアよく出来てる。』と手を掛けて揺振つてつて見て

『案外丈夫さうだ。まアこれでも可い、無いよりか増だらう。其内大工を頼んで本當に作らすことに仕よう。』と言つて、『竹で作へても木戸は木戸だ、ハ、ハ、ハ、』と笑ひながら屋内へ入つた。

お源はこれを自分の宅で聞いて居て、くすくすと獨で笑ひながら、『眞實に能く物の解る旦那だよ。第一彼様心持の優しい人つたらめつたに有りや仕ない。彼家ぢや奥様も好い方だし御隠居様も小まめにちよこまかなさるが人柄は極く好い方だし、お清様は出戻りだけに何處か執拗れてるが、然し氣質は優しい方だし』と思ひつゞけて来て、ハタとお徳の今日晝間の皮肉を回想して『水の世話にさへならなきや如彼奴に口なんか言かしや仕ないんだけど、房州の田舎者奴が、可愛がつて頂だきや可い氣になりやアがつて如何だらう彼の圖々しい鹽梅は。』とお徳の先刻の言葉を思ひ出し、大變な木戸でせうだつて、あれで難癖を附ける積りが生憎と旦那がお取上げに相成らんから可い氣味だ。愚態見ア

がれた。』と又つと氣を變へて。『だけど感心と言へば感心だよ。容色も悪くはなし年だつて私と同じなら未だいくらだつて嫁にいかれるのに、彼様やつて一生懸命に奉公してゐるんだからね。全く普通の女にや眞似が出来ないよ。それに恐い正直者だから大庭様でも彼女に任かして置きや間違はないサ……』

こんな事を思ひながらお源は洋燈を點火て、火鉢に炭を注がうとして炭が一片もないのに氣が着き、舌鼓をして古ぼけた藥罐に手を觸つて見たが湯は冷めて居ないので安心して、『お湯の熱い中に早く歸つて来れば可い。然し今日若しか前借して来て呉れないと今夜も明日も火なしだ。火ぐらゐ木葉を拾つて来ても間に合ふが、明日食ふお米が有りや仕ない。』と今度は舌鼓の代に力のない嘆息を洩した。頭髮を亂して、血の色のない顔をして、薄暗い洋燈の陰にしよんぼり坐つて居る此時のお源の姿は随分憐な様であつた。其所へのつそり歸つて來たのが亭主の磯吉である。お源は單直前借の金のことを訊いた。磯は黙つて腹掛から財布を出してお源に渡した。お源は中を査めて、

『たつた二圓。』

『あゝ。』

『二圓ばかり仕方が無いぢやアないか。どうせ前借するんだもの、五圓も借りて来れば可いのに。』

『だつて貸さなきや仕方がない。』

『そりや左様だけど能く頼めば親方だつて五圓位貸して呉れさうなものだ。これを御覽、』とお源は空虚の炭籠を見せて、『炭だつてこれだらう。今夜お米を買つたら幾干も残りや仕ない。……』

磯は黙つて煙草をふかして居たが、煙管をボンと強く打いて、膳を引寄せ手盛で飯を食ひ初めた。たゞ白湯を打かけてザク／＼流し込むのだが、それが如何にも美味さうであつた。

お源は亭主の此所爲に氣を吞れて黙つて見て居たが山盛五六杯食つて、未だ止めさうもないので、呆れもし可笑くもなり、

『お前さん其様にお腹が空いたの。』

磯は更に一椀盛けながら、『俺は今日半食を食はないのだ。』

『如何して。』

「今日彼時から往つたら親方が厭な顔をして此多忙しい中を何で遅く来ると小言を言つたから、實はこれ〜だつて木戸の一件を話すと、そんな事は手前の勝手だつて言やアがる、糞忌々敷いから其からグン〜仕事に掛つて二時過ぎになるとお茶飯が出たが、俺は見向も仕ないんだ。お女中が来て今日はお美しい海苔巻だから早く来て食べると言つたが、到頭俺は往かないで仕事を仕續けてやつたのだ。そんなこんなで前借のことに親方に言ひ出すのは全く厭だつたけど、言はないぢや居られんから歸りがけに五圓貸して呉れろと言ふと、へん仕事は怠けて前借か、俺も手前の圖々しいのには敵はんよ、そら是で可からうつて二圓出して與こしたのだ。仕方が無いぢやアないか。」と磯は腹の空いた譯と二圓外前借が出来なかつた理由を一緒に話して了つた。そして話了つたころ漸と箸を置いた。

全體磯吉は無口の男で又た口の利きやうも下手だが如何かすると啖火交りで今のやうに威勢の可い物の言ひ振をすることもある、お源にはこれが頗る嬉しかつたのである。然しお源には連添てから足掛三年にもなるが未だ磯吉は怠惰者だか働人だか判断が着かぬのである。東京女の氣まぐれ者には其で濟でゆくので、三日も四日も仕事を休む、ど

うかすると十日も休む、けれどサアとなれば人三倍も働くのが宅の磯様だと心得て居る、だからサアとなれば困りや仕ないと信じて居る。然し何處まで行つたら其「サア」だか其様ことはお源も考へたことはない。又たお源は磯さんはイザとなれば随分人の出来ない思切た大膽なことをする男だと頼母しがつて居る。けれど左様ばかりしも思へんこともある。其實案外意氣地のない男かしらと思ふ場合もあるが、それは一文なしになつて困り抜た時などで、さう思ふと情なくなるから、成るべく其は自分で打消して居たのである。實際磯吉は所謂「解らん男」で、大庭の女連は何となく薄氣味悪く思つて居た。だからお徳までが磯には憚る風がある。これがお源には言ふに言はれない得意なので、お徳が此風を見せた時、お清が磯に丁寧な言葉を使つた時など嬉しさが込上げて来るのであつた。

それで結極のべつ貧乏の仕飽をして、働き盛りでありながら世帯らしい世帯も持たず、何時も物置か古倉の隅のやうな所ばかりに住んで居る。従つてお源も何時しか植木屋の女房連から解らん女だ、つまり馬鹿だとせられて居たのだ。

磯吉の食事が濟むとお源は筈を持つて駈出して出たが、やがて量炭を買つて来て、火

を起しながら今日お徳と木戸のことで言ひあつたこと、旦那が木戸を見て言つた言葉などべら／＼喋舌しゃべつて聞かしたが、磯は「さうか」とも言はなかつた。其うち磯が眠さうに大欠伸おほあくびをしたので、お源は垢染あかじみた煎餅布團せんぺいふだんを一枚敷いて一枚被かけて二人一緒に一個身體ひとつからだのやうになつて首を縮めて寝て了つた。壁の隙間すきまや床下から寒い夜風が吹きこむので二人は手足を縮められるだけ縮めて居るが、それでも磯の脊中せなかは半分外そとへ露出はみだして居る。

（中）

十二月に入ると急に寒氣が増して霜柱は立つ、氷は張る、東京の郊外は突然だしぬけに冬の特色を發揮して、流行の郊外生活にかぶれて初めて郊外に住んだ連中を喫驚びつくりさせた。然し大庭眞藏は慣れたもので、長靴を穿いて厚い外套を着て平氣で通勤して居たが、最初の日曜日は空青々と晴れ、日が煌々きら／＼と輝やいて、そよ吹く風もなく、小春日こはるびより和が又立戻つたやうなので、眞藏とお清は留守居番、老母と細君は禮ちやんとお徳を連れて下町したまちに買物に出掛けた。

郊外から下町へ出るのは東京へ行くと稱して出慣れぬ女連は外出の支度そとでに一騒ひとさわぎするの

一一

一三

である。それで老母を初め細君娘、お徳までの着變きがへやら何かに一しきり騒さわしかつたのが、出て去つた後は一時に森となつて家内やうちは人氣ひとけが絶えたやうになつた。

眞藏は銘仙の襦袍じゆぽうの上へ兵兒帶へいごおびを巻きつけたまゝ日射ひまたりの可い自分の書齋ひまわりに寢轉ねころんで新聞を讀んで居たが、お午前ひるまえになると退屈ひるまになり、書齋を出て縁邊えんばたをぶら／＼と歩いて居ると、

『兄様にいさま。』と障子越しにお清が聲をかけた。

『何です。』

『オホ、何ですだつて。お午食ひるめしは何んにも有りませんよ。』

『かしまりました。』

『オホ、かしまりました』だつて眞實ほんとに何にもないんですよ。』

其處で眞藏はお清の居る部屋の障子を開けると、内なかではお清がせつせと針仕事をして居る。

『大變勉強だね。』

『禮ちやんの被布かぶですよ、良い柄がらでせう。』

眞藏はそれに應へず、其處邊を見廻はして居たが、
『最少し日射の好い部屋で縫つたら可さうなものだな。そして火鉢もないぢやないか。』

『未だ手が凍結るほどでもありませんよ。それに此節は御儉約といふことに決定したのですから。』

『何の御儉約だらう。』

『炭です。』

『炭は成程高價なつたに違ないが宅で其を節約するほどのことはなからう。』

眞藏は衣食臺所元のことなど一切關係しないから何も知らないのである。

『如何して兄様、十一月でさへ二月の炭の代がお米の代よりか餘程上なんですもの。これから十二、一、二と先づ三月が炭の要る盛ですから儉約出来るだけ仕ないと大變ですよ。お徳が朝から晩まで炭が要る炭が高價いて泣言ばかり言ふのも無理はありませんわ。』

『だつて炭を儉約して風邪でも引いちや何もなりや仕ない。』

『まさか其様ことは有りませんわ。』

『しかし今日は好い鹽梅に暖かいね。母上でも今日は大丈夫だらう。』と兩手を伸して大欠伸をして、

『何時か知らん。』

『最早直ぐ十二時でせうよ。お午食にしませうか。』

『イヤ未だ腹が一向空かん。會社たと午食の辨當が待遠いやうだけどなア。』と言ひながら其處を出て勝手の座敷から女中部屋まで覗きこんだ。女中部屋など從來入つたことも無かつたのであるが、見ると高窓が二尺ばかり聞け放しになつてゐるので、何心なく其處から首をひよいと出すと、直ぐ眼下に隣のお源が居て、お源が我知らず見上げた顔とびたり出會つた。お源はサと顔を眞赤にして狼狽切つた聲を漸と出して、

『お宅では斯ういふ上等の炭をお使ひなさるんですもの、堪りませんわね。』と佐倉の切炭を手につけて居たが、それを手玉に取りだした。窓の下は炭俵が口を開けたまゝ並べである場所で、お源が木戸から井戸邊にゆくには是非この傍を通るのである。

眞藏も一寸狼狽いて答に窮したが、

『炭のことは私共に解らんで……』と莞爾微笑て其まゝ首を引込めて了つた。

眞藏は直ぐ書齋に還つてお源の行爲に就いて考へたが判断が容易に着ない。お源は炭を盗んで居る所であつたとは先づ最初に来る判断だけれど、眞藏は其を其儘確信することが出来ないのである。實際たゞ炭を見て居たのかも知れない、通りがかりだからツイ手に取つて見て居る所を不意に他人から瞰下されて理由もなく顔を赤らめたのかも知れない。まして自分が見たのだから狼狽へたのかも知れない。と考へれば考へられんことでもないのである。眞藏は成るべく後の方に判断したいので、遂にさう心で決定て兎も角何人にも此事は言はんことにした。

しかし萬一若し盗んで居たとすると放下つて置いては後が悪からうとも思つたが、一度見られたら、とても悪事を續行することは得爲まいと考へたから、尙ほ更ら此事は口外しない方が本當だと信じた。

どちらにしてもお徳が言つた通り、彼處へ竹の木戸を植木屋に作らしたのは策の得たるものでなかつたと思つた。

午後三時過ぎて下町行の一行はぞろぞろ歸宅つて來た。一同が茶の間に集まつてがやがやと今日の見聞を今一度繰返して話合ふのであつた。お清は勿論、眞藏も引出されて

相槌を打つて聞かなければならない。禮ちゃんが新橋の勸工場で大きな人形を強請つて困らしたの、電車の中に泥酔者が居て衆人を苦しめたの、眞藏に向つて細君が、所天は寒むがり坊だから大徳で上等飛切の舶來のシャツを買つて來たの、下町へ出ると如何しても思つたよりか餘計にお金を使ふだの、それからそれと留度がない。そして聞く者よりか喋舌て居る連中の方が餘程面白さうであつた。

先づ此がやゝが一頻止むとお徳は急に何か思ひ出したやうに起つて勝手口を出た、が暫時して返つて來て、妙に眞面目な顔をして眼を圓くして、

『まあ驚いた!』と低い聲で言つて、人々の顔をきよるきよる見廻はした。人々も何事が起つたかとお徳の顔を見る。

『まあ驚いた!』と今一度言つて、『お清様は今日屋外の炭をお出しになりやしませんね?』と訊いた。

『否、私は炭籠の炭ほか使はないよ。』

『そうら解つた、私は去日から如何も炭の無くなりかたが變だ、如何炭屋が巧計をして底ばかり厚くするからつて斯うも急に無くなる筈がないと思つて居たので御座います

よ。それで私は想當つてゐる事があるから、昨日お源さんの留守に障子の破れ目から内をちよいと覗いて見たので御座いますよ。さうすると如何でせう。』と、一段聲を低めて『彼の破れ火鉢に佐倉が二片ちやんと埋つて灰が被けて有るぢやア御座いませんか。それを見て私は最早必定さうだと決定して御隠居様に先づ申上げて見ようかと思ひましたが、一つ係蹄をかけて此方で驗した上と考へましたから、今日行つて試たので御座いますよ。』とお徳はにやり笑つた。

『どんな係蹄をかけたの?』とお清は心配さうに訊いた。

『今日出る前に上に並んだ炭に一々符號を付けて置いたので御座います。それが如何でせう、今見ると符號を付けた佐倉が四個そつくり無くなつて居るので御座います。そして土竈は大きなのを二個上に出して符號を付けて置いたら其も無いのです。』

『まア如何したと云ふのだらう。』とお清は呆れて了つた。老母と細君は顔見合して黙つて居る。眞藏は儲は愈々と思つたが今日見た事を打明けただけは矢張見合はした。つまり眞藏には左様までするに忍びなかつたのである。

『で御座いますから炭泥棒は何人だか最早解つてます。如何致しませう。』とお徳は人々

が此事件を喫驚して、轟々と論評を初めて呉れるだらうと豫期してゐたのが、お清が聲を出して呉れた外、旦那を初め後の人は黙つて居るので、少し張合が抜けた調子で斯う問うた。暫時誰も黙つて居たが、

『如何するツて、如何するの?』とお清が問ひ返した、お徳は少々焦燥たくなり、

『炭をですよ。炭を彼のまゝにして置けばこれから幾干でも取られます。』

『臺所の縁の下は如何だ』と眞藏は放擲つて置いてもお源が今後容易に盗み得ぬことを知つて居るけれど、其理由を打明けまいと決心てるから、仕様事なしに斯う言つた。

『充滿で御座います。』とお徳は一言で拒絶した。

『さうか。』と眞藏は黙つて了ふ。

『それぢやア斯うしたら如何だらう。お徳の部屋の戸棚の下を明けて當分兎も角彼處へ炭を入れることにしたら。そしてお徳の所有品は中の部屋の戸棚を整理して入れたら。』と細君が一案を出した。

『それぢやア左様致しませう。』とお徳は直ぐ賛成した。

『お徳には少し氣の毒だけれど。』と細君は附加した。

『否、私は「中の部屋」のお戸棚へ衣類を入れさして頂ければ尙ほ結構で御座います。』
『それぢや先あ左様決定るとして、全體物置を早く作れといふのに眞藏がぐづくして
居るから斯ういふことになるのです。物置さへあれば何のこともないのに。』と老母が漸
と口を利たと思つたら物置の愚痴。眞藏は頭を搔いて笑つた。

『否、斯ういふことになつたのも、竹の木戸のお蔭で御座いますよ、ですから私は彼處
を開けさすのは泥棒の入口を作へるやうなものだと申したので御座います。今となりや
泥棒が泥棒の出入口を作へたやうなものだ。』とお徳が思はず地聲の高い調子で言つたの
で、老母は急に、

『靜に、靜に、そんな大きな聲をして聽かれたら如何します。私も彼處を開けさすのは厭
ぢやつたが開けて了つた今急に如何もならん。今急に彼處を塞げば角が立つて面白くな
い。植木屋さんも何時まで彼様物置小屋見たやうな所にも居られんで移轉なり如何なり
するだらう。そしたら彼所を塞ぐことにして今は唯だ何にも言はんで知らん顔を仕てる。
お徳も決してお源さんに炭の話など仕ちやなりません。現に盗んだ所を見たのではな
し、又高が少しばかりの炭を盗られたからつて其を荒立て、彼人者だちに怨恨れたら猶

ほ損になりますぞ。眞實に。』と老母は老母だけの心配を諄々と説いた。

『眞實に左様よ。お徳は如何かすると譏諷を言ひ兼ねないがお源さんに其様ことでもす
ると大變よ、反對に物言を附けられて如何な目に遇ふかも知れんよ、私は彼の亭主の磯が
氣味が悪くつて成らんよ。變妙來な男ねえ。彼様奴に限つて向ふ不見に人に喰つてか
かるよ。』とお清も老母と同じ心配。老母も磯吉のことは口には出さなかつたが、心には
無論それが有つたのである。

『何に彼男だつて唯の男サ。』と眞藏は立上がりながら『然ども先ア關係はんが可い。』
眞藏は自分の書齋に引込み、炭問題も一段落着いたので、お徳とお清は大急ぎで夕御
飯の仕度に取り掛つた。

お徳はお源が如何な顔をして現はれるかと内々待つて居たが、平常も夕方には必然水
を汲みに來るのが姿も見せないので不思議に思つて居た。
日が暮れて一時間も経つてから磯吉が水を汲みに來た。

（下）

お源は眞藏に見られても巧く誤魔化し得たと思つた。恰度眞藏が窓から見下した時は

土竈炭を袂に入れ佐倉炭を前掛に包んで左の手で壓へ、更に一個取らうとする處であつたが、元來性質の良い邪推などの無い旦那だから多分氣が附かなかつただらうと信じた。けれど夕方になつて如何しても水を汲みにゆく氣になれない。

そこで磯吉が仕事から歸る前に布團を被つて寝て了つた。寝たつて眠むられは仕ない。垢染た煎餅布團でも夜は磯吉と二人で寝るから互の體温で寒氣も凌げるが一人では板のやうにしやちこ張つて身に着かないで起きて居るよりも一倍寒く感ずる。ぶる／＼慄へさうになるので手足を縮められるだけ縮めて丸くなつた處を見ると人が寝てるとは承知ん位だ。

色々考へると厭惡な心地がして來た。貧乏には慣れてるがお源も未だ泥棒には慣れない。先日からちよ／＼盗んだ炭の高こそ多くないが、確的に人目を忍んで他の物を取つたのは今度が最初であるから、一念其處へゆくと今までにない不安を覺えて來る。此不安の内には恐怖も羞恥も籠つて居た。

眼前にまさ／＼と今日の事が浮んで來る、見下した旦那の顔が判然出て來る、そしてテレ隠しに炭を手玉に取つた時のことを思ふと顔から火が出るやうに感じた。

『眞實に如何したんだらう。』とお源は思はず叫んだ。そして徐々逆上氣味になつて來た。『若しか知れたら如何する。』

『知れるものか彼旦那は性質が良いもの。』『性質の良いは當にならない。』『性質の善良のは魯鈍だ。』と促急込んで獨問答をして居たが、

『魯鈍だ、魯鈍だ、大魯鈍だ。』と思はず又叫んで『フト何が知れるものか。』と添足した。そして布團から首を出して見ると日が暮れて入口の障子戸に月が射して居る。けれども起きて洋燈を点けようとも仕ないで、直ぐ首を引込て又丸くなつて了つた。そこへ磯吉が歸つて來た。

頭が割れるやうに痛むので寝たのだと聞いて、磯は別に怒りもせず驚きもせず自分で燈を点け、藥罐が微温湯だから火鉢に炭を足し、水も汲みに行つた。湯の沸騰るを待つ間は煙草をパク／＼吹してゐたが、

『如何痛むんだ。』

返事がないので、磯は丸く凸起つた布團を少時熟と視て居たが

『オイ如何痛むんだイ。』

相變らず返事がないので磯は黙つて了つた。其中湯が沸騰して来たから例の通り氷のやうに冷えた飯へ白湯を注いで澤庵をバリく、待ち兼ねた風に食ひ初めた。

布團の中でお源が啜泣する聲が聞えたが磯には香物を噛む音と飯を流し込む音と、美味いので夢中になつて居るので聞えなかつた、そして飯を食ひ終つたころには啜泣の聲も止んだのである。

磯が火鉢の縁を忽々叩き初めるや布團がむくく動いて居たが、やがてお源が半分布團に卷纏つて其處へ坐つた。前が開いて膝頭が少し出て居ても合さうとも仕ない。見ると逆上せて顔を赤くして眼は涙に潤み、頻りに啜泣を爲して居る。

『如何したと云ふのだ。え？』と磯は問うたが、此男の持前として驚いて狼狽へた様子は少しも見えない。

『磯さん私は最早つく／＼厭になつた。』と言ひ出してお源は涙聲になり、

『お前さんと同棲になつてから三年になるが、其間眞實に食ふや食はずで今日はと思つた日は一日だつて有りやしないよ。私だつて何も樂を仕ようとは思はんけれど、これぢや餘りだと思ふわ。お前さんこれぢや乞食も同然ぢや無いか。お前さん左様は思はないの？』

磯は黙つて居る。

『これぢや唯だ食つて生きてるだけぢやないか。餓死する者は世間に滅多にありや仕ないから、食つて生きてるだけなら誰だつてするよ。それぢや餘り情ないと私は思ふわ。』涙を袖で拭いて『お前さんだつて立派な職人ぢやないか、それに唯た二人限の生活だよ。それが如何だらう、のべつ貧乏の仕通しで其貧乏も唯の貧乏ぢや無いよ。満足な家には一度だつて住まないで何時でも斯様物置か——』

『何を何時までべらく喋舌つてるんだい。』と磯は矢張お源の方は向かないで、手荒く煙管を撃いて言つた。

『お前さん怒るなら何程でもお怒り。今夜といふ今夜は私は如何あつても言ふだけ言ふよ。』とお源は急促込んで言つた。

『貧乏が好きなき者はないよ。』

『そんなら何故お前さん月の中十日は必然休むの？ お前さんはお酒は呑まないし外に道樂はなし、満足に仕事に出てさへお呉れなら如斯貧乏は仕ないんだよ。——』

磯は火鉢の灰を見つめて黙つて居る。

『だからお前さんが最少し精出してお呉れなら、此節のやうに計量炭もろくに買へないやうな情ない……』

お源は布團へ打伏して泣きだした。磯吉はふいと起つて土間に下りて麻裏を突掛けるや戸外へ飛び出した。戸外は月冴えて風はないが、骨身に徹へる寒さに磯は大急ぎで新開の通へ出て、七八丁もゆくと金次といふ仲間が居る。其家を訪ねて、十時過まで金次と將棊を指して遊んだが歸掛に一寸一圓貸せと頼んだ。明日なら出来るが今夜は一文もないと謝絶られた。

歸路に炭屋がある。此店は酒も薪も量炭も賣り、大庭も此店から炭薪を取り、お源も此店へ炭を買ひに来るのである。新開地は店を早く終ふので此店も最早閉つて居た。磯は少時く此店の前を迂路々々して居たが急に店の軒下に積んである炭俵の一個をひよいと肩に乗せて直ぐ横の田圃道に外れて了つた。

大急ぎで歸宅つて土間にどしりと俵を下した音に、泣き寢入に寢入つて居たお源は眼を覺したが聲を出さなかつた。そして今のは何の響とも氣に留めなかつた、磯も其儘お源の後から布團の中に潜り込んだ。

翌朝になつてお源は炭俵に氣が着き、喫驚して

『磯さん此は如何したの、此炭俵は？』

『買つて來たのサ。』と磯は布團を被つてるまゝ答へた。朝飯が出来るまでは磯は床を出ないのである。

『何店で買つたの？』

『何處たつて可いぢやないか。』

『聞いたつて可いぢやないか。』

『初公の近所の店だよ。』

『まア如何して其様遠くで買つたの。……オヤお前さん今日お米を買ふお錢を費つて了やアしまいね。』

磯は起上つて、『お前がやれ量炭も買へんだのつて八かましく言ふから昨夜金公の家へ往つて借りやうとしたら無いつてやがる。其れから直ぐ初公の家へ往つたのだ。炭を買ふから少許貸せといつたら一俵位なら俺家の酒屋で取つて往けと大きなこと言ふから、直ぐ其家で初公の名前で持つて來たのだ。それだけあれば四五日は保るだらう。』

『まあ左様。』と言つてお源はよろこんだ。直ぐ口を明けて見たかつたけれど、先ア後の事と、せつせと朝飯の仕度をしながら、『え、四五日どころか自宅なら十日もあるよ。』昨夜磯吉が飛出した後でお源は色々に思ひ難んだ末が、亭主に精出せと勧める以上、自分も氣を腐らして寝て居ちや何もならない、又たお隣へも顔を出さんと却つて疑はれると斯う考へたのである。

其處で平常の通り辨當持たせて磯吉を出してやり、自分も飯を食べて一通片附いたところでバケツを持つて木戸を開けた。

『お清とお徳が外に出て居た。お清はお源を見て、』

『お源さん大變顔色が悪いね、如何か仕たの。』

『昨日から少し風邪を引いたもんですから……』

『用心なさいよ、それは不可い。』

お徳は「お早う」と口早に挨拶した限り何も言はない。そしてお源が炭俵の並べてないに氣が着き顔色を變へて眼をぎよろ／＼として居るのを見て、にやり笑つた。お源は又た早くも之を看取りお徳の顔を睨みつけた。お徳は斯う睨みつけられたとなると最早

喧嘩だ、何か甚い皮肉を言ひたいがお清が傍に居るので辛抱して居ると、十八九になる増屋の御用聞が木戸の方から入つて來た。増屋とは昨夜磯吉が炭を盗んだ店である。

『皆様お早う御座います。』と挨拶するや、昨日まで戸外に並べてあつた炭俵が一個見えないので、『オヤ炭は何處へ片附けたのですか。』

お徳は待つてたといふ調子で、

『あア悉皆内へ入れちやつたよ。外へ置くと如何も物騒だからね。今の高價い炭を一片だつて盗られちや馬鹿々々しいやね。』とお源を見る、お清はお徳を睨む。お源は水を汲んで二歩三歩歩るき出したところであつた。

『全く物騒ですよ、私の店では昨夜到頭一俵盗まれました。』

『如何して。』とお清が問うた。

『戸外に積んだまゝ、平時放下つて置くからです。』

『何炭を盗られたの。』とお徳は執着くお源を見ながら聞いた。

『上等の佐倉炭です。』

お源は此等の問答を聞きながら、齒を喰ひしばつて、蹠躑いて木戸の外に出た。

土間に入るやバケツを投るやうに置いて大急ぎで炭俵の口を開けて見た。
『まア佐倉炭だよ！』と思はず叫んだ。

お徳は老母からも細君からも、みつしり叱られた。お清は日の暮になつてもお源の姿が見えないので心配して御機嫌取りと風邪見舞とを兼ねてお源を訪ねた。内が餘り寂然して居るので、『お源さん、お源さん。』と呼んで見た。返事がないので可恐々ながら障子戸を開けると、お源は炭俵を脚纏にしたらしく土間の真中の梁へ細帯をかけて死んで居た。

二日経つて竹の木戸が破壊された。そして生垣が以前の様に復歸つた。
それから二月経つと磯吉はお源と同年輩の女を女房に持つて、澁谷村に住んで居たが、矢張豚小屋同然の住宅であつた。

窮 死

九段坂の最寄にけちなめし屋がある。春の末の夕暮に一人の男が大儀さうに敷居をまたげた。既に三人の客がある。まだ洋燈を點けないので薄暗い土間に居並ぶ人影も朧である。

先客の三人も今來た一人も皆な土方か立んばう位の極く下等な労働者である。餘程都合の可い日でないと白馬も碌々は飲めない仲間らしい。けれども先の三人は、多少か好結果かつたと見えて思ひくりに飲つて居た。

『文公、さうだ君の名は文さんとか言つたね。身體は如何だね。』と角張つた顔の性質の良さうな四十を越した男が隅から聲をかけた。

『難有う、どうせ長くはあるまい』と今來た男は捨ばちに言つて、投げるやうに腰掛に身を下して、両手で額を押へ、苦しい咳嗽をした。年頃は三十前後である。

『さう氣を落すものぢやアない、しつかりなさい』と此店の亭主が言つた。それぎりで

誰も何とも言はない。心のうちでは「長くあるまい」と云ふのに同意をして居るのである。『六錢しか無い、これで何でも可いから……』と言ひさして、咳嗽で食はして貰ひたいといふ言葉が出ない。文公は頭の髪を両手で握かんで悶いて居る。

めそ／＼泣いてゐる赤兒を脊負つたおかみさんは洋燈を點けながら、

『苦しうだ、水をあげようか。』と振り向いた。文公は頭を横に振つた。

『水よりか此方が可い、これなら元氣がつく』と三人の一人の大男が言つた。此男は此店には馴染でないと見えて先刻から口をきかなかつたのである。突きだしたのが白馬の杯、文公は又も頭を横にふつた。

『一本つけよう。矢張これでないとな元氣がつかない。代價は何時でも可いから飲つた方が可からう。』と亭主は文公が何とも返事せぬ中に白馬を一本つけた。すると角ばつた顔の男が、

『何に文公が拂へない時は自分が如何にでもする。えッ、文公、だから一ツ飲つて見な。』それでも文公は頭を押へたまゝ黙つて居ると、間もなく白馬一本と野菜の煮物を少しばかり載せた小皿一つが文公の前に置かれた。此時やつと頭を上げて、

『親方どうも濟まない。』と弱い聲で言つて又も咳息をしてホツと溜息を吐いた。長顔の瘦せこけた顔で、頭は五分刈がそのまゝ伸びる丈のびて、もくくちやになつて少しの光澤もなく灰色が／＼つて居る。

文公のお蔭で陰氣勝になるのも仕方がない、しかし誰もそれを不平に思ふ者はないらしい。文公は續けざまに三四杯ひつかけて又たも頭を押へたが、人々の親切を思はぬでもなく、又た深く思ふでもない。まるで別の世界から言葉をかけられたやうな氣持もするし、うれしいけれど、それがそれまでの事である事を知つて居るから『どうせ長くはない』との感を暫時の間でも可いから忘れたくても忘れる事が出来ないのである。身體にも心にも呆然としたやうな絶望的無我が霧のやうに重く、あらゆる光を遮つて立ちこめて居る。

空腹に飲んだので、間もなく酔がまはり稍や元氣づいて來た。顔をあげて我知らずじやりと笑つた時は四角の顔が直ぐ、

『そら見ろ、氣持が直つたらう。飲れ飲れ。一本で足りなきやアもう一本飲れ、私が引受けるから何でも元氣を加るにやアこれに限るツて事よ！』と御自身の方が大元氣にな

つて来たのである。

此時、外から二人の男が駈け込んで来た。何れも土方風の者である。『とうとう降て来アがつた。』と叫んで思ひくゞに席を取つた。文公の来る前から西の空が眞黒に曇り、遠雷さへ轟きて只ならぬ氣勢であつたのである。

『何に、直ぐ晴ります。だけど今時分の驟雨なんて餘程氣まぐれだ。』と亭主が言つた。二人が飛込んでから急に賑うて来て、何時しか文公に氣をつける者も無くなつた。外はどしや降りである。二個の洋燈の光線は赤く微かに、陰影は闇く遍く此煤けた土間を籠めて、荒くれ男の赭顔だけが右に左に動いて居る。

文公は恵まれた白馬一本をちびくゞ飲み了ると飯を初めた、これも赤兒を脊負た女主人の親切で鱈腹喰つた。そして出掛けると急に亭主が此方を向いて、

『未だ降つてるだらう、止でから行きな。』

『たいしたことは有るまい。皆様どうも難有う』と穴だらけの外套を頭から被つて外へ出た。最早晴り際の小降りである。兎も角も路次を辿つて通街へ出た。亭主は雨が止んでから行きなと言つたが、何處へ行く？ 文公は路次口の軒下に身を寄せて往來の上下を

見た。幌人車が威勢よく駈けて居る。店々の灯火が道路に映つて居る。一二丁先の大通を電車が通る。さて文公は何處へ行く？

めし屋の連中も文公が何處へ行くか勿論知らないが併し何處へ行かうと、それは問題でない。何故なれば居残つて居る者の中でも、今夜は何處へ宿るかを決定して居ないものがある。この人々は大概、所謂居所不明、若くは不定な連中であるから、文公の今夜の行先など氣にしないのも無理はない。然し彼の容態では遠からずまゐつて了うだらうとは文公の去つた後での噂であつた。

『可憐さうに。養育院へでも入れば可い。』と亭主が言つた。

『所が其養育院とかいふ奴は面倒臭くつてなかく入られないといふ事だぜ。』と客の土方の一人がいふ。

『それぢやア行倒だ！』と一人がいふ。

『誰か引取人が無いものか。全體野郎は何國の者だ。』と一人がいふ。

『自分でも知るまい。』

實際文公は自分が何處で生れたのか全く知らない、両親も兄弟も有るのか無いのかすら

知らない、文公といふ稱呼も誰いふとなく自然に出来たのである。十二歳頃の時、浮浪少年とのかどで、暫時監獄に飼はれて居たが、色々の身の爲になるお話を聞かれた後、門から追ひ出れた。それから三十幾歳になるまで種々な労働に身を任して、やはり以前の浮浪生活を續けて来たのである。此冬に肺を患でから薬一滴飲むことすら出来ず、土方にせよ、立坊にせよ、それを休めば直ぐ食ふことが出来ないものであつた。

『最早だめだ』と十日位前から文公は思つてゐた。それでも稼げるだけは稼がなければならぬ。それで今日も朝五錢、午後に六錢だけ漸く稼いで、其六錢を今めし屋で費つて了つた。五錢は晝めしに成つて居るから一文も残らない。

さて文公は何處へ行く？ 茫然軒下に立つて眼前の此世の様を熟と見て居る中に、『ア、寧ろ死で了ひたいなア』と思つた。此時、惡寒が全身に行きわたつて、ぶる／＼と慄へた、そして續けざまに苦しい咳息をして咽入つた。

ふと思ひ附いたのは今から二月前に日本橋の或所で土方をした時知り合になつた辦公といふ若者が此近處に住んで居ることであつた。道惡を七八丁飯田町の河岸の方へ歩いて闊い狭い路次を入ると突當に鐵葉葺の棟の低い家がある。最早雨戸が引寄せてある。

辿り着いて、それでも思ひ切つて、

『辦公、家か。』

『誰だい。』と内から直ぐ返事がした。

『文公だ。』

戸が開いて、『何の用だ。』

『一晩泊めて呉れ。』と言はれて、辦公直ぐ身を横に避けて、

『まアこれを見て呉れ、何處へ寝られる？』

見れば成程三疊敷の一室は名ばかりの板の間と、上口に漸く下駄を脱ぐだけの土間とがあるばかり、其三疊敷に寢床が二つ敷いてあつて、豆洋燈が板の間の箱の上に載せてある。其薄い光で一ツに寢床に寝て居る辦公の親父の頭が朧に見える。

文公の黙つて居るのを見て、

『常例の婆々の宿へ何故で行かねえ？』

『文なした。』

『三晩や四晩借りたつて何だ。』

『ウンと借が出来て最早行ねえんだ。』と言ひ様、咳息をして苦しい息を内に引くや思はずホツと疲れ果てた嘆息を洩した。

『身體も良く無いやうだナ。』と辨公初めて気がつく。

『すつかり駄目になつちやつた。』

『そいつは氣の毒だなア』と内と外で暫時無言で衝立て居る。すると未だ寢着れないで居た親父が頭を擡げて、

『辨公、泊めて遣れ、二人寢るのも三人寢るのも同じことだ。』

『同じことは一つこつた。それぢやア足を洗ふんだ。この磨滅下駄を持つて其處の水道で洗つて來な。』と辨公景氣よく言つて、土間を探り、下駄を拾つて渡した。

其處で文公は漸と宿を得て、二人の足の裾に丸くなつた。親父も辨公も晝間の激しい労働で熟睡したが文公は熱と咳息とで終夜苦しめられ曉天近くなつて漸と寢入つた。

短夜の明け易く四時半には辨公引窓を明けて飯を焚きはじめた。親父も間もなく起きて身支度をする。

飯米が出来るや先づ辨公は其日の辨當、親父と自分との一度分を作へる。終つて二人

は朝飯を食ひながら親父は低い聲で、

『此若者は餘程身體を痛めて居るやうだ。今日は一日そつとして置いて仕事を休ます方が可からう。』

辨公は頬張つて首を縦に二三度振る。

『そして出がけに、飯も煮いてあるから勝手に食べて一日休めと言へ。』

辨公はうなづいた。親父は一段聲を潜めて、

『他人事と思ふな、乃公なんぞ最早死なうと思つた時、仲間の者に助けられたなア一度や二度ぢやアない。助けて呉れるのは何時も仲間中だ、汝も此若者は仲間だ助けて置け。』

辨公は口をもごくししながら親父の耳に口を寄せて、

『でも文公は永くないよ。』

親父は急に箸を立て、睨みつけて、

『だから猶ほ助けるのだ。』

辨公は又も從順にうなづいた。出がけに文公を揺り起して、

『オイ一寸と起きねえ、これから我等は仕事に出るが、兄公は一日休むが可い。飯も炊

いてあるからナア、イ、カ留守を頼んだよ。』

文公は不意に起されたので、驚いて起き上がりかけたのを辨公が止めたので、又た寢て、その言ふことを聞いて唯だうなづいた。

餘り當にならない留守番ながら雨戸を引寄せて親子は出て行つた。文公は留守居と言はれたので直ぐ起きて居たいと思つたが轉つて居るのが結極樂なので十時頃まで眼だけ覺めて起き上らうとも爲なかつたが、腹が空つたので苦しいながら起き直つて、飯を食つて又たごろりとして夢現で正午近くなると又た腹が空る。それで又た食つてごろついた。

辨公親子は或親分に屬して市の埋立工事の土方を稼いで居たのである。辨公は堀を埋る組、親父は下水用の土管を埋る爲めの深い溝を掘る組。それで此日は親父は溝を掘つて居ると午後三時頃、親父の跳上げた土が折しも通りかゝつた車夫の脚にぶつかつた。此車夫は車も衣装も立派で乗せて居た客も紳士であつたが、突如人車を止めて、『何をしやアがるんだ、』と言ひさま溝の中の親父に土の塊を投げつけた。

『氣をつけろ、間拔め』といふのが捨臺詞で其儘行かうとすると、親父は承知しない。

『此野郎！』といひさま道路に這ひ上つて、今しも梶棒を上げかけて居る車夫に土を投げつけた。そして、

『土方だつて人間だぞ、馬鹿にしやアがんな、』と叫べんだ。

車夫は取つて返し、二人は擱合を初めたが、一方は血氣の若者ゆゑ、苦もなく親父を溝に突き落した。落ちかけた時調子の取りやうが悪かつたので棒が倒れるやうに深い溝に轉げ込んだ。その爲め後腦を甚く撃ち肋骨を折つて親父は悶絶した。

見る間に附近に散在して居た土方が集まつて来て、車夫は毆打られるだけ毆打られ其上交番に引きずつて行かれた。

蟲の呼吸の親父は戸板に乗せられて親方と仲間の土方二人と、氣拔けのしたやうな辨公とに送られて家に歸つた。それが五時五分である。文公は此騒に喫驚して隅の方へ小さくなつて了つた。間もなく近所の醫師が来る事は來た。診察の型だけして、『最早脈がない。』と言つたきり、そこへ去つて了つた。

『辨公毅然しな、俺が必然仇を取つてやるから。』と親方は言ひながら財布から五十錢銀貨を三四枚取り出して、『これで今夜は酒でも飲んで通夜をするのだ、明日は早くから俺

も来て始末をしてやる。」

親方の去つた後で今まで外に立つて居た仲間の二人は兎も角内へ入つた。けれども坐る處がない。此時辨公は突然文公に、

『親父は車夫の野郎と喧嘩をして殺されたのだ。これを興るから木賃へ泊つて呉れ。今夜は仲間と通夜をするのだから。』と貰つた銀貨一枚を出した。文公はそれを受取つて、

『それぢやア親父さんの顔を一度見せて呉れ。』

『見る。』と言つて辨公は被せてあつたものを除つたが、此時は最早薄闇いので、明白しない。それでも文公は熟と見た。

*

*

*

*

*

*

飯田町の狭い路次から貧しい葬儀が出た日の翌日の朝の事である。新宿赤羽間の鐵道

線路に一人の轢死者が発見つた。

轢死者は線路の傍に置かれたまゝ、薦が被けて有るが、頭の一部と足の先だけは出て居た。手が一本ないやうである。頭は血にまみれて居た。六人の人がこの周圍をウロ／＼して居る。高い堤の上に兒守の小娘が二人と職人體の男が一人、無言で見物して居るばかり、

り、四邊には人影がない。前夜の雨がカラリと霽つて若草若葉の野は光り輝いて居る。

六人の一人は巡查、一人は醫師、三人は人夫、そして中折帽を冠つて二子の羽織を着た男は村役場の者らしく線路に沿うて二三間の所を往つ戻りつして居る。始終談笑して居るのが巡查と人夫で、醫者はこめかみの邊を両手で押へて蹲居んで居る。蓋し棺桶の來るのを皆が待つて居るのである。

『二時の貨物車で轢かれたのでせう。』と人夫の一人が言つた。

『その時は未だ降つて居たかね?』と巡查が煙草に火を點けながら問うた。

『降つて居ましたとも。雨の上つたのは三時過ぎでした。』

『どうも病人らしい。ねえ大島様。』と巡查は醫師の方を向いた、大島醫師は巡查が煙草を吸つて居るのを見て、自身も煙草を出して巡查から火を借りながら、

『無論病人です。』と言つて轢死者の方を一寸と見た。すると人夫が、

『昨日其處の原を徘徊して居たのが此野郎に違ひありません。たしかに此の外套を着た野郎です、ひよろ／＼歩いては木の蔭に休んで居ました。』

『さうすると何だナ、矢張り死ぬ氣で來たことは來たが晝間は死ねないで夜行つたの

だナ。』と巡查は言ひながら疲勞れて、上り下り兩線路の間に躡んだ。
 『奴さん彼の雨にどしどし降られたので、如何にもかうにも忍耐きれなくなつて其處の堤から轉り落ちて線路の上へ打倒れたのでせう。』と人夫は見たやうに話す。
 『何しろ憐れむ可き奴サ。』と巡查が言つて何心なく堤を見ると、見物人が増えて學生らしいのも交つて居た。

此時赤羽行の汽車が朝暈を眞ともに車窓に受けて威勢よく駛つて來た。そして火夫も運轉手も乗客も皆な身を乗出して、薦の被けてある一物を見た。

此一物は姓名も原籍も不明といふので例の通り假埋葬の處置を受けた。これが文公の最後であつた。

實に人夫が言つた通り文公は如何にも斯うにもやりきれなくつて倒れたのである。

疲 勞

京橋區三十間堀に大來館といふ旅館がある、先づ上等の部類で客は皆な紳士紳商。電話は客用と店用と二種かけて居る位で、年中十二三人から三十人までの客が有るとの事。或年の五月なかばごろである、帳場に坐つて居る番頭の一人が、通りがりの女中を呼んで、

『お清さん、これを大森様の所へ持つていつて、此方が先程來ましたが不在だと言つて斷りましたつて……』

と一枚の小形の名刺を渡した。お清はそれを受とつて梯子段を上つた。

午後二時頃で大概の客は實際不在であるから家内しんとして極めて静かである。中庭の青桐の若葉の影が拭きぬいた廊下に映つてびか／＼光つて居る。

北の八番の唐紙をすつと開けると内に二人。一人は主人の大森龜之助。一人は正午前から來て居る客である。大森は机に向つて電報用紙に萬年筆で電文を認めて居るところ、

客は上衣を脱いで胴衣一つになり頻に書類を調べて居るところ、煙草盆には埃及煙草の吸ひ殻がくしゃくしゃに突込んである。

大森は名刺を受とつてお清の口上を終局まで聴かず、

『オイ君、中西が来た！』

『そして如何した？』

『いま君が聴いた通りサ、不在だと言つて歸へしたのだ。』

『そいつは弱つた。』

『彼奴一週間後でなければ上京されないと言つて来たから。帳場に彼奴のことを言つて置かなかつたのだ。まあ可いサ、上京て来て呉れたに越したことはない。これから二人で出かけよう。』

頭髪の少し禿げた、でつぶり肥つた客は『ウン』と言つたぎり黄金縁眼鏡の中で細い眼をばちつかして、鼻下の眞黒な髭を右手でひねくり乍ら考へて居る。それを見て大森は煙草を取つて煙草盆をつゝきながら靜かに、

『それとも呼ばうか？』

『まあ其方が可いな。此方が彼奴ばかりに依頼て居るやうに思はれるのは馬鹿げて居るからな。』

大森は『ちよつと』と言つて一口吸つた煙草を灰に突込み机に向つて急速いで電文を書き了り、今までぼんやり控へて居たお清にそれを渡して、

『直ぐ出さしてお呉れ。』

お清は座敷を出た。大森は又た煙草を取つて、

『それも左様だ、彼の先生伶俐で居て馬鹿だから餘り此方で騒ぐと直ぐ高く止つて率直に承知することも故意とぐづりたがるからね。』

『それで居て此方で少し大きく出ると又直ぐ怒るのだ。始末にいけない。』と客に言つて大欠伸を一ツして『兎に角呼ぶとしようぢやアないか。』

『何時呼ばう？』と言つてこれも貰ひ欠伸をした。

『今夜は如何だ。今呼んだつて彼奴旅宿に居やアしない。』

大森は机の上の黄金時計をのぞいて、
『二時四十分か。今はとても居ない。しかし』と又た時計をのぞいて、少し考へて『明

日の朝早くしようぢやアないか。中西が来たとなれば僕はこれから駿河臺の大將に會つて置くほうが可いと思ふ。』

『成程それは其方が可い。』

『それから今夜は澤田を呼んで見本の説明の順序を能く作つて置いて貰ふことにする。』
『成程そいつは猶ほ大切だ。我々だつて中西が對手なら結構證明位は出来るが、それは澤田に越した事はない。それぢやア左様決めた。これから手紙を持たしてやつて、電話ぢやア駄目だよ、そして明朝午前八時までには御來車を仰ぐとでもして置かう。』

『よし手紙を直ぐ持たしてやらう』と大森は巻紙を執つてすらく〜と書き出した。其間に客は取散してあつた書類を丁寧に取りそろへて大きな手革包に納めた。

『中西の旅宿は随分しみみつたれて居るが、彼奴よく辛抱して取換へないね。』と大森は封筒へ宛名を書きながら言つた。

『常旅宿となると矢張居心地が可いからサ』と客は答へて上衣を引寄せ、片手を通しながら、『君大將に會つたら例の一件を何とか決定して貰はないと僕が非常に困ると言つて呉れ給へ。大將は如何かして物にしてやらうと言ふので手間取つて居るだらうがそれぢやア

實際君の知つてる通り僕がやりきれない、故郷の奴等人に事を頼む時はわい〜言つて騒ぐ癖に、その事が甘くゆくと見向もしないんだ。人を馬鹿にしてやアがる。だから大將にどちらでも可いから駄目だとか出来るとか、明白に早く決定を與へて貰ひたいと言つて呉れ給へ、大將あれで馬鹿に人が善いから頼むと何でもかんでも左様してやらなければならんと心得てるから遣り切れない仲に立つてる者は難有迷惑だ。』と言つてる中に上衣を着て了ふ、何時大森がベルを押したか、女中が入つて來た。

『これは奇妙不思議だ、中西へ手紙をやらうとすると、お蝶さんがやつて來る、争へんものだ。』と大森が十七八の少女に手紙を渡す。

『アラ又あんな事をおツしやる、中西さんなんか何でもないワ。眞實に私くやしいわ、皆なして擲揄ふんだもの』と手紙を奪取るやうに取つて、『可いわ、そんな事をおツしやるなら此のお手紙を何處へ打捨つてしまふから。』

『イヤ謝罪つた、それは大切の手紙だ、打捨られてたまるものか、直ぐ源公に持してやつて呉れ。お蝶さんは善い子だ。』

『蝶ちゃんは善い子だ、序でに人車を。』と客が居住を直して合槌を打つた。

『田浦様、禿が自慢にやなりませんよ』と言ひ捨て、出て去つた。

間もなく車が来て田浦は去り、續いて大森も美麗な宿車で威勢よく出て去つた。午後四時半頃になつて大森は外から歸つて来たが室に入るや、其五尺六寸といふ長身を座敷の真中にごろりと横へて、大の字になつて暫く天井を見つめて居た。四角な引しまつた顔には堪へ難い疲労の色が見える。洋服を脱ぐのも面倒臭いらしい。

間もなくお清が入つて来て、『江上様から電話で御座います。』大森は跳ね起きた。ふらくと眼がくすみさうにしたのを、ウンと踏張つて突立つた時、彼の顔の色は土色をして居た。

けれども電話口では威勢の可い聲で談話をして『それでは直ぐ来て下さい』と答へた。室にかへると又もごろりと横になつて眼を閉ぢて居たが、ふと右の手を舉げて指で數を讀んで何か考へて居るやうであつた。やがて其手がばたり疊に落ちたと思ふと大驚をかいて其顔はさながら死人のやうであつた。

節 操

『房、奥様の出る時何か言つたかい。』と佐山銀之助は茶の間に入ると直ぐ訊いた。『今日は講習會から後藤様へ一寸廻るから少し遅くなると被仰いました。』
『飯を食せろ!』と銀之助は忌々しさに言つて、白布の覆けてある長方形の食卓の前にドツカと坐わつた。

女中の房は手早く爛瓶を銅壺に入れ、食卓の布を除つた。そして更に卓上の食品を彼處此處と置き直して心配さうに主人の様子をうかゞつた。

銀之助は外套も脱がないで兩臂を食卓に突いたまゝ眼を閉ぢて居る。

『お衣服をお着更になつてから召上つたら如何で御座います。』と房は主人の窮屈さうな様子を見て、恐る／＼言つた。御機嫌を取る積りでもあつた。何故主人が不機嫌であるかも略知つて居るので、

『面倒臭い此儘で食ふ、お爛は最早可いだらう。』

房は爛瓶を揚げて直ぐ酌をした。銀之助は會社から歸りに何處かで飲んで來たと見え、此時既にやゝ酔つて居たのである。酔へば蒼白くなる顔は盛々蒼白く秀でた眉を寄せて口を一文字に結んだのを見ると房は可恐と思つた。

二三杯ぐいぐい飲んでホツと嘆息をしたが、銀之助は如何考へて見ても忌々しくつて堪らない。今日は平時より遅く故意と七時過ぎに歸宅つて見たが、矢張豫想通り妻の元子は歸つて居ない。これなら下宿屋に居るも同じことだと思ふ位なら未だ辛抱も出来るが、銀之助の腹の底には或物がある。

『何時頃に歸ると言つた。』

『何とも被仰いませんでした。』と房は言悪さうに答へる。

後藤へ廻はるなら廻はると朝自分が出る前にいくらでも言ふ時があるぢやアないかと思ふと、銀之助は思はず、

『人を馬鹿にして居やアがる。』と唸るやうに言つた。そして酒ばかりぐいぐい呑むので、房は、

『旦那様何か召上がりませんか、』と如何かして機嫌を取る積りで優しく言つた。

『見ろ、

何が食へる。薄ら寒い秋の末に熱い汗が一杯吸へないなんて情ないことがあるものか。下宿屋だつて汗ぐらゐ吸はせる。』

銀之助の不平は最早二月前からのことである。そして平時も此不平を明白に口へ出して言ふ時は『下宿屋だつて』を持出す。決して腹の底の或物は出さない。

房は『下宿屋』が出たので沈黙了つた。銀之助は急に起立がつて、

『出て来る。』

『最早直き奥様がお歸宅りになりませう。』と房は驚いて止めるやうに言つた。『奥様の歸宅のを待たないでも可いぢやアないか。』

銀之助はむちやくちや腹で酒ばかり呑んで斯うやつて居るのが、女房の歸るのを待つて居るやうな氣がしたので、急に外に飛び出したくなつたのである。

『外で何を勝手な眞似をして居るか解りもしない女房のお歸宅を謹んでお待ち申す亭主ぢやアないぞ』といふのが銀之助の腹である。

『それはさうで御座いますが、最早直きお歸りになりませうから。』と房は飽くまで止めようとした。

『歸つたつて可いぢやアないか。乃公は出るから』と言ひ放つて、何か思ひ着いたと見え、急速いで二階に上つた。

火鉢には櫻炭が埋かつて、小さな鐵瓶からは湯氣を吐いて居る。空氣洋燈が煌々と耀いて書棚の角々や、金文字入りの書や、置時計や、水彩畫の金縁や、籐のソハに敷いてある白狐の銀毛などに反射して部屋は綺麗で陽氣である、銀之助はこれが好である。しかし今夜は此等の光景も彼を誘引する力が少しもない。机の上に置いてある彼が不在中に來た封書や葉書を手早く調べた。其中に一通差出人の姓名の書いてない封書があつた。不審に思つて先づ封を切つて見ると驚くまいことか、彼が今の妻と結婚しない以前に關係のあつた靜といふ女からの手紙である。

銀之助は靜と結婚する積りであつたけれど教育が無いとか身分が卑しいとかいふ非難が親族や朋友の間に起り、且つ其純潔すら疑がはれたので遂に何時とはなしに銀之助の方から別れて了つたのであつた。別れて今の妻と結婚して後は靜の成行に就き銀之助は全く知らなかつた。

ところが五年目に突然此手紙、何事かと驚いて讀み下すと其意味は——お別れしてか

ら種々の運命に遇つた末今は或男と夫婦同様になつて居る、然るに貴様との關係と同じく矢張男の家で結婚を許さない、その爲め男は遂に家出して今は愛宕町何丁目何番地小川方に二人して日蔭者の生活をして居る。窮迫に窮迫を重ね、ちびくした借金も積りて今は何としても立行かぬ様となつた。そこで如何なることがあつても貴様にはと誓つて居たけれど其誓も捨て義理も忘れてお願い申すのである、何卒二十圓だけ用意して明晩來て呉れまいか——といふのである。

明晩とは今夜である、銀之助はしみじみ靜の不幸を思つた。靜は男に愛着はれ又た男を愛着ふ女である。そして可憐で正直で伶俐な女であるが不思議と關係のない者からは卑しい人間のやうに思はれる女で實に何者にか咀はれて居るのではないかと思つた。しかし銀之助には以前の戀の情は少しもなかつた。

どうせ飛び出すのだ、何しろ訪ねて見ようと銀之助は先づ懷中を改めると五圓札が一枚と餘は小錢で五六十錢あるばかり。これでも仕方がない不足の分は先方の様子を見てからの事と直ぐ下に降りた。

『房、遅くなつたら閉めても可いよ。』

『アラ如何してもお出になりますので御座いますか。』と房はきよとくして気が氣でない。

『何に心配しないでも可いよ。奥様に急に用が出来たから出たつて言つてお呉れ。』
外は星夜で風の無い静かな晩である。左へ曲れば公園脇の電車道、銀之助は右に折れてお濠邊の通行のない方を選んだ。ふと氣が着いて自宅から二三丁先の或家の瓦斯燈で時計を見ると八時過である。

外で冷かな空氣に觸れると酔が足りない。もすこし飲んで出れば可かつたと思つた。
愛宕町は七八丁の距離しかないので銀之助は靜のこと、今の妻の元子のことを考へながら、歩むともなく徐々歩るいた。

成程比べて見ると靜には何處か卑しいところがあつて、元子にはそれが無い。
靜の卑しいやうに他から思はれるところは何故であるかと考へた。靜には何處かに色ツぽい風がある。女性にはなくてならぬ節操といふ釘が一本足りないで、其爲め身體全體に『たるみ』が出来て居る、其『たるみ』が卑しい色を成して居るのだ、それが證據には自分の前に靜には情夫が有つたらしく、自分の後に今の男があるではないか。

けれども自分の經驗に依ると靜は自分と關係して居る間は、決して自分を不安に思はしめるやうなことは無かつた。正直で可憐で柔和で身も魂も自分に捧けて居るやうであつた。

銀之助は斯う考へて來ると解らなくなつた。節操といふものが解らなくなつた。
成程元子は見たところ節操々々して居る。けれど講習會を名に何をして居るか知れた

ものでない。想像して見ると不審の點は幾多もある。今夜だつて何を働いて居るか自分は見て居ない。自分の見る事も出来ないこと、それが自分に猛烈な苦惱を與へることを元子は實行して居るではないか。

考へれば考へるほど銀之助には解らなくなつた。忌々しさうに頭を振つて、急に急足で愛宕町の闇い狭い路地をぐる／＼廻つて漸と格子戸の小さな二階屋に『小川』と薄暗い瓦斯燈の點つてあるのを發見けた。『小川方』とあつた、よろしいこれだと、躊躇うことなく格子を開けて、

『お宅にお靜さんといふ人が同居して居られますか。』
と訊くや、直ぐ現はれたのが靜であつた。

『能く来て下さいました。待つて居たんですよ。サアどうか上つて下さいました。』と低い艶のある聲は昔のまゝである。

『イヤ上るまい。貴方は一寸出られませんか。』

『さうね、一寸待つて下さい。』と急いで二階へ上つたが間もなく降りて来て、

『それでは其所いらまで御一所に歩きませう。』

二人は並んで黙つて路地を出た。出るや直ぐ銀之助は、

『よくこれが出しましたね。』と親指を静の眼の前へ突き出した。

『アラ彼な事を。相變らす口が悪いのね。』

『別れてから、たつた五年ぢアありませんか。』

『ほんとに五年になりますね、昨日のやうだけれど。』

二人の言葉は一寸途斷れた。そして何所へともなく目的なく歩いて居るのである。

『今のこれとは何時からです。』と銀之助は又た親指を出した。

『これはお止しなさいよ、變ですから。一昨年をの冬からです。』

『それまでは。』

『貴様あなたと不可いけなくなつてから唯だ内に居ました。』
『たゞ。』

『さうよ。』と言つて『おゝ薄ら寒い』と静は銀之助に寄り添つた。銀之助は思はず左の手を静の肩に掛けかけたが止した。

『僕も酔が醒めかゝつて寒くなつて來た。静ちゃんさへ差つかへ無ければ彼の角の西洋料理へ上がつてゆつくり話ませう。』

静は一寸考へて居たが、

『最早遅いでせう。』

『ナアに未だ。』

静は又一寸考へて、

『貴郎私あなたの願を叶へて下さつて。』と言はれて氣が着き、銀之助は停止たちどままつた。

『實は僕今夜は五圓札一枚しか持つて居ないのだ。これは僕の小使錢の餘りだから可いやうなものゝ若しか二十圓と纏ると、鍵の番人をして居る妻君の手からは兎ても取れつこない。どうかして僕が他から工面しなければならぬのは貴女あなたにも解るでせう。だから

今夜はこれだけお持ちなさい。餘は二三日中に如何にか爲ますから。」と紙入から札を出して靜に渡した。

「ほんとに私は、こんなことが貴郎に言はれた義理ぢやないんですけれど、手紙で申し上げたやうな譯で……」

『最早可いよ、僕には解つてるから。』

『だつて全く貴様にお願ひして見る外方法が盡きちやつたのですよ……』

『最早解つてますよ。それで餘の分は何れ二三日中に持つて來ます。』

*

*

*

*

*

*

銀之助は靜に分れて最早歩くのが嫌になり、俥を飛ばして自宅に歸つた。遅くなるとか、閉めても可いとか房に言つたのを忘れて了つたのである。

歸つて見ると未だ元子は歸宅して居ない。房も機嫌を取る言葉がないので沈黙して横を向いてると、銀之助は自分でウキスキーの瓶とコップを持つて二階へ駆け上がった。

精で三四杯あほり立てたので、酔が一時に發して眼がぐらくして來た。此時、

『斷然元子を追ひ出して靜を奪つて來る。卑しくつても節操がなくつても靜の方が可い』

六〇

といふ感が猛然と彼の頭に上ぼつた。

六一

『靜が可い、靜が可い』と彼は心に繰返しながら室内をのそく歩いて居たが、突然ソハの上に倒れて兩手を顔にあて、溢るゝ涙を押へた。

二 老人

(上)

秋は小春の頃、石井といふ老人が日比谷公園のベンチに腰を下して休息んで居る。老人とは言ふものゝ漸と六十歳で足腰も達者、至つて壯健の方である。

日はやゝ西に傾いて赤蜻蛉の翼がきら／＼と光り、風無きに風あるが如く浮々と飛んで居る。老人は眼を瞬たいて其を眺めて居る。看るともなしに見て居る。空々寂々心中何等の思ふことも無い體。

老人の前を幾組かの人が通つた。老へるも若きも、病めるも健かなるも。されど誰あつて此老人を氣に留める者も無く、老人も亦た人が通らうと犬が過ぎ行かうと一切お關ひなし、悠々行路の人、縁なくんば眼前千里、たゞ静かな穩かな蒼天が何時も何時も平等に覆うて居るばかりである。

右の手を左の袂に入れてゴソ／＼やつて居たが、やがて「朝日」を一本取出して口に啣

へた。今度はマツチを出したが箱が半分壊れて、中身は僅に五六本しか無い。生憎に二本摺り損なつて三本目で漸と火が點いた。

スパリ／＼と如何にも旨さうである。青い煙。白い煙眼の先に透明に光つて、渦を巻いて消えゆく。

『オヤ、彼れは徳ぢやいか。』

と石井翁は消えゆく煙の末に浮び出た洋服姿の年若い紳士を見て思つた。芝生を隔てて二十間ばかり先だから判然しない。判然しないが似て居る。脊格好から歩き風まで確に武だと思つたが、彼は足早に過ぎ去つて木陰に隠れて了つた。

此姿のおかげで老人は空々寂々の境に何時までも居る譯にゆかなくなつた。

甥の山上武は二三日前、石井翁を訪うて、口を極めて其無爲主義を攻撃したのである。武を石井老人は何時も徳と呼ぶ。其は武の幼名を徳助と稱つたからで、十二三の頃徳の親父が當世流に武と改名さしたのだ。

徳の姿を見ると二三日前の徳の言葉を老人は思ひ出した。

徳の説く所も萬更無理では無い。道理はあるが、彼の徳の言葉が本氣でない。眞實彼

奴は左様信じて言ふ譯ぢやない。あれは當世流の理窟で、何人も言うたと、言はゞ口前だ。徳の本心は矢張私を引張出して五圓でも十圓でも稼がさうとするのだ。其證據には先達頃までは遊んで暮すのは無駄だ、足腰の達者な内は取れる金なら取るやうにするが得だ。叔父が出る氣さへあれば必然周旋する、如何せ隠居仕事の積りだから十圓だつて決して恥づるに足らんと言つた辭に今度は如何だ、人間一生、いやしくも命のある間は遊んで暮らす法はない、病氣でない限り死ぬるまで仕事をするのが人間の義務だと言ふ。全然理窟の根本が違つて來たぢやないか。——矢張私を稼がす積りサ……とまで考へて來た時、老人は恰度一本の煙草を喫ひ切つた。

石井翁は一年前に或官職を停めて恩給三百圓を貰ふ身分になつた。月に割つて二十五圓、一家は妻に二十になるお菊と十八になるお新の二人娘で都合四人生活、銀行に預けた貯金とても高が知れてるから先づ食つて行けないといふのが世間並である。けれども石井翁は少しも苦しめない。

例を車夫や職工に取つて、食つて行けないはずは無いと主張するのである。無論食ふに食はれない理窟はない、家賃、米代以下お新の學校費まで計算して成程二十五圓で間

に合さうと思へば間に合ふのである。

それで石井翁の主張は、間に合ひさへすれば、それで行つてゆく。今更私が隠居仕事で候のと言つて腰辨當で會社にせよ役所にせよ病院の會計にせよ、五圓十圓と稼いで見て如何する。私は永年のお務を終へて、やれ／＼御苦勞であつたと恩給を頂く身分になつたのだ。治まる聖代の難有さにこれぞといふ失策もせず、長病氣にも罹らず、長官にも下僚にも憎まれも嫌がられもせず務め上げて來たのだ。最早斯うなれば私などは所謂聖代の逸民だ。恩給だけで兎も角も暮せるなら、それを難有く頂戴して、すつかり慾から離れて其日々々を一家睦じく楽しく暮すのが當然だ。よしんば二十五圓に十圓殖えたら幾千の贅澤が出来る。——悉皆慾で慾には限がない——役目となれば五圓が十圓でも、雨の日雪の日にも休む譯には往かない、矢張腰辨當で鼻水を垂らして若い者の中に交つてよぼよぼと通はなければならぬ。オ、嫌厭な事だ！

といふのである。だから役を退いた時、知人や親族の者が、隠居仕事を勧め、中には先方に略交渉をつけて物にして來てまで勧めたが、悉く以上の理由で拒絶して了つたのである。細君は氣輕な人物で何事も斷念の可い性質だから文句はない。愚痴一つ言はな

い。お菊お新の二人も母を助けて飯米も焚けば八百屋へ使者にも行く。斯くてこそ石井翁の無爲主義も實行されて居るのである。

處が武の母は石井翁の細君の妹だけに、此無爲主義を危み、姉は盲従してこそ居れ、女は矢張り女石井様の隠居仕事で二十五圓の上に十圓殖えるなら如何位樂と思ふか知れないと、武をして石井翁を説き落さず積りで居るのである。

彼は變物だと最初世話を仕かけた者が手を退いた時分。或日曜日の午後二時頃、武は様子を見る可く赤坂區南町の石井を訪ねた。傳の入りぬ路地の内で、三軒長屋の最端が其である。中古の建物だから、それほど見苦しくは無い。上口の四疊半が玄關なり茶の間なり長火鉢これに伴なふ一式が列べてある。隣室が八疊、これが座敷、この以外には臺所の傍に薄暗い三疊があるばかり。南向の縁先一間半ばかりの細長い庭には柵を造り、翁の娛樂の鉢物が列べてある。手狭であるが全體が能く整理されて亂雑な態は毛ほどもなく、敷居も柱も縁も能く拭きこまれて、光つて居る。

『御免なさい。』と武は上口の障子を開けたが茶の間に誰も居ない。
『武です。』と添加へた。すると座敷で、

『徳さんかえ、サアお上り。』と言つたのが叔母である。
武は上つて襖を開けると座敷の真中で叔父叔母差向ひの圍碁最中！

見て、微笑つて眼で挨拶したばかり。叔母は、叔父は一寸武を

『徳さん少し待つてお呉れ。直き勝負が着くから。』と一心不亂の體である。
『何卒か御ゆつくり。』と徳さんの武も此外に挨拶の仕様がな。たゞ呆れ返つて、爲様なしに盤面を看て居た。

『徳さんは碁が打てたかね。』と叔父は打ちながら問うた。
『全然で駄目です。』

『でも四目殺ぐらゐは出来るだらう。』
『五目並なら出来ます。』

『ハハ、、、五目並ぢや仕方が無い。』

『叔母さんが碁をお打ちになることは僕些少も知りませんでした。』

『私ですか、私はこれで随分古いのですよ。』と叔母は言つたが振向きもしない。
『常住打つて居らつしやつたのですか。』

『否、やたらに打出したのは此家へ引退んでからですよ。——鳥渡これ待って頂戴。』
 『成りません。』と石井翁、一ぶく點けてスバリ／＼と悠然たるものである。
 『だつて此切斷は全く私の見落しですもの。』
 『だから先刻から私は「待ちませんよ、」待ちませんよ」と二三度も警告を發して置いたぢやないか。』

『待ちませんは貴方の口癖ですよ。』

『誰がそんな癖を付けました、私に。』

武は思はずクスリと笑つた。

『それぢや如何あつても待つて下さらんの。』

『マア待ちますまい、癖に成るから。』

と言はれて叔母は盤面を見渡して暫く考へて居たが、

『それぢや投げませう。其處が切斷ては碁に成りませんもの。』

『先づさう言つた様な形だね。』

其處で叔母は投出した。此れから改つて挨拶が濟むと雑談に移り、武は叔父叔母差向

ひで、

大概毎日碁を打つ事、娘兩人は今日上野公園に散歩に出掛けた事など聞かされた。
 右の次第で徳さんの武も終に手を退いて半歳餘も経つと母親は矢張氣になると見えて如何にかして石井様を説き落して呉れると頼む。其處で武も隠居仕事の五圓十圓説で到底夫婦差向ひの碁打を説落すことは出来ないと思へ、今度は遊食罪惡説を提出して滔滔と卷席立てゝ見た。

石井翁は散々徳さんの武に言はして置いた揚句、

『それぢや山に隠れて木の實を食ひ露を飲んで居る人は如何する。』

『仙人だつて人だ。』

『それぢや叔父さんは仙人ですか。』

『市に隠れた仙人の積りで居るのだ。』

これで武は又も撃退されて了つたのである。

(下)

さて石井翁は煙草一本喫了つた處でベンチを起うとしたが、徳の遊食罪惡説が鳥渡氣

に掛りだしたので又一本取り出して喫ひ初めた。徳の本心を看破いて居る。そして仙人説で撃退は仕たものゝ、成程、未だびんしゃんして居るのに唯だ遊んで食うて居るといふのは褒めたことでは無いやうに思はれる。それなら何をやる。腰辨は眞平だ。田舎に往つて百姓でもするか。こいつは可いかも知れんが、差當つて田地がない。翁は行塞つて了つたので、仙人主義を辯護する理窟に立返つて頻と考へ込んで居ると、どしりとばかり同じベンチに身を投げるやうに腰を下した者がある。振向いて見るや、

『オヤ河田さんぢや無いか。』

先方は全く石井翁に氣が附かなかつたものと見えて、翁に聲を掛けらるゝと卒然飛起つて帽を脱り、

『コレはく、石井様ですか、貴方とは全然氣が附かんで失禮しました。』とぺこくお辭儀をする。そして顔を少し紅らめた様子は餘程狼狽したらしい、矢張六十餘の老人である。

『まあお掛けなさい。そして其後は如何しました。』

『イヤもうお話にも何もありません。』と腰を下しながら、

『相變らずで面目次第も無い譯です。』と胡麻白の亂髮に骨太の指を熊手形に差込んで手荒く搔いた。

石井翁は綿服ながら小ザツパリした衣裝に引更へて此老人河田翁は柳原仕込の荒いスコッチの古洋服を着て、パクく靴を穿いて居る。

『でも何か仕て居られるだらう。』と石井翁はじろく河田翁の様子を見ながら聞いた。そして腹の中で、「成程相變らずだな」と思つた。

『イヤ兎もお話にも何も……』と矢張頭を搔いて居たがポケットから鹿皮の眞黒になつた煙草入と扁曲た鈍豆煙管とを取出した。ところが生憎と煙草は塵埃混合の粉末ばかり其儘又たポケットに仕舞込んだのを見て、石井翁は「朝日」を袋共出して、

『サアお喫ひなさい。』

『イヤこれは如何も』と河田翁は遠慮なく一本抽取つて、石井翁から火を借りた。

此二老人は三十歳前後の頃、或役所で一年餘同僚であつたばかりで無く、石井の親類が河田の親類の親類とかで、石井一家では河田翁の噂は時折出て、「今何を仕て居るだらう」「眞實に彼な氣の毒な人はない」など言はれて居たのである。

『然し遊んでも居なさらんだらうが。』と石井翁は何處までも心配さうに聞く。

『イヤ兎もお話にも何も……』

これが河田翁持前の一つで、人に對すると言ひ度いことも言へなくなり、つまらん所に自分を卑下してしまふのである。

『貴方が私の家へ来てから最早五年になるなア』と石井翁は以前の事を思ひ出した。

『さうなりますかね、早いものだ。……』

『彼の時、貴方が一杯機嫌で「雨の夜に日本近くねぼけて流れこむ」を唄つて踊つた時は面白かつたがね、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、』

『ハ、ハ、』と一緒に笑つたざり河田翁は何も言はない。そして何となくそはくして居る。

三十の年に恩人の無理強ひに屈して、養子に行き、養子先の娘の半狂氣に辛抱しきれず、遂に敬太郎といふ男の兒を連れて飛びだして、其兒は姉に預けて育て、貰ふ、其以後は決して妻帯せず、純然たる獨身者で到頭六十餘歳まで通して來たのが河田翁の一生である。

此獨身者が翁の不遇の原因をなしたのか、不遇が獨身者の原因であつたのか、これを判つことは出来ない。

善人で、酒も強ひては飲まず、これといふ道樂もなく、出入交際の人々には義理を堅くして居て、そして遂に不遇で何時もまご／＼して安定の所を得ず、今日が日に及んだ翁の運命は不思議な事としか思へない。

其處で石井の人々初め翁を知つて居る者は皆「氣の毒な人だ」と言ひ又不思議なことだと評して居る。しかし皆々言ひ合はしたやうに一致して居る「理由」が無いのでもない。第一、石井様は意氣地が無い。其證據には養子に行く前に深く言ひ交した女があつた、愈々養子に行くことと定るや五圓で帯の片側を買つて、それを手切同様に泣く／＼別れた。第二に案外片意地で高慢な所があつて些細な事に腹を立て直ぐ衝突して職業から離れて了ふ。第三に妙に遠慮深い處があること。

成程さう聞かされると翁の知人共の所謂「理由」は多少の「理由」を成して居る。

けれど大なる理由が未だ無ければならぬ。人が若し壯年の時から老人の時まで、純然たる獨身生活即ち親子兄弟の關係からも離れて只だ一人、今の社會に住むなら並大抵の

人は河田翁と同様の運命に陥りはせまいか、老いて益々富み且つ榮えるものだらうか。翁の兒敬太郎は翁と全然無關係で育ち且つ世に立つた。そして二十五六の頃、八百屋を初めたが、間もなく止して、賣卜者になつた。且つ今は行方も知れない。そして見ると河田翁其人の脈絡には「放浪」の血が流れて居るのではないか。それが敬太郎へも流込んだのではないか。

石井翁は無論斯ういふことを考へて研究もせず、たゞ氣の毒がる仲間の一人ゆゑ、何にかして今の境遇も聽いて見たいと思ひ、古い事まで話題にして見たが、河田翁は少しも引立ない。たゞそはくして居る。

『何時でせうか。』と河田翁は卒然聞いた。石井翁は帶の間から銀時計の大きいのを出して見て、

『三時半です。』

『イヤそれぢや最早行かなきゃならん。』と河田翁は口早に言つて、急に聲を潜め、四邊をきよろく見廻しながら、

『實は私此頃或婦人會の集金掛を爲て居るのですから、毎日々々東京中を遍回らされる

ので此歳では兎てもやり切れなくなりました、そこで最少し樂な仕事をと頼んで歩きましたら、やつと旨い口が発見つたんです。それは食扶持一切先方持で月給が七圓だといふのです。それで身體を動かすことは餘り無いといふんですから早速それに決めたのです。ところが、『と四邊を見廻はした上に更に延上がつて近所を見廻したが、一段聲を潜めて』私は大變なことを仕て居るんだ、兎角足らんくで一圓二圓と費ひ込み頭十五圓ほど會の集金を費ひ込んで了つたのです。サアそれもチャンと返して帳簿を整理して置かんと今の旨い口に行く事が出来ない。そこで此四五日共十五圓の調達に随分駈廻りましたよ。やつと三十間堀の野口といふ舊友の俸が返濟の途さへ立てば貸してやらうといふ事になり、今日四時から五時までの間に先方で會ふことになつて居るのです。まアザツと斯んな苦しい譯で……けれど費込の一件は極く内密に願ひします。』と言つて起立り、石井翁が何も言ひ得ぬ中に河田翁は辭儀をペコくして去つて了つた。

石井翁は取残されて茫然と河田翁の後姿を見送つて居た。

河田翁が延び上がつて遠くまで見廻したのは巡查が可恐かつたのだ。そこで翁と巡查と摺違つた時に河田翁は急に帽子に手をかけて禮をした。石井翁は見て居て其意味が解

らなかつた。

泣き笑ひ

時之助の母親は女中お光の歸るのを一刻千秋の思で待つて居る。

『又た彼の愚鈍のことだから、のろくさくして居るのだらう、眞實に仕様がないなえ』と大焦燥に焦燥て居る。

するとお光は果して頗る暢氣に、鼻歌でも唄はんばかりの様子で歸つて來た、と母親には見受けられたのである。いきなり、

『お光！

お光！ お前何をぐづくして居るのだねえ、眞實に！』

『へえ。』と年は十七ばかりの、孤兒なるが故に可哀さうだと、東京から連れ歸つた女中

が眼をパチクリく、奥様の顔を眺めて居る。

『「へえ」もないもんだ、それで片山の武さんは歸宅つて居ましたか。』

『へえ、片山の坊様は歸宅つて居ました。』

『そんなら大村の坊様は？』

『歸宅つて居ました。』

母親は急込んで、

『そんなら我家の坊様は如何したか尋問しましたか。』

『へえ。』

『へえぢやアありません、眞實にお前のやうな大馬鹿がありますか、我家の坊様の事を聞かないくらゐならお使に行つて何の役にたちます。』

『でも奥様が只だ片山の坊様と大村の坊様が歸宅つたか聞て来いとお仰いましたから、それで……。』

『さう言ひましたとも、けれど何故我家の坊様はと言訊くことが出来ません、』と白眼つけて、直ぐ奥に向いて、

『眞實に貴方心配ですから、御自分で一寸と聞いて来て下さいませんか。』

夕闇薄暗き縁側に涼んで居た休職判事の父親は又た悠然たるものである、團扇をバタリバタリ、

『まアお前のやうにワイ／＼騒いだつて仕様がないうよ。必定寄道でもしたのだから、今

に歸宅つて来るよ。』

『貴方もそんな暢氣な事ばかりおつしやつて萬一の事があつたら如何なさいます。』

『萬一の事とはどんな事だ。』

『萬一のことゝは萬一の事です。』

『我家の時が水へでも陥つたと言ふのだらう。』

『さうですとも。そんな事が無いとも限りません。連伴が少年のことですから驚いて逃げて来て知らん顔をして居るなんて、よく東京でもあるぢやアありませんか。』

『そんな馬鹿々々しいことがあつて堪るものかね。第一お前は時等が釣魚に行く場處の模様を知らないから、さういふこと言ふのだ、今日、時が釣に往つた處は平地で池の堤といふものがない、だから落ちやうがない。よしんば落ちたにしても足をのめりこまず位のもので決して生命に彼是ある筈がないのだ。必定、寄道を爲て居るのだよ。』といはれて乙なことおつしやると言ひたさうな身構へをして東京の奥様、

『堤があるか無いか、去年來たばかりの私にはお國の事は存じませんが、もしか貴方が、斷て寄道を爲たのだとおぼしめすなら一寸と聞いて来て頂くわけに参りませんか知

ら。片山の坊様でも我家の時が寄道を爲たのか池に陥つたのか位は知つて居なさる筈ですから。』と東京式のせきこんだ調子で迫る。一方は平氣なもの。

『お前が心配するのだからお前が聞きにゆけば可いぢやアないか。』

『行きますとも、そんなら私が行きます。』

『アレ奥様、私が参ります。』

『いゝえ、私が行きます。お前などに頼むと安心が出来ません。』

『いゝえ、私が参ります。』

『うるさいね。兩人で行つたら可いだらう。』と父の一聲。母親とお光は申しあはしたやうに沈黙つて了つた、そしてこそく兩人は外方に出掛けた。

『お光や。お前は片山へ行つて聞いておいで。私は此處で待つて居るから。時は平時この道から歸るから。』

と言はれて家から四丁ばかりの淋しい辻に奥様を残して、お光は再び片山の家へと急いだ。

夕月煙霽をこめて蓮池の香り高き處に母親は月に向つて立つて居た。暫時するとお光

が歸つて来て。

『奥様矢張坊ちゃんは居残りなんださうです。』

『一人でかえ。』

『へえ。』

『まア何といふ兒だらう、田舎道の一里上もある所へ遊びにゆきながら、日が暮れても歸つて来ないなんて……』

『今にお歸りになりますよ。』とお光は奥様の泣き出しさうな聲を聞いて慰める。奥様は無言で蓮池と屋敷との間を通ふ眞直な道を眺めて居たが、

『お前先へお歸り。そして風呂の下を見てお置き。私は少し此處で待つて見るから。』

『畏まりました』とお光の去つた後で、母親は『若しか』といふ場合を色々に想像して、胸の痛くなる程心配して待つて居ると、間もなく蓮池の邊に小さな影が見えだした。だんだん近づいて来るのを見ると、時之助らしい。けれども若しか又た他家の兒かも知れぬと心も空に見つめて居ると、釣竿を肩にして左手に魚籠を提げ、小聲で唱歌を歌ひながら来るのは正しく時之助である。

『時ぢやアありませんか』といふ一刹那、悲み變じて喜びとなる。

『ヤア、母様其處で何を爲て居るのです。』

『まア此兒は。何を爲て居る所ぢやありません。お前こそ斯んなに遅くまで何をして居たのです。』といふ時、喜び變じて怒となる。

『釣つて居ました。今日は澤山釣れましたよ。』

『最早これから決して釣魚にはやりません。』

『何故？』

『何故もないもんです。さつさと、お歸りなさい。』

と母親は安心して先へ立ち歩めば時之助は平氣なもの、口笛を吹きながら續く。

流石に何程か心配になつてゐたと見えて父親は玄關先に立つて居たが、二人の姿の門内に現るゝや、

『歸つた、歸つた！』と、にこゝする。

『まア貴方如何でしょう。居残つて釣つて居たのですとサ、呆れた兒ぢやアありませんか。』

『時、お前が餘まり遅いので母様大變心配しましたぞ。』と父親から言はれても、それに答へず、

『今日は澤山釣れましたよ、今見せます』と言ひ捨て、裏へ廻はり、井戸邊で足を洗つて、魚籠を提げたまゝ座敷へ入り、洋燈の下で魚籠の蓋を取り、

『そら、こんなに釣れました。』

『どれ〜』と父親は覗込むで、

『成程これはお前にしては大漁だ』と感心する。

『随分大きな居ますよ。見せませう』と臺所へ飛んで行き、

『光、摺鉢をお呉れ。』

お光は摺鉢を渡しながら、

『大變遅うございましたことねえ。』

『黙れ！』と摺鉢を奪取り、座敷に飛んで歸つて、魚籠をあけると、大小四五十尾の鮒が銀光を放つて、ぞろ〜と出て来る。

『ねえ、父上此魚なぞ随分大きいでせう。』

『なる程これは太い。』

『何になります。そんなものを十尾や五尾釣つて来て。眞實に人に心配ばかりかけて！』
と先程から父親が優しく言ふ程、劫腹がつて居た母親は我鳴りつける。

『ほウだ』と時之助は嬉しさに鮒を眺めながらいふ。

『何が「ほウ」です。』と母親は睨みつける。

『だつて母上の國ぢやアこれが五尾か十尾でも、日本帝國は四十九尾ですからね。』

『百尾でも五尾でも其様ものは同じことです、生意氣を言ふ。』

『でも此奴のやうな大きい鮒は母上見たことが無いでせう。』と鮒の尾を掴んでぶらさげて見せる。

『何が大きいものか。鼻へ捻り込みさうなものが何になります。』

『ほウだ。』

『何が「ほウ」です。』

『ほウだ。』

『何が「ほウ」です。』

『だつて母上の鼻の穴は随分大きい穴ですわねえ。』
『何故です。』

『だつて此鮒が鼻へ捻り込めるのですもの。』

と平氣でいふのを聞いて、父親は思はずくすくと笑つた。

『まア此兒は、此兒は、』と母親は口惜いので泣くのか、可笑いので笑ふのか、眼には涙、
口元は笑味、呆れ返つて後の言葉が出ない。

都の友へ、B生より

(前略)

久しぶりで孤獨の生活を行つて居る、これも病氣のお蔭かも知れない。色々なことを考へて久しぶりで自己の存在を自覺したやうな気がする、これは全く孤獨のお蔭だらうと思ふ。此温泉が果して物質的に僕の健康に効能があるか無いか、そんな事は解らないが何しろ温泉は悪くない。少くとも此處の、此家の温泉は悪くない。

森閑とした浴室、長方形の浴槽、透明つて玉のやうな温泉、これを午後二時頃獨占して居ると、くだらない實感からも、夢のやうな妄想からも脱却して了ふ。浴槽の一端へ後腦を乗せて一端へ爪先を掛けて、ふわりと身を浮べて眼を閉る。時に薄目を開けて天井際の光線窓を見る。碧に煌めく桐の葉の半分と、蒼々無際限の天空が見える。老人なら南無阿彌陀佛くくとの口の中で唱へる所だ。老人でなくとも此心持は同じである。

居室に歸つて見ると、ちゃんと整頓して居る。出る時は書物やら反古やら亂雑極まつて

居たのが、物各々所を得て靜かに僕を待つて居る。ごろりと轉げて大の字なり、座布團を引寄せて二つに折つて枕にして又も手當次第の書を読み初める。陶淵明の所謂『不求甚解』位は未だ可いが、時に一ページ讀むに一時間もかゝる事がある。何故なら全然で他の事を考へて居るからである。昨日も君の送つて呉れたチエホフの短篇集を讀んで居ると、ツイ何時の間にか「ボズ」さんの事を考へ出した。

ボズさんの本名は權十とか五郎兵衛とかいふのだらうけれど、此土地の者は唯だボズさんと呼び、本人も平氣で返事をして居た。

此以前僕が此處へ來た時の事である。或日の午後僕は溪流の下流で香魚釣を行つて居たと思ひ玉へ。其場所が全たく僕の氣に入つたのである、後背の涯からは雜木が枝を重ねて被ひかゝり、前は可成廣い澱が靜に渦を卷いて流れて居る。足場はわざ／＼作つた様に思はれる程、具合が可い。此處を發見した時、僕は思つた此處で釣るなら釣れないでも半日位は辛抱が出来ると思つた。處が僕が釣初めると間もなく後背から『釣れますか』と唐突に聲を掛けた者がある。

振り向くと、それがボズさんと後に知つた老爺であつた。七十近い、脊は低い骨太

の老人で矢張釣竿を持つて居る。

『今始めた許りです。』と言ふ中、浮木がグイと沈んだから合すと、餌釣としては、中々大きいのが上つた。

『此處は可なり釣れます。』と老爺は僕の直ぐ傍に腰を下して煙草を喫ひだした。けれども一人が竿を出し得る丈の場處だからボズさんは唯見物をして居た。

間もなく又一尾上げるとボズさん、

『旦那はお上手だ。』

『だめだよ。』

『イヤさうでない。』

『これでも上手の中かね。』

『此温泉に来るお客さんの中ぢやア旦那が一等だ。』と大げさに讚めそやす。

『何しろ道具が可い。』と言はれたので、僕は思はず噴飯だし、

『それぢや道具が釣るのだ、ハ、ハ、……』

ボズさん少しく狼狽いて、

『イヤ其は誰だつて道具に由ります。如何ら上手でも道具が悪いと十尾釣れるところは五尾も釣れません。』

それから二人種々の談話をして居る中に懇意になり、ボズさんが遠慮なく言ふ處によつてと僕の發見した場所はボズさんのあじろの一で、足場はボズさんが作つた事、東京の客が連れて行けといふから一緒に出ると下手の癖に釣れないと言つて怒つて直ぐ止す事、釣れないと言つて怒る奴が一番馬鹿だといふ事、温泉に来る東京の客には斯ういふ馬鹿が多い事、魚でも生命は惜しいといふ事等であつた。

其日はそれで別れ、其後は互に誘ひ合つて釣に出掛けて居たが、ボズさんの家は一室しかない古い茅屋で其處へ獨でわびしげに住んで居たのである。何でも無遠慮に話す老人が身の上の事は成る可く避けて言はないやうにして居た。けれど遠まはしに聞き出した處によると、田之浦の者で俵夫婦は百姓をして可なりの生活をして居るが、其夫婦のしうちが氣に喰はぬと言つて十何年も前から一人で此處に住んで居るらしい、そして俵から食ふだけの仕送りを爲して貰つて居る様子である。成程さう言へば何處か固拗なところもあるが、僕の思ふには最初は頑固で行つたのながら後には却つて孤獨のわび住ひが氣樂

になつて來たのではあるまいか。世を遁れた人の趣があるのは其理由であらう。

其處で僕は昨日チエホフの『ブラックモンク』を読みさして思はずボズさんの事を考へ出し、其以前二人が溪流の奥深く溯つて「やまめ」を居つた事など、それからそれへと考へると堪らなくなつて來た。實は今度來て見ると、ボズさんが居ない。去年田之浦の本家へ歸つて亡なつたとの事である。

事實、此世に亡い人かも知れないが、僕の眼にはあり／＼と見える。菅笠を冠つた老爺のボズさんが細雨の中に立つて居る。

『病氣に良くない、』雨が降りさうですから』など宿の者がとめるのも聞かず、僕は竿を持つて出掛けた、人家を離れて四五丁も溯ると既に路もなければ畑もない。たゞ左右の斷涯と其間を迂回し流るゝ溪水ばかりである。瀬を辿つて奥へ／＼と溯るに連れて、此處彼處、舊遊の澱の小蔭にはボズさんの菅笠が見えるやうである。嘗てボズさんと辨當を食べた事のある、平い岩まで來ると、流石に僕も疲れて了つた。元より居る氣は少しもない。岩の上へ立つてジツとして居ると寂しいこと、靜かなこと、深谷の氣が身に迫つて來る。

暫時くすると箱根へ越す峻嶺から雨を吹き下して來た、霧のやうな雨が斜に僕を掠めて飛ぶ。直ぐ頭の上の草山を灰色の雲が切れ／＼になつて駈る。

『ボズさん！』と僕は思はず涙聲で呼んだ。君、狂氣の眞似をすと言ひ玉ふか、僕は實に滿眼の涙を落つるに任かした。(略)

入郷記

九月三十日

とかく我が航海は何時も僥倖のみ多し。今宵も亦た珍らしき和なり。船客皆眠に就き、我獨り覺む、いざ然ば此記を書かざる可からず。

先づ一昨日の事より大略を記し置かんに、朝、友の二三に送られて新橋より乗車、薄暮名古屋に着し一泊す。此處にて道中見物記を認めて大島君に送りぬ。

昨朝名古屋を發して京都に下車。井上君を訪ひ久ぶりにて快談痛論す。彼、何が故に歸國するかと問ふ。

ありのまゝを語りぬ。彼も亦涙を流して、止めもせず、すゝめもせず、只だ「然るか」とのみ答へ、嘆息を洩しぬ、彼は何時ながら我に對して杞憂を懷き居るなり。それも可なり。

今日午前、大島君に一報す、要は井上と快談したる模様のみ。井上の曰く、大阪河口

まで送らんと、我之れを辭しぬ。雨降り、さなきだに憂多き我心の、更に沈める様を見て、強ひて今日の滞在をすゝめたれどもこれ亦辭しぬ。離別にのぞみて、我例の壺を示したるに彼泣く。彼曰く、「君は悲哀の人として此世に出で來たりしが如し、」我曰く、「或は然らん」と。

京都より汽車の中にて、我井上の語を思ひ出し、様々に考へ始めぬ、母の事、祖母の事、而して、我が思想感情の傾向などを思ひつゞけて、げに井上の語は當れりと感じ、一度は甚く心屈し、氣沈みたれども、亦た靜かに前途の希望を想起し來り、僅かに愁雲を一掃し得たり。隣席の老人と語りて頗る發明する所ありたれども、そは他日詳しく記す可し。老人は長野の人、我は「長野の老人」てふ稱號を以て記憶し置かん、渠は今、何處に在ることならん、懐しきかな。

夜はいよゝ更け、海は益々穩かなり、機關の響、遠きが如く近きが如く聞ゆ、水夫の欠伸の聲、彼方に聞ゆ、何人ぞ、甲板の上を靴曳すりて歩むは、彼も眠り難き人の一個か、我心はさえ行くばかりなり。

此船に乗り込みしは今日午後一時なり、明日は又た此船中に暮すことかと思へば、甚だもどかしく感ず。されど明後日は我が故郷ふるさとに在る可し。嗚呼我が故郷！二十年前一度、別れて今はじめて會あはんとする我が故郷！明後日は其山河我が眼前に現はれ来るなり、祖母様にお目にかゝるも明後日なり、すべてが明後日なり、笑ふも泣くも。嗚呼故郷！來る可き幾歲月の間、我は爾なんぢの懐をかるべし、爾我に何を示し、何を語り、何を教ゆるぞ。

いざ我も亦甲板に出て晴れわたる大空の星を仰がんか。

十月一日

『お身は何處まで』

これ彼女かれが問ひかけし言葉なり。

『某町なにかしまで』と我は答へぬ。

彼女は驚ける様にて、自己じぶんも亦「某町なにかし」に往く者なるを告げ且つ「某町なにかし」は則ち自己おんの故郷にして今は歸路なる由を語りぬ、而して彼女かれは更に問ひぬ。

『某町なにかしにゆき玉ふは何の用事ぞ。』

我は事もなげに『歸省するなり』と答へければ、彼女かれは俗に所謂あたまの毛の尖さきから足の爪さきの尖迄眺めつゝ、かゝる男は未だ嘗て某町なにかしには見當らざりしがと訝あやかるものゝ如し。聞けば此の老女生れ落ちてより五十幾年、某町以外には一步も踏み出したることなく、此度近隣の隠居連數人と、初めて京大阪の見物に出懸けて、今は其歸るさなりとぞ。故にこの老女は某町の事をば恰も吾家の内の如く委しく知りつ。何町には誰々が居て、何山には狐が幾匹棲むといふことまで承知せるが如し。我歸省するなりと聞きて、斯くも驚きたるは無理もあらじ。

暫時しばし諦視みつめたる後、

『お宅は何處ぞ』と訪ねぬ。

『二十年目に歸るなり、さればよくは様子も知らねど、家は城山じやうざんの麓、山際やまぎはといふ處にありとか、君は上村かみむらといふ家を知らずや。』

彼女かれはこの答を聞きて、愕然と驚きたるまゝ、愈々訝かしげに我を眺めて、忍びやかに、『然らば君は潔きよ様にては在さずや。』

との間に我も流石に驚きぬ。神に感謝す、神は我未だ我故郷に足を入れざる前に、既にこの愉快なる朋友を我に紹介したまひぬ。この老女名は村田きみ、某町の町外れに住む者なる由、年若き頃は、屢々吾家に往來せりとぞ。我生れて二年目、一家を擧げて上京したる其時の様子をも彼女は知れり。彼女の曰く、其時親しく知人を招かれて、離別の宴を開かれし折は、我も亦席に連なるを得たり。實に憶へば既に二十年の古き昔なるよと老の脆き涙は我をして又暗涙を吞ましめぬ。

五年前祖母様のみ歸國して、山際の舊宅に住みたまひし以來、村田老女は屢々訪問れて今昔を語り合ひなどせし由、吾母今春彼世に逝かれし事をも老女はとくに知り居たり、又吾身の事は祖母様より委しく聞きて、幾度か噂せしともいふ。されど今秋我母の白骨を小さき壺に納めて、故山に歸り來るとは夢にも想はざりしと語りぬ。

上村といふ家を知らずやと問はれし刹那に君が顔の、君が母の面影に生寫しなるを感じぬ、其面影をのみ土産として故郷に歸り給ふとは如何なる御不運ぞや、祖母様の御嘆きの程も想ひやらる、と語りて老女は泣きぬ。

彼女、歳は五十七といふ。さらば、亡き吾母より七歳老いて吾父より二歳若し。其天

稟甚だ淡泊なり、眞摯なり、正直なりと評するの外、未だ其特質を見出す能はず。

若し一夜、或は雨ふる夜、彼女と相對して、其懷舊談、其經歷談或は誰彼の身の上の

様々の物語りなど聞く事を得ば何等の幸福ぞ、冬の夜屋外の風雨を聴きつゝ、煖爐の前に安樂椅子を据ゑて、古き旅行記を讀むてふ逸樂とても、よもや我がこの幸福には優るまじと思ひぬ。

明日は故山に在るべし。

吾が故山果して如何の様ぞ。彼女の曰く、甚だ狭き所なれば、東京に住み馴れたる御身にはいと窮屈なる可しと。彼女誤れり月の光、星の影、旭日輝き夕陽眩き所、人の住む所、社會の成立つ所、我に於て何の廣狹あらん。今日吾船ある島の沖を航する時、其島の小蔭に一箇の茅屋を見たり、青松家の後に並び、白砂前に帯の如く、而して磯打つ波の音は此家に住む人の生活の變化なき調べと相和するものゝ如し。吾心怪しく跳りぬ。嗚呼天の一方、地の一角、人あらば我與に語らん、我與に住まん。

故山果して如何の様ぞ、彼女の曰く、町は古びて穢なく、路は細く、礫多し、京大阪に較ぶべくもあらず、況んや思ふに東京に住みたまひし御身に在りては……と。笑ふべし、彼女は京大阪に惚れこみたり、其所謂狭き穢き巷、其細くして确多き路、我に在りて如何に様々の空想の種なるぞ。我に空想の翼を有す、恍惚の際、屢々青煙霞の如き翼を搏つて、世界の各地を見舞ひぬ、嘗て月光に睡るテームス河畔の大都を下瞰したり、嘗て驛鈴を想うてアラビヤの舊都に入りぬ、見馴れぬ生活の様、異様の衣服、言語、家屋、時としては其山河の光景の異趣、奇觀、而も等しく我々人間の戀、怨、悲、苦、唱歌、涕泣、夢想し來りて吾心の跳りし事幾度ぞ。

而して今吾が故山、吾が現の如き夢、夢は我が現とならんとす、老女の所謂低き穢なき屋根の並びて、或は白堊の剥げ落ちたる倉に夕陽の眞向に射したる所、其處に老人、小兒、男と女と、犬と猫と鼠と棲むを思へば、これ實に吾が夢の現に化したるにあらずや。明日は故山に在るべし。否、今日は故山に在るべし。今は十月二日の午前二時なればなり。

然れど母よ、孤兒今獨り故山に歸る、寧ろ悲痛の極みに候はずや、幽魂在しまさば我

に伴ひ給へ。

十月二日

我今此處に坐す、然り東都に非らず、船中に非らず、吾家の一室に坐するなり、此室は嘗て吾父の書齋なりし、祖父の書齋なりし、而して實に祖父の祖父の書齋なりし、而して我今此處に坐す。

故郷は夢ならぬ誠となりて我を取り圍みぬ。

祖母は果して泣き、あらゆる繰り言を以て我に訴へ給ひぬ、我亦只泣くのみ、慰むる言葉を知らず。

祖母曰く、汝既に父に別れ又母に別る、汝に兄弟あるか、無し。汝に頼りにする程の親戚あるか、無し。而して我斯の如く老いぬ、噫、哀れの孤兒よ、我若し逝かば汝は誰が縁を頼みとするぞ、あゝ、不運なる孤兒よと我只泣くのみ、然れど又祖母を慰めて云ひぬ。

父母に別れしは是非も候はず、今は只祖母様をこそ頼りにす、今日よりは御傍に在りて、御介抱も出来る事故何事も御養生を第一となし給ひて、二人楽しく暮らし申すべし。

吾が行く末を思ひ煩ひたまへども、我には親しき友もあり、吾心だに正しくば吾世總べて同胞の如くにも候と覺ゆる、頼りなしとてさのみ嘆き給ひぞと、祖母は首肯き給ひたれども、猶老の涙は堰き止むる由も無かりき、想ふに祖母は我を見て嬉しとも悲しともあらゆる感懐の一時に溢れしならん。

今日正午、船某港に着す、實に寂寥たる港なり。港よりは市街見えす、二三箇の間屋らしき家屋山の麓に在り、其外に家無し、二三の漁舟波止場の蔭に眠るが如く泛ぶを見たり、其外に船なし。

陸地を見やれば山に山重なりて遠くして煙の如きものと、近くして鮮かなるものと、何れも秋の光充ち涉りて、時に其中腹より青煙縷の如く立ち昇るを見る、あゝ吾が故山！谷の蔭、峰の麓、如何なる人や棲む、笑ふ者は誰ぞ、泣く者は誰ぞ、何故に泣くか、笑ふ所以も聞かまほしく、ありし事情をも委しく知りたし、我も今日よりは御身等の仲間に加はるなりと思ひし時、偏らに懐かしき心地せり。

然り我實に今日よりは御身等の仲間入りするなり、故郷の人々よこの心荒れ、思亂れ、

疑惑に血荒る我をも容れよかし。

村田老女は吾が爲めに人力車二輛を世話して、親しく車夫に言ひ含めて我を此家に送りたるなり。車は一條坦道を走りぬ、我は左右を顧み行手を眺めつ、靜かに車上に在りたれども、初めて見る山、河のありふれたる形、初めて見る橋、家のありふれたる様、總べて意味ありげに我を動かし吾心は例の如き詩の境に入り初めぬ。

嗚呼、怪しきは吾心かな、否、これ吾心の怪しきに非ず。棲み馴れたる土地に在りては、已に周圍の事物に馴れて人は容易に人生の意味を感獲し得るものにあらず、これ吾が經驗せる事實なり。我嘗て千葉地方に旅せる事あり、日暮れて雲も亦迷ふ時、疲れたる足を曳きて漸くに千葉街の街外れに到着して、忽然寂しき田園より人寰に入りたる時、重く家並の上を蔽ふ煙、彼方此方の街頭に明滅する燈火、小兒の叫ぶ聲、犬の吠ゆる聲、豆腐賣りの聲、空車を引きて薄暗き横道に入りし男、軒端に茫然と立つ女、見る物、聞く物總べて吾が旅行の心に觸れし時、これ等のありふれたる光景の如何に強く新らしく人間生活の形を我に示したるぞ。

車山くるまを繞めぐれば眼前に現はれ來りしものは、歴史癖の詩人、詩人的歴史家の夢想に依つて描かれしが如き古城址なり。堤の上、一列に立ち並びたる老松の色黒く、風轟々と鳴れる様、直ちに人をして古封建の名残を感じしめたり。
 一山の鬱々と茂りたるあり、一見して其城山じやうざんなるを知りぬ、車は馳せて其麓に近きこの家の前に止まりし時、門前に一人の老媪らうおんを見たり、即ち我が祖母様の待ち焦がれ居たまひしなり。

肱の侮辱

東京市より汽車で何哩ほど往くと、某中學校がある。この中學校の通學生は殆ど無賃同様の割引の賃錢で汽車を利用し近在近郷から集り來る。英語教師の米國人アメリカなど常に東京から通つて居た。又た、教員の中には東京に家を持つて居て、一週に二度位、家に歸る者もある。木谷といふ洋畫の先生も其一人であつた。或年の十月頃。日曜日の午後講演會があつて講演者は三人、其一人の矢鳥といふ文學者は木谷先生の盡力で來て呉れたのである。——と誰しも思つて居たが、其實講演會があると聞いて、矢鳥自身が木谷に口をきかして、講演者の一人に加はつたのである。最後に矢鳥が起つて壇に上つた。

諸君みなさん！ 私は口無調法で、おまけに無學で、更におまけに文盲で、とても只今まで御講演になつたやうな理化學的有益な「受賣」は出來ません。(前の二人の講演者ぢろりと矢鳥の顔を睨む。矢鳥は平氣。)其處で私は只だ私自身が此眼で見て、此心に感じた事の一をお話したいさうと思ひます。

ツマラないと思はれる方々は御退場を願ひます、と申す處ですが、さうでない。若し、私の談話中、席を起つた方があつたならば、其方は私を侮蔑したものと致します。(靜にコップに水を注いで一口飲む)

さて、お話はこれからですが、少々困つた事が出来ました(と言ひつゝ、洋服のポケットの所々を探す)お話の草稿が失なりました(生徒はクス／＼笑ふ、前の二人の講演者はザマを見ろといふ顔つき、木谷先生は心配の餘、半分椅子から起上つて居る)。これは失禮、私は草稿を持つて來なかつたのでした。(生徒は益々笑ふ)私の草稿は腹の中に藏つて在つたのでした。紙へ書いて其一字が見えないと最早行きづまるやうな草稿では無かつたのでした。

諸君、これから此腹の中の草稿を少しづゝ繰出します。

私は子供の時から釣が好で、河や沼に出かけた者ですが、今でも此道樂は止みません。其處で今年の六月初でした、此學校の近所に在る川のやうな川に釣に參りました。此川は初めての事ゆる様子が解らず、たゞぼんやりして川岸の礫の上に腰を下し四方の景色を眺めて居ますと、上流の方から岸をたどつて此方へ來る者がある。近づいたので見ま

すと、兼て私の知人である洋畫家でした。餘り立派でない和服を着て顔は例の如く髯ほろ／＼として居ました。

『寫生にでも出掛けて來たのですか。』と聞くと、

『否、ソーではありません。』と言つて口をもご／＼として眼をパチクリ／＼として、次の言葉を出さうとして居ますが直ぐは出て來ないのです。これが此の人の癖の一であります。

『私は其處に在る中學校に出て居ます。』

と聞いて私は初めて此仁が此地方の中學校に洋畫の教師をして居ることを知りました『東京から通ふのですか。』

『三日目に一度東京の家にかへります。』

夫から四方山の話を一時間もして、洋畫家は去りました。兎も角、今日は東京に歸る日であるから午後四時の汽車で同道致さうといふ約束をきめました。此日の私の釣は大失敗でした。

午後四時の汽車に間に合ふべく、停車場へ急ぎました。

途中、諸君の様な方に幾人も出會ひました。悉皆、肩で風を切るやうな歩きつきを仕て居ました。肩が歩いてるやうでした。其時私は思ひました、肩が歩くやうであるのが別に衛生に害があるのでもない。國家の存亡に關する次第でもない。併し肩で風を切らななくても同じことだ。どちらでも可いなら彼の高慢ちきな、小にくらしい、いけづらくしい、生意氣な、馬鹿のくせに利巧さうな顔をして見せる、臆病なくせに大膽な風をして見せる、所謂る肩で風を切ること丈けは見合した方がよろしい、と思ひました。

停車場の前で畫家は私を待つて居ました。そして洋服に着かへて居ましたが、それが又頗る古物である上にカラーもカフスも垢染て鼠色になつて居ます。殊に他人の目につくのは、ボロ／＼したネクタイが正面でヒン曲つて横でカラーから外れて居る事です。此仁の衣裝は此時ばかりでなく、何時見ても先づ斯な風を爲て居るのです。

間も無く汽車が着いて二人は乗りました。同じ車室の中に語學の教師らしい西洋人が乗り込みまして、其と一緒に生徒が七八人乗りました。覺束ない英語で小生意氣な様子で西洋人に話し掛けて居るのが第一私の癢にさはりました。所が其の生徒達は始め洋畫の先生が同じ車室に乗つて居る事を知らなかつたやうでしたが、其中一人が後をふり向

いて洋畫先生を一目見るや眩で隣の生徒をつゝきました。すると其の生徒が又後をふり向きました。そして小聲で何か言ひながら更に隣の生徒へ眩の合圖を致しますと、此度は他の三四人が一度に後をふり向いて同時に皆が顔を見合せて一種異様な笑ひ方を致しました。語學の先生は氣が附かないやうでしたが、私と話をして居た洋畫先生はいくらか氣が附いたと見えて、恥しい様な悲いやうな顔容——私は未だ曾て此様氣の毒らしい情ない顔付を見た事が有りません。——を仕て居ました。

此有様を見た私は言ふに言はれぬ憤怒の情がこみ上げて來て、出来る事なら是れらの生徒を一人一人窓からつまみ出して遣りたい程に思ひました。

諸君！ 諸君は如何思ひます。成程洋畫先生の風采は上りませんが、成程世辭も愛嬌もない男ですけれども、此人の心の全部が純白で透明で邪氣の無い事を知りながら、是れに侮蔑を加へる事は善良なる學生の行爲でせうか。

けれども私が今皆さんに申上たいと思ふのは、さう言ふ簡単な倫理問題では無いので有ります。倫理問題の根本問題です。洋畫先生の如き人に侮辱を加へると言ふ事は善か悪かと言ふ事を問ふ前に我々は性格の美を認めると云ふ事を學ばねばなりません。性格

に對する同情と言ふ事を知らなければなりません、もし其等の事に一切夢中で、只空に善とか悪とか言ふ如き倫理の講義を聞けばこそ、彼の洋畫家を侮辱するやうな中學生が出来るのです。私から申しますと彼の洋畫家の風采の上らない事や其の行爲の何となく間拔けて居る事や、其顔附の爺々むさい事や、總てがむしろ長所であつても短所ではないと思ひます。彼のお粗末な外形は其の人の極めて單純な善良な心を示して居ると思ひます。それらの事に少しも心を用ゐず、用ゐる事を知らず。只外形を見て師を侮辱するが如きは何たる卑しい且つ愚なる根性でせう、諸君の中に一人でも斯の如き少年の加つて居るなら實に皆さんの恥辱で有ります。

講演會が終つて矢島が停車場まで來ると洋畫の先生木谷が送つて來た。汽車が出掛けると木谷は口をモグくさして何か言はうとしたが言ふ事が出來ない。見ると眼に涙を充滿いんぱんくませて居た。

湯ヶ原ゆき

定めし今時分は閑散だらうと、其閑散を狙つて來て見ると案外さうでもなかつた。殊に自分の投宿した中西屋といふのは部屋數も三十近くあつて湯ヶ原温泉では第一といはれて居ながら而も空室はイクラもない程の繁盛であつた。少し當は違つたが先づ繁盛に越した事なしと斷念めて自分は豫想外の室に入つた。

元來自分は大的無性者にて思立つた旅行もなか／＼實行しないのが今度といふ今度は友人や家族の切なる勸告でヤツと出掛けることになつたのである。「其處に骨の人行く」といふ文句それ自身がふらく／＼と新宿の停車場に着いたのは六月二十日の午前何時であつたか忘れた。兎も角、一汽車乗り遅れたのである。

同伴者は親類の伯母であつた。此人は途中萬事自分の世話を焼いて、病人なる自分を湯ヶ原まで送り届ける役を持つて居たのである。

『どうせ待つなら品川で待ちませうか、同じことでも前程へ行つて居る方が氣持が可いから』

と自分がいふと

『ハア、如何でも。』

其處で國府津までの切符を買ひ、品川まで行き、其プラットホームで一時間以上も待つことゝなつた。十一時頃から熱が出て來たので自分はプラットホームの眞中に設けある四方硝子張の待合室に入つて小さくなつて居ると香氣なる伯母はそんな事とは少しも御存知なく待合室を出て見たり入つて見たり、煙草を喫つて見たり、自分が折り／＼話しかけても只だ『ハア』『さう』と答へらるゝだけで、沈々黙々、空々漠々、三日でも斯うして待ちますよといはぬ許り悠然、泰然、茫然、呆然たるものであつた。其中漸く神戸行が新橋から來た。特に國府津止の箱が三四輛連結してあるので紅帽の注意を幸にそれに乗り込むと果して同乗者は老人夫婦きりで頗る空いて居た、待ち疲れたのと、熱の出たのとで少なからず弱つて居る身體をドツカと投げ下すと眼がグラついて思はずのめりさうにした。

前夜の雨が晴れて空は薄雲の隙間から日影が洩れては居るものゝ梅雨季は争はれず、天際は重い雨雲が被ひ重なつて居た。汽車は御丁寧に各驛を拾つてゆく。

『伯母此處は梅で名高い蒲田ですね。』

『さう？』

『伯母田植が盛んですね。』

『さうね。』

『御覽なさい、眞紅な帯を結めて居る娘も居ますよ。』

『さうね。』

『伯母川崎へ着きました。』

『さうね。』

『伯母お大師様へ何度お参りになりました。』

『何度ですか。』

これでは何方が病人か分らなくなつた。自分も斷念めて眼をふさいだ。

トロリとした間に鶴見も神奈川も過ぎて平沼で眼が覺めた。僅かの假寢ではあるが、それでも氣分がサツパリして多少か元氣が附いたので懲りすまに伯母に、

『横濱に寄らないだけ未だ可う御座いますね。』

『ハア。』

是非もないことゝ自分も斷念めて咽喉疾には大敵と知りながら煙草を喫ひ初めた。老人夫婦は頻りと話して居る。而もこれは婦の方から種々の問題を持出して居るやうだ、そして多少か煩いといふ氣味で男はそれに説明を興へて居たが隨分丁寧な者で決して、

『ハア』さう』の比ではない。

若し或人が伯母の背後から其脊中をトント叩いて『伯母！』と叫んだら『オ、』と驚いて四邊をきよろ／＼見廻して初めて自分が汽車の中に在ること、旅行しつゝあることに氣が附くだらう。全然旅をしながら何物も見ず、見ても何等の感興も起さず、起しても其を折角の同伴者と語り合つて更に興を増すこともしないから、初めから其人は旅の面目を知らないのだ、など自分は獨り腹の中で愚痴つて居ると、

『あれは何でせう、そら彼の山の頂邊の三角の家のやうなもの。』

『どれだ。』

『そら彼の山の頂邊の、そら……。』

『どの山だ。』

『そら彼の山ですよ。』

『どれだよ。』

『まア貴下あれが見えないの。ア、最初見えなくなつた。』

と老婦人は残念さうに舌打をした。伯母は一寸と其方を見たばかり此時自分は思つた、伯母よりか老婦人の方が幸福だと。

そこで自分は『對話』といふことに就て考へ初めた、大袈裟に言へば『對話哲學』又たの名を『お喋舌哲學』に就て。

自分は先づ劈頭第一に『喋舌る事の出来ない者は大馬鹿である。』

三

『喋舌ることの出来ないのを稱して大馬鹿だといふは餘り残酷いかも知れないが、少くとも喋舌らないことを以て甚く自分で豪らがる者は馬鹿者の骨頂と言つて可らしい、而

して此種の馬鹿者を今の世にチヨイ／＼見受けるのは情ない次第である。

『旅は道連、世は情といふが、世は情であらうと無からうと別問題として旅の道連は難有い、マサカ獨りでは喋舌れないが二人なら對手が泥棒であつても喋舌りながら歩くことが出来る。』などそれからそれと考へて居るうち又眠くなつて來た。

睡眠は安息だ。自分は眠ることが何より好きである。けれど爲うことなしに眠るのはあたら一生涯の一部分をたゞで失くすやうな氣がして頗る不愉快に感ずる、處が今の場合、如何とも爲がたい、眼の閉づるに任かして置いた。

幾分位眠つたか知らぬが夢現の中に次のやうな談話が途斷れ／＼に耳に入る。

『貴方お腹が空きましたか。』

『……甚く空いた。』

『私も大變空きました。大船でお辨を買ひませう。』

成程こんな談を聞いて見ると腹が空いたやうである。まして沈黙家の特長として伯母も必定さうだらうと、

『伯母お腹が空きましたらう。』

『イ、エ、さうでも有りませんよ。』

『大船へ着いたら何か食べませう。』

『今度が大船ですか。』

『私は眠て居たから能く分りませんが、』と言ひながら外景を見ると丘山樹林の容様が正にそれなので、

『エ、最早直ぐ大船です。』

『大變早いこと！』

四

大船に着くや老夫婦が逸早く押すしと辨當を買ひこんだのを見て自分も其眞似をして同じ物を求めた。頸筋は豚に似て聲までが其らしい老人は辨當をむしやつき、少し上方辯を混ぜた五十幾歳位の老婦人はすしを頬張りはじめた。

自分は先づ押すしなるもの一つ揃んで見たが酔が利き過ぎてとても喰へぬのでお止めにして更に辨當の一隅に箸を着けて見たがポロ／＼飯で病人に大毒と悟り、これも御免を被り、元來小食の自分、別に苦にもならず總てを伯母にお任せして茶ばかり飲んで

内心一の悔を懐きながら老人夫婦をそれとなく観察して居た。

『何故「ビールに正宗……」の其何れかを買ひ入れなかつたらう』といふが一の悔である。大船を發して了へば最早國府津へ着くのを待つ外、途中何も得る事は出来ないと思ふと、淺ましい事には猶ほ残念で堪らない。

『酒を買へば可かつた。惜しいことを爲た。』

『ほんとに、さうでしたねえ』と誰か合槌を打つて呉れた、と思ふと大違の眞中。伯母は今しも下を向いて蒲鉾を食ひ缺いて居らるゝ所であつた。

大磯近くなつて漸と諸君の晝飯が了り、自分は二個の空箱の一には笹葉が残り一には煮肴の汁の痕だけが残つて居る奴をかたづけ腰掛の下に押込み、老婦人は三個の空箱を丁寧を重ねて、傍の風呂敷包を引寄せ其に包んで了つた。最も左様する前に老人と小聲で一寸と相談があつたらしく、金貸らしい老人は『勿論のこと』と言ひたげな様子を首の振り方で見せたのであつた。

此二の悲劇が終つて彼是する中、大磯へ着くと女中が三人ばかり老人夫婦を出迎に出居て、其一人が窓から渡した包を大事さうに受取つた。其中には空虛の折箱も三ツ入

つて居るのである。

汽車が大磯を出ると直ぐ(吾等二人ぎりになつたので)

『伯母今の連中は何者でせう。』

『今のツて何に?』

『今大磯へ下りた二人です。』

『さうねえ。』

『必定金貸か何かですよ。』

『さうですかね。』

『でなくても左様見えますね。』

『婆様は上方者ですよ、ツルリンとした顔の何處に「間拔の狡猾」とでも言つたやうな所があつて、ペチャクリ〜老爺の機嫌を取つて居ましたね。』

『さうでしたか。』

『妾の古手かも知れない。』

『貴君も随分口が悪いね』とか何とか伯母が言つて呉れると、益々悪口雑言の眞價を發

揮するのだけれども、自分の生憎く甘い言をトン／＼拍子で言ひ合ふやうな對手でないから、間の抜けるのも是非がない。

五

箱根、伊豆の方面へ旅行する者は國府津まで来ると最早目的地の傍まで着いた気がして心も勇むのが常であるが、自分等二人は全然そんな様子もなかつた。不好きな處へいやながら出かけて行くのかと怪まるゝばかり不承無承にプラットホームを出て、紅帽に案内されて兎も角も茶屋に入つた。

伯母は兎につまゝられたやうな顔つきをして、自分は狼につまゝられたやうな顔をして(多分他から見ると其様顔であつたらうと思ふ)『やれ／＼』とも『先づ／＼』とも何とも言はず女中のすゝめる椅子に腰を下した。

自分は伯母に『これから何處へ行くのです』と問ひたい位であつた。最早我慢が仕きれなくなつたので、伯母が一寸と立つて用たしに行つた間に正宗を命じて、コップであふつた。伯母の來た時は最早コップも空罎も無い。

思ひきや此藝當を見ながら、

『ヤア、これは珍らしい處で』と景氣よく聲をかけて入つて來た者がある。 一一九

可愛さうに景氣のよい聲、肺臓から出る聲を聞いたのは十年ぶりのやうな気がして、

自分は思はず立上つた。見れば友人M君である。

『何處へ?』彼は問うた。

『湯ヶ原へ行く積りで出て來たのだ。』

『湯ヶ原か。湯ヶ原も可いが此頃の天氣ぢやアうんざりするナア。』

『君は如何したのだ。』

『僕は四五日前から小田原の友人の宅へ遊びに行つて居たのだが、雨ばかりで閉口したから、これから歸京うと思ふんだ。』

『湯ヶ原へ行き玉へ。』

『御免、御免、最早飽き／＼した。』

平凡な會話ぢやアないか。平常なら當然の挨拶だ。併し自分は友と別れて電車に乗つた後でも氣持がすが／＼して清涼劑を飲んだやうな氣がした。おまけに先刻の手早き藝當が其効果を現はして來たので、自分は自分と腹が定まり車窓から雲霧に埋れた山々を

眺め、

『走れ〜電車、』

圓太郎馬車のやうに喇叭を吹いて呉れると更に妙だと思つた。

六

小田原は街まで長い其入口まで来ると細雨が降りだしたが、それも降りみ降らずみだいたした事もなく人車鐵道の發車點へ着いたのが午後の何時。半時間以上待たねば人車が出ないと聞いて茶屋へ上り今度は大びらで一本命じて空腹へ刺身を少しばかり入れて見たが、悪酒なるが故のみならず元來八度以上の熱ある病人、甘味からう筈がない。悉くやめてごろり轉がるのがつかりして身體が解けるやうな氣がした。旅行して旅宿に着いて此がつかりする味は又特別なもので、「疲勞の美味」とでも言はうか、然し自分の場合はそんなどころではなく病が手傳つて居るのだから鼻から出る息の熱を今更の如く感じ、最早や身動きするのもしやになつた。

しかし時間が来れば動かぬわけにいかない、只だ人車鐵道さへ終れば最早着いたも同様と其を力に箱に入ると中等は我等二人ぎり廣いのは難有いが二時間半を無言の行は恐

れ入ると思つて居ると、巡查が二人入つて来た。

一人は張飛の瘦せて弱くなつたやうな中老の人物。一人は關羽が鬚髯を剃り落して退隠したやうな中老以上の人物。

瘦せた張飛は眞鶴駐在所に勤務すること既に七八年、齋藤巡查と稱し、退隱の關羽は鈴木巡查といつて湯ヶ原に勤務すること實に九年以上であるといふことは後で解つたのである。

自分の註文通り、喇叭の聲で人車は小田原を出發た。

七

自分は如何いふものかガタ馬車の喇叭が好きだ。回想も聯想も皆な面白い。春の野路をガタ馬車が走る、野は菜の花が咲き亂れて居る、フワリ〜と生温い風が吹いて花の香が狭い窓から人の面を掠める、此時御者が陽氣な調子で喇叭を吹きたてる。如何やら嫁いびりの胡麻白婆さんでも此時だけはのんびりして幾分か善心に立ちかへるだらうと思はれる。夏も可し、清明の季節に高地の坦道を走る時など更に可し。

ところが小田原から熱海までの人車鐵道に此喇叭がある。不愉快千萬な此交通機關に

此鳴物が附いて居る丈けで如何か興を助けて居るとは豫て自分の思つて居たところである。先づ二臺の三等車、次に二等車が一臺、此三等が一行になつてゴロ／＼と停車場を出て、暫時くは小田原の場末の家並の間を上には人が押し下には車が走り、走る時は喇叭を吹いて進んだ。

愈々平地を離れて山路にかゝると、これからが初まりと言つた調子で張飛巡査は何處からか煙管と煙草入を出したがマッチがない。關羽も持つて居ない。これを見た伯母は徐に袖から取出して、

『どうかお使ひ下さいまし。』

と丁寧と言つた。

『これは／＼。如何もマッチを忘れたといふやつは始末にいかんもので。』

と巡査は一ふく點火してマッチを伯母に返すと伯母は生眞面目な顔をして、其を受取つて自身も煙草を喫ひはじめた。別に海洋の絶景を眺めようともせられない。

どんより曇つて折り／＼小雨さへ降る天氣ではあるが、風が全く無いので、相模灣の波靜に太平洋の煙波夢のやうである。噴煙こそ見えないが大島の影も朦朧と浮かんで居

る。

『伯母どうです、佳い景色ですね。』

『さうねえ。』

『向うに微に見えるのが大島ですよ。』

『さう？』

此時二人の巡査は新聞を讀んで居た。關羽巡査は眼鏡をかけて、人車は上だからゴロゴロと徐行して居た。

ハ

景色は大きい變化に乏しいから初めての人なら兎も角、自分は既に幾度か此海と此棧道に慣れて居るから強ひて眺めたくもない。伯母が定めし珍しがるだらうと思つて居たのが、例の如く簡単な御挨拶だから張合が抜けて了つた。新聞は今朝出る前に讀み盡して了つたし、本を讀む元氣もなし、眠くもなし、喋舌る對手もなし、あくびも出ないし、さて斯うなると空々然、漠々然何時か伯母の氣が自分に乗り移つて血の流動が次第々々にのろくなつて行くやうな氣がした。

江の浦へ一時半の間は上であるが多少の高低はある。下りもある。喇叭も吹く、斯くて棧道にかゝつてから第一の停留所に着いた所の名は忘れたが此處で熱海から來る人車と入りちがへるのである。

巡査は此處で初めて新聞を手離した。自分はホツと呼吸をして我に返つた。伯母はウンともスンとも言はれない。別に我に返る必要もなく又た返るべき我も持つて居られない、『此處で又暫時く待たされるのか。』

と眞鶴の巡査、則ち張飛巡査が言つたので、

『いつも此處で待たされるのですか。』
と自分は思はず問うた。

『さうとも限りませんが熱海が遅くなると五分や十分此處で待たされるのです。』

壯丁は車を離れて水を呑むもあり、皆掛茶屋の縁に集つて休んで居た。此處は谷間に據る一小村で急斜面に茅屋が段を作つて叢つて居るらしい、車を出て見ないから能くは解らないが、漁村の小なる者、蜜柑が山の産物らしい。人車の軌道は村の上端を横ぎつて居る。

雨がポツ／＼降つて居る。自分は山の手の方をのみ見て居た。初めは何心なく見るともなしに見て居る内に、次第に今見て居る前面の光景は一幅の俳畫となつて現はれて來た。

九

軌道と直角に細長い茅葺の農家が一軒ある其の裏は直ぐ山の畑に續いて居るらしい。家の前は廣庭で麥などを乾す所だらう、廣庭の突きあたりに物置らしい屋根の低い茅葺がある。母家の入口はレールに近い方にあつて人車から見ると土間が半分ほどはすかひに見える。

入口の外の軒下に楕圓形の据風呂があつて十二三の少年が入つて居るのが最初自分の注意を惹いた。此少年は其の日に焼けた脊中ばかり此方に向けて居て決して人車の方を見ない。立つたり、しゃがんだりして居るばかりで、手拭も持つて居ないらしく、又た何時出る風も見えず、三時間でも五時間でも一日でも、あアやつて居るのだらうと自分には思はれた。廣庭に向いた釜の口から青い煙が細々と立騰つて軒先を掠め、ポツ／＼雨が其中を透して落ちて居る。半分見える土間では二十四五の女が手拭を姉様かぶりにして上り

がま、ちに大盥程の桶を控へ何物かを節せうびにかけて専念一意の體てい、其桶の前に七ツ八ツの少女むすめが坐りこんで見物して居るが、これは人形のやうに動かない、風呂の中の少年も同じくこれを見物して居るのだといふことが自分にやつと解わかつた。

入口の彼方あちらは長い縁側で三人の少女こむすめが坐つて居て其一人は此方こちらを向き今しも十七八の姉様に髪を結つて貰ふ最中。前髪を切り下まげて可愛く之も人形のやうに順おとなしくして居る廣庭では六十以上の而も何れも達者らしい婆さんが三人立つて居て其一人の赤兒あかごを脊負おぶつて腰を曲げ居るのが何事か婆さん聲を張上げて喋舌しゃべつて居ると、他の二人の婆様ばあさんは合槌あひづちを打つて居る。けれども三人とも手も足も動かさない。そして五六人の同じ年頃の子供がやはり身動きもしないで婆さん達の周圍まわりを取り巻いて居るのである。

眞黒な艶の佳い洋犬かめが一匹、腮ほほを地に着けて臥ねそべつて、耳を垂れたまゝ是れ亦尾おしをすら動かさず、廣庭の仲間に加はつて居た。そして母屋おもやの入口の軒蔭のらから燕ひじが出たり入つたりして居る。

初めは俳畫のやうだと思つて見て居たが、これ實に畫でも何でも無い。細雨に暮れなんとする山間村落の生活最も靜かなる部分である。谷の奥には墓場もあるだらう、人生

悠久ながれの流ながれが此處でも泡立たぬまでの渦を巻いて居るのである。

十

随分長く待たされたと思つたが、實際は十分ぐらゐで熱海からの人車が威勢能く喇叭らふを吹きたてゝ下つて來たので、直ぐ入れちがつて我々は出立した。

雨が次第に強くなつたので外面そとの模様は陰鬱いんうつになるばかり、車内うちは退屈を増すばかり眞鶴まづるの巡查がとうく、

『何處いっつへ行しやいます。』と口を切つた。

『湯ヶ原へ行かうと思つて居ます。』と自分がこれに應じた。思つて居るところか、今現に行きつゝあるのだ。けれど斯う言ふのが温泉場へ行く人、海水浴場へ行く人乃至名所見物にでも出掛る人の洒落しゃれた口調であるキザな言葉たるを失はない。

『湯ヶ原は可い所です、初めてですか。』

『一二度行つた事があります。』

『宿どちらは何方です。』

『中西屋です。』

『中西屋は結構です、近來益々可いやうです。さうだね君。』と兎角言葉の少ない鈴木巡查に賛成を求めた。

『さうです。實際彼の家が今一番繁盛するでせう。』と關羽の鈴木巡查が答へた。

先づこんな有りふれた問答から、だん／＼談話に花がさいて東京博覽會の噂、眞鶴近海の魚漁談等で退屈を免れ、やつと江の浦に達した。

『サアこれから下りだ。』と齋藤巡查が威勢をつけた。

『伯母おばさんこれから下りですよ。』

『さう。』

『随分亂暴だから用心せんと頭を打觸けますよ。』

『さうですか。』

齋藤巡查が眞鶴で下車したので自分は談敵を失つたけれど、湯ヶ原の入口なる門川までは、退屈する程の隔離でもないので困らなかつた。

日は暮れかゝつて雨は益々強くなつた。山々は悉く雲に埋れて僅かに其麓を現すばかり。

り。我々が門川もんがはで下りて、更に人力車に乗りかへ、湯ヶ原の溪谷に向つた時は、さながら雲深く分け入る思ひがあつた。

附

篇

親暴

子風

暴風

(一)

『兄様今村のお國様が入來しやいました。』

『珍らしいことだね。』

『此處へお通しませうか。』

『オヤ僕に用があるの。』

『ハア、何だか兄様にちつとお目にかゝりたいツて。』

『何の用だらう。』

『知りませんわ。』

『妙だね。』

『お通しませうか。』

『あア、それぢやアお通し。』

禮子は座敷の隅に重ねてある座蒲團の一枚を兄の正面一間ばかりの所に敷いて、下に降りた。

間もなく十八九の小柄の娘が優に上つて来て莞爾笑つて敷居を隔てたまゝ坐らうとするので江崎富彌は

『何卒か此方へ。』

『ハイ。』

『何卒か。』

國子は富彌の書齋に入つて一通りの挨拶が済み、勧めらるゝまゝ座蒲團を敷いた。『遠い所を能く光來しやいましたね。』と富彌は机の上の煙草を採つた。燐寸を磨つて火を點けながら其濃い眉をよせた。少し變な氣持がして、多少か狼狽して居るらしい。

『私、今日兄に内證で來たのですよ。』

『さうですか。如何して。』

『貴下昨日兄にお會ひになりましたか。』

『エ、朝來られて散歩しようと言はれるから常例のやうに郊外に出かけました。』
『兄が何んか申しませんでしたか。』
『色々なことを言ひました。』

『別に變つた事は言ひませんでしたか。』

『さうですね、同じ事ばかり言つて居る譯にもいかんから色々變つたこと喋り合ひました。しかし要するに平常と同じ氣焰ですよ。』と富彌は微笑んだ。國子は眞面目な顔で富彌を見ながら考へて居る、やがて

『妙ですね。』と眉をひそめて嘆息をした。

『如何したのです、何です。』と富彌は驚かさざるを得ない。

『此頃兄の様子が變つては居ませんか。』と國子は重ねて問うた。

『さうですね、別に氣が付きませんが。』

『昨日は如何でした。』

『さうですね。』と富彌は行塞つて了つた。昨日目黒で晝飯を喰ふ時、平時二人で麥酒二本がお定例であるのに今村君は強ひて三本目を命じて殆ど一人でガブ／＼飲んだのを一

寸妙に感じたが、まさか國子に二本のビールが三本であつたのが變であつたとも言へないから、黙言つて居ると國子

『それぢやア兎てもお話したつて無駄でせうね』と落膽したやうに言つた。

『何です、如何したと言ふのです、被仰いな。先刻から貴嬢の被仰ることが變ですね何でも遠慮なく被仰いな。僕に遠慮することはないでせう。今村君が如何かしたのですか。』

『やうです。實は兄の身の上に面倒なことが持上つて、家庭がごたく／＼して居るのですよ。それで今日は父の使者で参りましたので、なんでも貴下に御相談を願つて貴下の御意見を拜聽つて來いと申しますのです。』

富彌は意外の感に打たれた。

『如何なことです。しかし妙ですなア。それほどのことを僕にこれまで全然話しも仕なすのは。』

『眞實にさうですよ。父も母も私も貴下にだけは必定多少か御相談して居るとばかり思つて居たのです。』

此時禮子が梯子段を上つて来て、

『兄様、今村様が入来つてよ、今。』

『まア、如何しよう。』と國子は喫驚した。

『そして如何した。』と富彌は思はず鋭く問うた。

『國ちやんが来て今兄様とお話して居らつしやいますと言つたら、黙言て考へて居らしやつたが、又來ますつて去つておしまひになりました。』

國子と富彌は顔を見合した。

(二)

何も知らない禮子は二人の様子のだらぬに氣が着いて、

『國ちやんの入来やつてることを言はない方が可かつたのですか。』

『さうでも無いがね………まあ可いサ、お前は下へ降りて………』

禮子は逃げるやうに降りてしまつた。二人は尙ほ顔を見合はして居たが、

『如何しませう。』と國子は當惑し切た様子。

『如何しようも斯うしようも仕方が無いでせう。今村君だつて貴嬢が特に僕に會ひに來

てると知れば、何の用事だといふことは直ぐ悟つたに違ひないでせう。却つて可いかも

知れません。今村君からも知れたとなれば僕に相談するでせうから。』

兄に肖て思慮の深い國子は暫時く考へて居たが、

『眞實にさうですね。それでは皆な申上げて見ませう。實は結婚のことです。』

『今村君のですか。』と富彌は意外。兄の身の上と國子は初めからことわつて居るから今村の結婚にきまつて居りながら、富彌には全く意外であつたので思はず斯く問うたのである。

『さうです兄の結婚のことです。御存知もなかつたでせうが、父は近頃急に何か思ひ着いたやうに兄の結婚をやかましく急いで來たのですよ。それで自分で勝手に所々方々に頼んでお嫁様を探したのです。』

歳ごろ同志がこんな話をするので二人とも思はず微笑んだ。そして兄に肖て物に動ぜぬ國子も流石に頬を少し紅めた。

『可いのが見つかりましたか。』

『可いか悪いか兎も角も見つかつたのです、農商務省に出る高等官の令嬢で年は二十歳

とかで、學校はお茶の水を卒業なすつて、それに音楽の方も専門の教師にお就きになつたのださうですよ。』

『容色は如何です。』

『江崎様の禮ちやんにはかなはないけれども十人並以上だつて父が申して居ました。』と國子は微笑んだ。

『禮ちやんが別品かしらん………マア禮ちやんのことなんぞ如何でも可いとして容色も十人並以上といふなら一通りの候補者ぢやアないですか。』

『それで父は最早直ぐにでも取り定めたいやうな風で口を利いた人に此方は承知したらしい事を言つたやうです。』

『そいつは随分亂暴だね。併し貴嬢のところの父様は行り兼ねませんね、さういふことを。』

『エ、言ひ出しましたら何處までも意地張り通しますし、自分獨り定めて家庭のことなら何でも行つて了うのですよ。』

と憂愁の色は自から表はれる。

『それで今村君は如何いふのです。承知しないのですか。』

『何にも言はないのです。』

『承知とも不承知とも。』

『エ、父は兄が事務所から歸つて來ると直ぐ兄の部屋に來て自分から媒介者口を利いて、郷國も同じたとか仕度も十分だとか色々なことを申して勧めますが兄は一口も返事を仕ないのです。サツサと夕御飯を食べて外に出て了ひます。』

『そいつは妙ですな。しかし今村君のことだから何か深い考へが有るのでせうよ。それに同じく意地張の方だから何か考へがあつても何も言はないと決心したら父様が勧めれば勧めるほど黙つて了ひます。』

『ですから母も私も仲に入つて困り切つて居るのですよ。如何したら可いでせう。』

『きつと今村君から僕に相談がありますよ、若し二三日經過て見て相談がない様であつたら僕から言ひ出して訊問て見ませう。何しろ僕は父様の一了見で人間一生の大事を取りきめて其を今村君にわい／＼と強ひつけるのは大不賛成だつてお父様に仰しやつて下さい、今村君の性質としてお終には父の意に従つて一種の犠牲にもなるでせうが、それ

が決して好い結果に終るものぢやアないのです。貴嬢は御存知かも知れませんが、これまで今村君は一度甘んじて犠牲になつて居るのですからね。』

國子の胸にはひし／＼と應へた、國子は一度兄が犠牲になつた意味を知つて居る、流石に友の同情は深いところにあると思つた。すると悲哀がこみ上げて来る。

『眞實に兄は可憐さうですよ。』と眼には涙の溢るゝばかり、

『何卒兄の心からの友は貴下ばかりですから、これからも力になつてやつて頂きます。』

(三)

國子が歸る時、富彌は梯子段の上まで送つて下へは降りなかつた、下では母と妹とが頻に止めて夕御飯を食べて遊んで行けと勸めて居るやうであつたが、國子は堅く辭して歸つて了つた。

富彌は書齋の縁に籐の安樂椅子を持出し、飽くまで晴れて水のやうな秋の夕空を眺めながら、今村のことを考へて居たが、差當つて思ひ當る節がない。

昨日會つた今村龍一は富彌が十五の歳から今日まで兄弟同様に交際つて來た人物と別に變りは見えなかつた。結婚問題など様子にも見せなかつた。

承知、不承知、何れとも返事をしないのは豫ねて仲の餘りよくない父への片意地かも知れないが、まさか左様まで父を焦慮す筈もない。如何しても深い理由がある、會つて物を言はせる外、想像が就かないと富彌も斷念めて、たゞぼんやり外面を眺めて居ると禮子が梯子段の口から、

『兄様、御飯。』

『今直ぐ行くよ。』と未だ起ち兼ねて居る傍へ禮子は却つてやつて來て、

『國ちゃんの御用は何でしたの。』

『今村君の結婚問題サ。』

『まア！ そして如何して。』

『如何もしないサ。禮ちゃんを是非貰ひたいとサ。』

『アラ兄様はあんなことを！』と禮子が眞紅になつたのを見て、

『アハツハツハ……』と富彌はどたばた下へ降りる、それへ續いて禮子は追駈けるやうに激しく梯子段を踏んだので、『何ですぬお前達は。』と先刻から食卓の一方に坐つて二人を待つて居た母に言はれて、『何でもありません。』と富彌は尙ほ笑ひながら食卓に着

いた。禮子は「叱られちやつた。」と小聲で言ひながら臺所へ行つて、
 『菊やお汁を盛けて来てお呉れな。』と命じて直ぐ引返へして同じく席に着いて眞面目な
 顔をして居た。

富彌はビールの獨酌、心地よげに一杯飲み乾して茲に睦しい晚餐が初まりかけると『國
 ちゃんの用は何だえ。』と母親が徐かに其實待兼ねて問ふた。禮子は上眼で一寸兄の顔を
 見た。富彌は今度は眞面目に國子の言つた事を詳しく話して聞かした。母親は熱心に聽
 いて居たが、

『ほんとに國ちゃんは感心だねえ。さうやつて兄様の事を心配してお前の所へでも相談
 に來られるのですもの。眞實に毅然して居なさるねえ。禮ちゃんなど比べると全く幼兒
 だ。誰だつて同じ歳だと思ひやア爲ない。それに今村様だつてさうです、富彌の一ツ上
 でも何から何まで五つも六つも上の兄様見たやうですよ。眞實に頼しい御兄妹だ。』

『オヤ禮ちゃん許かと思つたら僕まで風向きが悪いぞ。』と富彌は微笑みながら飲みさし
 の洋杯を擧げると、禮子は、

『全くですよ、兄様は如何だか知らないけれど私など國ちゃんと比べると全く幼兒よ、

母上の被仰る通りよ。だつて學校にあんなにお友達が澤山居たつて國ちゃんのやうに恰
 惻で毅然して居て、それに優しくつて些少もお轉婆のやうな風のない方は全く無くつて
 よ。私國ちゃんに比べて幼兒と言はれたつて口惜くも何ともありませんわ。國ちゃんは別
 ですもの。』と大眞面目に述べると、

『禮ちゃん全然謙遜しちやつたね。それぢやア僕も幼兒になるかな。』と富彌はビールを
 了つて茶碗を差出し、母に給仕を頼んだ。母親は、

『それで如何いふ譯といふことがお前に解りましたかね。』と初めて本問題に返つた。
 富彌は頭を横に振つて『少しも。』

母親は考へて居たが、

『必定今村様に思ふ人があるのですよ。私はさうとしか受取れない。』

『それア有るかも知れませんサ。それなら今の縁談を不承知だと謝絶つて了へば可いで
 せう。』と富彌は討論でもするやうに言つた。

『さうは言はれないよ。不承知だと今村様が謝絶れば父様が直ぐ何故かと聞きなさるで
 せう、さうなると實は思ふ人がありますからと如何今村様だつて容易く打明けられるも

のぢやアありません。それで何方とも言はないでもぢくして居なさるのですよ。』と母親は得意らしく断言した。

『成程それも一説ですね。』と言つて富彌は茶を求めた。

此時玄關前を掃いて居た女中の菊が上つて来て、

『今村様がお見えになりました。』と言ひさし親子三人驚いて居ると、『何だか大變御機嫌のやうで御座いますよ。』

《四》

今村の噂で持ちきつて居る處へ又た來たといふので咄嗟に何處へ通さうかといふ問題が起つた。平時ならこんな問題の起るべきではない。茶の間でも座敷でも書齋でも今村の方からサツサと通つて、富彌が其時坐つて居た室が直ちに談話室になるのであるが今日はさう行かない。

『やはりお前の室が可いよ。』と母親の言葉の未だ終らぬ中に今村はヌツと入つて來た。

『やア御飯のところですか。』と平時の愛嬌ある顔で元氣の可い調子、此方は少からず狼狽して母親、

『否最早皆な済ましたのです。菊や早くかたづけしてお呉れ。』

『君、二階へ行かうか。』と富彌が起ちかゝると、

『イヤ此處で可いぢやアないか。』と今村は長火鉢の横へ坐つて煙管を出した。卷いたの葉と兩方用ゐるのが此人の常である。

禮子と女中とで卓ごと持出して了つたので、室は一度に片づいた。やつと電氣燈が點いた。何もかも綺麗に小器用に整理され、物各々其處を得て居る八疊の一室が十燭の電氣で急に明るくなつた。今村の顔は眞紅である。

『大へん御機嫌のやうですね。』と母上も煙草を喫ひ初めて今村の煙管が今日は變つて居るのを見ながら言つた。

『事務所の大酒家とつきあつたものですから飲み過しました。江崎君とならこんなことはないのがね。』

『さうでもないよ。昨日目黒で飲んだ三本のビールの二本は君だぜ。』と富彌はごろり横になつて今村と母とを等分に見て居る。國子の一件があるから心は如何しても穩かでない。

「一人で二本や三本なら我々だつて随分例があるぢやアないか。昨日に限つたことはない。昨日はたゞ郊外散歩の常例を破つただけサ。」

「何故お破りになつたのです。」と母上はそろ／＼遠廻しに「さぐり」を入れはじめた。

「何故は困りましたなア。散歩が特別面白かつたから、ツイ景氣を着け過ぎたのでせう。ね、君。」と富彌に承認を求めた。

「どうだか。」

富彌は母の「さぐり」の方へ賛成した。

「どうだかは可笑い、實際さうぢやアないか。」と今村は笑ひながら言つた。

「だつて常例を破つて景氣を着けるなんていふことは僕の役の方が眞實サ。そいつを君がやつたのなもの。君の平時にないことだから變に思はれても仕方がない。」

「ビール一本で變に思はれちやア堪らない。」

「だつて一葉落ちて天下の秋を知るとか何とか言ふぢやアありませんか。ビール一本だつて貴下の心と言はないとも限りませんよ。」と母上が眞面目で言つたので、

「アハツハツハ………母上が大變なことを言ひだした。ハツハツ………」と富彌が

先づ腹をかゝへた。

「ハ、ハ、ハ、さうすると何ですネ」と今村は軽く笑ひながら、「僕のはビール一本倒れて心の底を見せるといふ奴ですネ。」

「まアそんなものです。」と母上も微笑ながら言ふ。

「愈々さうなるとビールも浮とは飲めんことになつたぞ。」と今村は一寸眞面目になり「濟みませんが水を一杯………咽喉が馬鹿に渴いて………」

(五)

水と言はれて母上は茶すら未だ出さなかつたのに氣がついた。

「さう／＼勝手なことばかり申上げて未だお茶も差上げませんでしたね………禮ちやん今村様に冷水を上げてください。」

廊下を一つ越した臺所で女中の手助をして居た禮子は早速水瓶に洋杯を添へて持つて來た。今村はなみ／＼と注いで飲み干し富彌に、

「君は如何だ。」

「僕も一杯貰ふ」と富彌は腹這のまゝ水を注いだ。禮子が臺所へ引返さうとすると、今

村、

『禮ちゃん、まア此處に居らつしやいよ。一葉落ちたり、ビール一本轉がつたり面白い話がありますから。』

『私も、彼方で聞いて居て笑ひましたの。母上は随分面白いことを被仰ると思つて。』

母上は唯だ微笑のみ、富彌は國子の來たことを此方から言ひだして可いものやら、沈黙して居て可いものやら、それが氣になつて兎角平時のやうに物が言へない。

禮子が又た立上らうとするのを見て、今村は懷中に押込んで居たはんけちの包を出して、

『禮ちゃんにお土産があるのだから、まアお待ちなさい。』と言ひながら包を解いてリボンを取り出し、『二つあるから、どちらでも可い方をお取りなさい。』

『まア綺麗。』と禮子は直ぐ手に取つて見る 母上は顔を突出して、

『まア綺麗。』

『兩箇とも同種ぢやアありませんか、今村様』

『さうです。けれどどつちか可いのがあつてせう。一箇は國ちゃんにお土産。』

『それぢやア國ちゃんとお揃ひね。』

『え、お揃ひ。』

『まア嬉しい。』

『ほんとに何時も何時もお土産ばかり頂いて濟みませんね。』と母上は禮をいふ。禮子も禮を述べて直ぐ自分の用筆筒に納ひ込んだ。其時、以前に今村から貰つたりボンが二三種も其儘にしてあるのを見て、もう惜まないで使ふと思つた。

『お蔭様で少し酔が醒めた。サア少し歩かう。君散歩しないか。』と今村は富彌をうながした。富彌が未だ返事をせぬ中に早くも母上、

『まア可いぢやアありませんか。も少し居らつしやい。先刻一葉落ちたんで、婆さんに似合はんことを言ひ出して皆なに笑はれましたが、そんなことはどうでも可いとして眞實に今村様御酒を飲み過ごしてはなりませんよ。貴君も富彌もこれからが盛りですよ。』

『それに胸に屈託があつて飲む酒は無理がありますから尙ほ身體に利くさうですよ。貴下は決してそんなことは無いでせうけれど若しか又、何にか思ひ難んで居らつしやるこ

とがありますなら、足りませんが富彌は貴下の年來のお朋友ですから無駄でも御相談なすつてね、何とかね、……………」

母上は眼をしょぼくさして言ひ澁んだが、直ぐ思ひ切つた口調で、

『何處の親でも子を思ふ心は同じで結極は子の爲と思うて何でもするのですからね。それに兄様思ひの國ちやんまでが心を傷めて色々心配なざるやうなことでもありますと眞實にお可憐さうですからね……………』

富彌は聽いて居て母上は思ひ切つたことを言ひだしたものだ、今村も返事に窮するだらうと氣がついたから、

『まあ可い。何しろ散歩に出かけよう。』

(六)

今村と富彌が外出て去つた後で、禮子と母上は差向ひになつた。

『母上随分思ひ切つた事を被仰てね。』

『思ひ切た事つて?』

『だつて今村様が如何な事を考へて居らつしやるか解りもしないのに、國ちやんが可愛

さうだなんて言つて了うんですもの。』

『大概分つて居ますよ。』

『何がです。』

『今村様の胸の中は。』

『いくら母上に解つてたつて今村様から未だ何とも被仰らないのに此方から言ふのは何だか素破抜くやうぢやありませんか。』

『今村様は言ひだし悪いから沈黙て居らつしやるのだよ。だから此方から口を切つて上げれば必然直ぐ富彌に相談なざるよ。』

『それもさうですね。——そして母上は如何しても今村様は外に思ふ女があると思つて居らつしやるの。』

『さうですとも。』

『さうか知ら。』

『きつとさうですよ。』と母は斷言した。

禮子は少し上氣でポツと紅味を帯びた美しい顔を暫時傾げて居たが、微笑ながら、

『母上は如何な女だとお思ひになつて、今村様が思つて居らつしやる方は。』
 『必定何にもかもよく出来て容色も美しい方でせうよ。今村様のことだから。』と母上は禮
 子を見て今は特別此子は美しいよと思ひながら、眼を細くして言つた。

『さうか知ら。』

『さうですとも。』

『だつて今村様の傍には國ちゃんを着いて居らつしやるのだから豪らいのなら餘程豪ら
 くないとお氣には入りませんわ。そんな方があるでせうか。』

『まア無いやうだね。』と母は軽く應じた。

『さうでせう。』

『まアさうだね。』

禮子は又考へて居たが、

『母上私は今村様の今度の事は必然深い理由があると思ひますよ。或女を思つて居るな
 んて言ふことぢやア決して無いと思ひますよ。』と熱心に言つた。

『お前さんに解るものですか。』と母は平氣。

『いゝえ必然深い理由があるのよ。だつて今夜の今村様の様子は全く變ですもの。平時
 のやうに落着て居らつしやらないんですもの。そして何だか苦しいことを壓へつけて居
 らつしやる様子ですもの。』

『おほ、ほ、ほ、ほ、………此子は詰寄つて來たよ』と母は笑つて何か言ひ出さうと
 する時、富彌は歸つて來た。

『大變早やかつたのですね』と禮子は顔を見るや訊いた。

『何だか僕までが變になりさうだ。禮ちゃんビールを一本御馳走なさい。』と富彌は其處
 に坐つて兩手の指を頭の毛に突込んだ。

『まア如何爲たのですよ。』と禮子は呆れて訊く。

『それよりか早くビールを、オイ禮ちゃん。』

『何ですぬ此子はビールくつて。ビールは後でも飲めます。』と母も迫つた。

《七》

禮子と母に迫られビールは後廻はしとなつた。富彌は嘆息をして、
 『矢張り駄目。』

「駄目つて？」と禮子は眼を据ゑて聽く。

「今村君は何にも言はないのだ。」

「お前から切り出して訊いて見れば可いのに。」と母は焦躁しさうに言つた。

「それは訊きましたとも、自宅を出ると直ぐ國ちやんが来て之れ／＼の話があつたと言つたのです。さうすると國ちやんが来たことは僕も知つて居ると言つたきり何にも言はないんです。」

「まア」と禮子は低い聲で哀しさうに言つた。母はたゞ眉を擧めた。

「國ちやんの来たことを今村君が知つて居ることは僕も知つて居るぢやアないか、成程少し變だと思つて僕も黙つて了つて無言で坂の上まで行つたのです。十日の月が能く冴えてるんでせう。お濠が霞んで佳い景色なんです。平時なら二人が面白い談話をするか氣燄でも吐き合つて散歩するのが今夜は無言でせう、僕も妙な氣持になつて来たから坂で別れて歸らうかと思つたのです。けれどもさうすれば國ちやんに頼まれたことが何にもならないでせう。どうせ言ひ出したのだからと思つて坂を下りながら

「承知とか不承知とか何方でも可いから明白に言つた方が僕は可いと思ふがね。如何だ

らう」

と宥るやうに

言つて見ました。矢張今村君は黙つてるのです。そして顔を見るとあの威嚴のある顔が全然眞面目になつて居ると月が正面に照して居るとで凄いやうでしたよ。それで眞正面に向いてのつそ／＼歩く風は全然僕の言ふことなど聽いて居さうもないやうに見えるのでせう。僕も少し癢に觸つたけれど、今村君が斯う言ふ傲慢な態度をすることは昔からの癖で、ひどく眞面目のときか、ひどく氣に觸はつたことのあるとき能く此癖を出すのを知つて居るから、僕は我慢して一緒に歩いて居ました。けれども終極がないから、

「ね君、さうぢやアないか。然でも否でも何方か言へんことはないだらう。若しそれが言へんなら考へてることがあるから當分延ばすと言つたつて可いぢやアないか。」

と言ひました。それでも黙つて居るのです。最早とても無益だから中止うかと思つたが、それでも、

「強ひて君の祕密に立ち入る譯ぢやアないが國ちやんから聽かされた以上、僕も心配だからね。それに母でも妹でも君のことだといふと他人ごとゝは思はんで騒ぐ方だから今

日だつて君の來ん前に色々なことを言つて氣を揉んで居た位だ。」

と言つて見ました。かう言へば何とか言はなければ濟むまいと思つたのですが矢張沈黙つてるのです。そして急に肩を斯う振つたのを見て僕は、グツと癢に觸つちやつたのです。何故なら今村君は他人から色々なことを言はれて最早辛抱が出来なくなると口に出さないで此身振をするのが癖でそれがサも、『うるさい！』と言つたやうに見えるのです。だから僕は思はず、

「どうせ僕なんぞ君の相談相手にならないだらうけれど……」

と言ひますと。ぢろり僕を見ましたが、やがて言ひ悪くさうに、

「君は本氣でそんなことを言ふのか」と訊きました。それが如何にも辛さうな聲でせう。僕は急に氣の毒になつて黙つたまゝ歩いて居ましたが、

「僕だつてさういふ外仕方がないぢやアないか。」

と言つて今村君の顔を見ると眼に涙を一ぱい含ませて唇がぶる／＼戰慄つてるのが月で能く分るのです。」

『涙を』と禮子は思はず叫んだ。そしてその美しい眼が濕つて來た。

『えゝ涙を。彼の強い男ですもの容易なことで涙など人に見せはしないのが兩方の眼に一パイ含ませて拭はうともしないのです。それを見ると僕は最早何も言へなくなつて丁度目附の口まで行つた處で、

「今村君今夜は此處で別れう……」と足を停めると今村君は何もいはないですんずん去つてしまつた。』

（八）

麴町區土手三番町の閑靜な處に今村一家は住んで居た。黒い門の右に今村專一、左に今村龍一の二箇の木札が出て居る。專一は父で札が古い。龍一のは未だ新しい。

龍一が辯護士の試験に及第して磯野博士の法律事務所に通勤を初めたのは一年前からのこと、其名札を門に掲げたるも其時からである。

父の專一は昔の判事で、多少の恩給は下るが、其の半分は酒に化つて了ふらしい。郷國の田地から上る小作米が今村一家の生活費の基礎を成して居るが其も決して豊ではないやうだ。其處で龍一の弟は十八で學校を止め文部省の雇に出て月給十圓から腰辨の第一歩を踏み出し、降つても照つてもテク／＼通を休まず二十二歳までに二十圓と經登り大

に家政を助けて来たのである、しかし今村の父母はお國風の儉約氣質で押通して来たから一家に奢侈の風は少しもなく従つて家政不如意のいやな様子は見せた事はなかつた。龍一が法律事務所へ出て初めて三十五圓に有りついた時、父の專一はこれで安心したやうなものゝ判事に轉職するまでは全くの安心とは行かないと言つた。これは自分が判事であつたこと、判事が終身官であること、この二の理由にも由るが、第一官吏でなければ承知が出来なかつたのである。明治三年に龍一といふ男の兒を作つた此中老人は當世に官吏が一等高尚な職業で且つ最も安全なものと思つて理窟も何にも無いのであつた。其處で辯護士は當座の足掛け、其内に親族の玉乃博士が大審院の判事で幅を利かして居るからこれに頼みこんで龍一を是非判事にするといふのが希望で、其希望が本人の龍一を首肯かすか如何だかそんなことは思つたことはないのであつた。龍一は父が一人決定で判事云々を話しかける時も相手にならなかつた。それは判事が嫌だからではない、たゞ何に由らず父の相手になるのか不好きからである。江崎富彌は此事を知つて居るから結婚問題で今村が無言の行をやるのも此處に原因を有つのではないかと一寸思つた位である。

そして富彌も今村の母上や國ちゃんや弟の孝一君や皆な好であるが阿爺様だけは餘り好かなかつた。今村は一週に一度以上、殆ど常例の如く江崎の家を訪れるが富彌はめつたに今村の家を訪うたことがない。たまに訪うて阿爺様に捉まらうものなら不明瞭な言語で愚痴と厭味を止め度なく浴せかけられる。富彌はそれが大嫌であつた。

(九)

今村の南向きの六疊の間に五七八と三十二三の人が差向ひで話して居る。若いのは當世流行の洋服を着て鍔革の巻煙草入を拵つて翫具にして居る。年寄は人並より頭が大きい。脂切つた顔がむくんで見える。爺むさい短い鬚髯が鼻の下と腮から揉上へかけて生えて居る。太く丸く隆起して其頂の眞紅な鼻。膨ぼつたい脛。眠さうで鈍く光つた眼、而も其眼はきよろ／＼と絶間なく動いて靜に一定のところを見ることが出来ないやうだ。

『全體龍一には悪い癖があつて不可、乃父の言ふことだと、鼻であしらつて居るやうぢや。』と低い聲で言つた。

『それは叔父様の邪推でせう。』と若年いのが同じく低い聲。

龍一の父も、若い紳士も見たところ大きな聲で景氣よく話しさうに思はれるが不思議とさうでない。

『イヤ邪推ぢやアない。今度のことでも決定の着かんのは……決定を着けやうと思へば直ぐ着くのを、それをウンだともスンだとも言はんで決定を着けんのは皆なさうぢや乃父を相手にせんからぢや。』

若紳士は苦笑ひで無言、心の中では或は然らんと思つて居る。

『けれども厭なら厭だ位なことは言へさうなものですがね』と、これは若紳士も不思議だから、つい口に出た。

『それが乃父を相手にせんから言はんのぢや。孝一や國と違つて龍一はどうも乃父と氣が合はん。全體乃父は今の若いものとは餘り氣が合はん方ぢやが。』

そろ／＼厭味が出はじめた。若紳士は大急ぎで談話の梶を取り直しかゝつた。

『何しろ困りましたね。先方では兎も角も早く見合を仕ようといふ騒ださうですからね。何とか早く返事をしてやらなければ。』

『まアさう急がんでも可いがね。』

『急がんでも可いぢやア困りますよ、中に入つて居る者が。尤も僕は間接だけれど。』

『まア可いよ、さう騒がんでも。』

『誰も騒ぎやアしません。騒ぐのは叔父様だけぢやアありませんか。』

『乃父もさう騒がねがね。』

『それぢやア斷然謝絶つて了ひませう。先方だつて迷惑ですもの。』と若紳士は少し聲を高めた。

『さうお前のやうに言うたつて仕方がない……今に國が歸つて来る、歸つて來たら様子が解るだらう。』と一段聲を低めて、のろ／＼と粘つこく言つて落着き拂つた容態。

若紳士は中腹。これだもの他に對手にしなくなるのは當然だ。何でもあべこべを言つたものだ、あべこべな風を仕て見せたものだ。毎晩々々酔はらつて旋毛ねじれの愚痴やら皮肉な厭味を『あべこべ』式に二三時間も行かれては堪るものぢやアない。叔母様や國ちゃんが可哀さうだ。孝一君は例の超然主義だから平氣なものだらうが龍一君が逃げ廻るのは決して無理でない。我輩なら同居し得ないね。下宿するね。初からこんな阿爺様であつたのだらうか、天性だらうか——アルコール中毒も手傳つて居るに違ひな

いなど若紳士は黙つて色々考へて居た。此紳士は今村の親族、大審院の判事の玉乃博士の女婿で、三年前に初めて今村一家を知つたのである。

『江崎様が在宅で呉れ、ば可いが。』と年寄は獨言のやうに言つた。
玉乃は相手にならなかつた。

(十)

使者の國子が間もなく江崎から歸つて來たが、待つて居た程の事もなく不得要領なので二人とも失望した。若い玉乃は、

『それぢやア江崎君がこれから龍一君の心底を探らうといふんですね。』

『今のところ左様です。』と國子が答へた。

『まるで雲を掴むやうだ。』と老人は忌々しさうに唸るやうに言つた。そして使者の國子に責任でもあるやうに、其どんよりした眼でじろく國子の顔を見た。慣れた國子は氣にも止めなかつた。

『せめて掴まへる雲でも出て居れば方角が取れるが、今の國ちゃんの話の模様では先づ望がありませんね、當分は。』と玉乃も少しやけ氣味である。

『何故でせう。江崎様から兄様に話せば多少か様子が知れるでせう。』と國子は玉乃の言葉が少し氣に入らない。

『僕は江崎君から龍一君にぶつかつて見たつて手應はないだらうと思ふ。』

『全然?』

『全然か如何だか其處までは斷言出来ませんが、兎に角決して要領は得ないと思ひます。何故なら若し龍一君が江崎君から問はれて初めて打明ける位なら、最早とつくに相談して居る筈です。それを彼の仲善が今まで全つきし談話を仕ないといふのですもの、龍一君の氣象として江崎君にも言はないと決心した以上。今更ら容易に口を開けるものですか。僕は左様思ひますね。』

『だつて相手が江崎様ですもの。』と國子は此推測に服し兼ねた。

『イヤ武様の論が當つて居る。龍一が意地張出したものなら後へは引かん。私が龍一に相談せんで今度のことを取定めかけたといふのが不平なんぢや。ぢやから意地張るのも皆な私の面當なんぢや、さうぢや皆な面當なんぢや。』と年寄は愚痴になつて來た。
『そんなことは有りませんわ。』と國子は愚痴を取消しにかかつた。

『まア面當としても何としても結果は同じことです。』と玉乃武は頭から愚痴を押のけて『どうあつても龍一君が口を開かんとすれば今度の縁談は無期延期ですね。』
 國子も年寄も黙つて居る。

『さうすると一日も早く先方にその旨を通知しようぢやアありませんか、理由は何とでも着きます。』と玉乃は短兵急。

『兎も角江崎様が兄上に話して見て下すつてからでも可いでせう。通知は。』

『それはさうぢや。』と年寄も賛成した。

『それは三日や四日は遅くなつても仕方がないから、さうませう。二人の話なら直ぐ済むでせうから。』と武は問題の落着に近づいたのを喜ぶらしい。

『しかし通知する前に私からでも誰からでも龍一にお前の返事がないから今度の縁談は無期延期にすると一應ことわつたが可えぞ。何を考へて居るか解らんから。』と年寄は未練がある。

『それも可いでせう。』と武は唯だ軽く賛成した。國子は父の言を至極尤もと思つた。

此時郵便。葉書の走書が一龍から今夜は歸らぬとの報知であつた。

(十一)

今村龍一が葉書を出したのは江崎を訪問する前に法律事務所を書いたのである。江崎を誘つて一晩泊りで羽根田あたりへ出掛ける積りであつたが、妹の國子が江崎を訪問して居たので此計畫は外れて了つたのである、其處で今村の種々の豫想は端から崩れて其夜までに種々の命に遇つたが、葉書だけは豫定の通り今村の私宅に着いたのである。

しかし國子は葉書を見るや、自分が江崎を訪ねて居たことを兄が知つて後に出したのもと思つた。激するところがあつて外泊するのだと思ふと心中大に驚いたが顔にも見せなかつた。玉乃が去つた後、父は直ぐ大踏坐で食膳に向つてちびり／＼と大好物に取りかかつた。

孝一は父より先に食事を済して北の四疊半に隠れて了ふか、散歩に出るのが常例で決してちびり／＼のお側に居ない。父も亦たこれを不足に思はない。頭から別物にして居るらしい。

たゞ瘠せこけた母と國子は必ず膳の前と横に坐つて柔順く控へて居なければならぬ。そして酒を含んだ口からだら／＼とだらしく流れ出る不足話を謹聽せねばならぬ。し

かし其不足話が半分獨言であるから合槌を打つ必要のない場合が多い、それだけは未だしも幸福で、他のことを考へて居ることが出来る、今日は縁談の運びが愈々不結果に終りさうになつた理由か不足話がくどくどと獨言から初つたので、國子は兄の外泊のことを頻ぬと心配して考へて居た。

兄は自分すら未だ打明けられないこと、言はずに秘密を内證で江崎様に持つて往つたことを激したに違ひないと國子は思つた。今夜何所へ泊つて如何な煩悶をせらるゝだらうかなと思ひつゞけて居ると、

『國。』突然父の鈍い聲。

『ハイ。』

『江崎様は眞實に何にも知らん様子か。』

『え、全く御存知ないやうでした。』

『龍一が外に思つて居る女でもあるか、そんな話は無かつたか。』

『おほッほ、ほ、ほ、ほ。』

『笑ひごとぢやアない。』

『だつて其様お話は出来ませんわ。』

『江崎様に訊て見れば可えのに。』

『そんなこと私から江崎様に聞かれるものですか、ね母上。』

『さうね。』と何事も柔順な母は微笑んで答へた。父は暫時考へて居たが、

『私は龍一が江崎の禮ちやんを想つて居はせまいかと思ふが、如何だね。』

國子は母と顔を見合せて黙つて微笑んで居る。

『國は如何思ふ？』

國子は尙も答へることが出来ない。

『禮ちやんは年頃で美人で學問も能く出来るのだから龍一が想つたつて無理はない。』

『おほッほ、ほ、ほ、ほ。』と國子は少し顔を紅らめた。

『お前も能く褒めるぢやアないか。』

『それやア褒めますわ……………』

『そら見ろ』と得意になつて、『そこで第一龍一が禮ちやんを想つて居ないのなら如何兄様と仲が善くつても彼様度々往くもんぢやアない。それから何よりの證據は龍一が禮ち

やんを想つて居るからこそ江崎様に相談を仕ないのぢや、これぢや、全くこれぢや。』と年寄は獨りで合點して了つた。

（十二）

國子は兄の龍一が禮子を想つて居ないとは言ふことが出来ない。

思ひ當る節せきが全くないでもない。けれど兄の性質としてよし深く想つて居たにせよ、決して其様子を外には表はさない。であるから兄の禮ちゃんを戀して居ると口へ出して言ふことも出来ない。

しかし想つて居るのが眞實なら、兄は今度の縁談を厭だと初から斷言し得る筈である、不審は此處に在る。

つまり國子には父が突然起した此疑問に就いては、如何どうしても急に返事が出来ないのである。

今村の老人はフと思ひついたので決してこれまで龍一と禮子のことなど毛ほども思つたことはない。然し思ひつくや其を例の癖で主張して居るうちに段々眞實ほんとうらしく自分で

感じて来て、遂に理窟まで着けて了つたので、理窟が着くと益々國子の同意を得なければ承知が出来なくなつた。

『如何どうぢや國、理由が解つて見ると我の鑑定は動くまい。』

國子は唯だ眼をまじくさして居るばかり。

『如何どうぢや。』

『私には解りませんわ。』

『何故解らん、解らんぢふことが有るものか、お前に解らんぢふことは無い。』

『だつて、そんなこと被仰つたつて……』

『如何あつても我に解つてお前に解らんぢふ法はない。龍一の世話は誰がする、何から何まで龍一の事なら皆なお前が爲るぢやアないか。我家で龍一と眞實ほんとうに話をするものはお前だけぢや。それでお前に解らんぢふ法はない。』と益々粘つくく攻寄せる。

『アラ私にだつて兄上にいさんは別に何にも言ひませんわ。變つたことは。』

『言はないでも様子で解る。』

『様子なんて私などに解りやしませんわ、ね母上おつかさん、他のことゝ違ひますもの。』と國子は

眞面目になつた。母上はかゝる場合に處する物を常に持つて居る——何方附すの微笑。
『他のことゝ異うから猶のこと様子で解るのぢや。傍に始終附いて居てそれが解らんぢ
ふのはお前が愚鈍ぢやからぢや。』

國子は思はず笑つた。

『愚鈍と言はれて笑ふやうな女ぢやから解らんぢや。』

國子は又た笑つた。

『笑へ、笑へ。我の言ふことが間違はんことが直きに分る——爛が少し微温いぞ。』

國子は猶も笑つて、

『それぢや父上若しか兄上が禮ちやんを想つてたら如何なすつて。』

『貰ひに往くばかりぢや。』

『若しか江崎様で否だつて言つたら。』

『否だつて言へばそれまでぢやないか。』

『さうは行きませせんわ、さうすると兄上と江崎様の仲が妙になつて了ひますから。』

『お前も愚なことをいふ、此方で貰うとなつても無闇に言ひ出せるもんぢやアない。よ

く先方の様子を探つて愈々呉れさうだと見込が着いてからのことぢや。』

國子は莞爾笑つて、

『あゝ若しか禮ちやんが兄上のところへ嫁て下さるやうなら如何なに可いだらう。』とさ
すがは年若き少女、いつしか如此いふことを言ふ。

(十三)

今村の宅では龍一は今夜歸らぬことゝばかり信じて居たから、十時ごろ戸締にかゝる
と、突然歸つて來たので一番驚いたのが國子である。

龍一は例の如くずん／＼自分の部屋に通ると眞闇。國子が大急ぎで洋燈を持つて續い
て來るのを待つて居る。

國子は机の上に洋燈を置いて、

『今夜はお歸りにならんと思つて居ました。』

『如何して。』と今村は机に向つて跣坐を組み、肱を突いて腮を支へながら言ふ。

『でも歸らないといふ葉書が参りましたから。』と國子は不審に堪へぬ様子。

今村は黙つて居た。故意ととぼけたのかそれとも葉書を出したのを忘れたのか解らな

い。斯ういふ事は從來これまでの彼に無いことだ。彼是の談話は此際無用と見て取つた國子は、

『直ぐお寢やすみになりますか。』

『國ちゃん。』

『はう。』

『酒。』

『今から。』

『可いいぢやアないか、今からでも。』

『直ぐ持つて参ります。』と國子は龍一の脱ぎ捨てた羽織を疊みながら、『何にもありませんよ。召食めしるものは。』

『無くつても可いい。』

『ありましたく。今日武様たけしんが故郷こきやうから贈つて來つて雲丹うんを持つて來て下さいました。』

『それア上等だ、何しろ早いいが可いね。』

國子は直ぐ起たつて勝手に去つた。龍一は玉乃の奴、又彼おのことで來たのだなと思つた。

間もなく國子は膳ぜんを運んで來た。龍一は大概の場合に自分丈け自分の部屋で食事をす

る。そして其給仕とお酌は必ず國子の役と決定つて居た。

『そらお土産みやげ。』と龍一は先づ一杯お酌をして貰つた後あとでリボンを投げ出す。

『まア綺麗、如何も難有う。』

『禮ちゃんとお揃ひだよ。』

『さう？』と國子は龍一の顔を見た。

『今夜江崎へ訪つてそれと同じおんなのを禮ちゃんに進おげて來た。』

『今夜？』

龍一は酒を含んで點頭うなづいた。さすがの國子も事が皆な意想外なので一句もない。龍一は平氣で、

『禮ちゃんも喜んで居たよ。お前とお揃ひだつて。』

『さう？』と國子はお揃ひの事よりか龍一が晝間江崎を訪うて、夜よる又た訪うて富彌とみと如何いふ談話けなしがあつたか、そればかりに心を奪はれて居る。

『さすが本場の雲丹うんだ、美味い。』と龍一は國子の意想おもはくとは全然まる飛でび離れたことを言ひながら、一杯々々と止め度なく酒を流し込んで、忽ち一本平げて了つた。

『未だ召上りますか。』と國子は恐れて問うた。
『未だく。』

此時次の間で年寄夫婦が何事か言ひ争ふ聲がする。今村一家特有の低い聲だから明瞭とは分らない。

國子は起つて次の室に去つた。龍一は素知らぬ風で雲丹を嘗め乍ら酒氣を吐いて居る。
『父上今夜は不可ませんよ何卒か明日の朝にして……。不可ませんよ。後生ですから今は……。』と國子の泣聲になつて訴へるのが途切れに聞えた。間もなく國子が来て、
『父様が此所へ來ると被仰つていくら止めても承知なさいませんが……。』とおろく聲でいふ。

『可いよ、お出になつても。』

『父様も随分酔つて居ますよ。』

『可いよ。』

と言ひ合つて居る中に、父はヌツと入つて來た。

（十四）

國子をはらくして居ると父は龍一の膳の向へ坐つて四邊を見廻しながら、

『國、お銚子は如何したのぢや、早く持つて來て上げないか。』と何となく様子が可い。

『私は最早澤山です。』と龍一は頗る眞面目で酔つた風は少しも見えない。

『まア可え、久しぶりで一盃貰はう。』

『今夜は最早止ませう。』

『お前はそれだから不可い、我が折角久しぶりでお前と……。』

『ほんとに父上今夜は最早御酒はお止なさいよ。兄様も澤山だと被仰るんですから。』と

國子は横から父の言葉を奪はうとする。

『お前は餘計な事を言はないで、お銚子を持つて來るのぢや。』と父は國子を睨みつけた。
『でも……。』と國子は起ち兼ねて兄の顔を見ると、龍一は下唇を嚙んで下を向いて居る。

『でもぢやアない、早く持つて來るのぢや。』と父は承知しさうもない、更に逆へば事が愈愈面倒になるばかりと國子は起つて銚子をかへに行つた。

『如何ぢや、その雲丹は上等ぢやらう。』と父は機嫌を直して、更に龍一の機嫌を取らうとする口振である。

『中々上等です。』と龍一は冷やかに言つた。『やはり雲丹は故郷に限るやうぢや。』と父は珍らしく無いことを獨言のやうに言つて、其どんよりした眼に何となく得意の色を見せて居る。

二人は暫時無言で手持無沙汰で居ると、やがて國子が銚子を持つて來たので、

『サア兄上にお酌をして上げる。』

『まア父上に一ツ差上げませう。』と龍一は盃を父に差した。父は飲み干して直ぐ龍一に返し、

『お前は今夜歸らないやうなことを言つて來たから如何した事かと心配して居つた。』

『えゝ。』と龍一は言つたぎり黙つて居る。

『今日玉乃の武さんが見えた、さうだ、此雲丹も武さんが呉れたのぢや。』

『さうですか。』

此時國子は急に父の傍に摩寄つて耳に口を着け、聞えるか聞えるほどの聲で、

『今夜彼の談話をするのは止して下さいよ。』

『何故や。』と父は龍一にも聞えるほどの聲で不平らしく言ふ。

『だつて何も今夜に限つた事では無いぢやアありませんか。折角兄上が歸宅つていらつしやつたのだから……』と國子も仕方がないから聲を高めた。

『歸宅つて來たから尙ほ談話が出来る理由ぢや。お前は黙言つて兄上にお酌をしる。』

龍一の方から盃を出したので國子は酌をした。龍一は一口に飲み干して又出した。國子は兄の顔を見ながら酌をした。

『龍一、聞いて呉れ斯うだ、今日武さんが來ての談話にお前が如何あつても返事をしないとならば此縁談は無期延期ぢや、先方は急いでる事ぢやから放擲つては置けない、何でも理由を作へて其事を通知しなければならんといふのぢや。如何ぢや。我もこれは文句がないのぢや。が其前に龍一に其を事譯つて置かうといふことに談話を決定たのぢや。お前も異存は無からう。』

龍一は黙々として下を向いて居たが又た盃を出して酌を促した。國子は父の方に氣を取られて氣が着かないで居ると、

『國ちゃん。』

國子は驚いて酌をした。

『それには異存は無からう、如何ぢや。』

龍一は返事しない。

『如何ぢや異存は無からう。』

龍一は黙つて居る。

『これは可笑い。お前はこれにも返事をしないか。』

『だから父上今夜に限つた事ではないぢやアありませんか、最早後生ですから止して下さいな。』と國子は最早涙ぐんで來た。

『止さない。これは我に無理のところは一もない。これにも返事の出來ない理由はない。』と父は顔色を變へて唇をぶる／＼さして居る。

龍一は徐に机の下の手箱から紙入を出して懐中し、其處に疊んだまゝ置いてあつた羽織を手早く着て、つと室を出た。呆れて居た國子は玄關まで追かけた時、龍一は既に格子を開けて外に出て居た。

續いて駈けだして門を出て見ると晝間のやうに冴えた月影を踏んで龍一は七八間も先を大股に歩いて居た。

國子は門に靠れかゝつて泣き崩れた。

『暴風』休載に就て

休載又休載で實に讀者に對し新聞社に對し申譯がない。

申譯がないが實は已むを得ないので、余自身から言つても書く苦勞よりか休載の方がどの位辛いか分らない、けれども實に已むを得ないのである。

數ヶ月間放擲して顧みなかつた病、友人の勸告も家族の心配も無視して生來のずぼらで蓋をして來た病、それが近來益々面白からず發展するので終に數日前から醫師の厄介になる身となつた、生來のずぼら許りでなく全體醫者にかゝるといふことが余の一等きらひの事を敢行したのだからお察しを願ひたい。よく／＼であるといふ事を。

さて醫師にかゝつて見ると午前はまで其方に取られて了う。午後は醫者にかゝらぬ、ずつと以前から癡人同様で口こそ達者でも筆を執る程の精力はないのである。従つて近頃休載が多い理由もお分りになつたらうと思ふ、實に已むを得ないのである。

そんなら此先は如何するかとの疑問が生ずる。御尤の次第であるが目下の状態は長くは續かないのである。天候恢復、海濱への交通機關が復舊次第に轉地する筈になつて居る、轉地したら其處から毎日缺かさず原稿を送ることが出来るのである。されば天然の暴風雨が過ぎ去つた後で余の『暴風』が小止なく吹き初めることゝ御承知を願つて此の處數日間は是非もないことゝ斷念めて頂きたい。

しかし今後運命の神が『くだらない命だ可い加減に切り上げろ』と宣告するか、日本新聞の讀者が『面白くない小説だ、可い加減に切り上げろ』と怒鳴るならば、余は『左様なら』といふの外はない。

先づ右二ツとも余に取ては頗る感心しないことで、斷じてさういふことの無いことを願ふ。

親子

(上)

年頃四十あまりの、小ざつぱりした衣裝なりの女、東京市内は山の手の奥、竹藪たけぐさ多き某町を往きつもどりつ、四邊あたりをきよろ／＼見廻はすは、探す家のあるらしい。

向うから來た老人に、『このあたりに芝田之助様といふ方は御座いますか、畫をかく方ですが』と尋ねた。

『芝田之助様と』と老人は小首を傾かしげて、『如何どうも存じませんな。此の先に酒屋がありませんから其處そこで聞いて御覽なさい』と言ひ捨て、去いつて了つた。

婦人は成程と氣付き、早足で半丁餘り北へ後もどりして、角店かどみせになつて居る三河屋といふ酒屋の前に立ち、其處そこに小僧の居るを幸さいはひと、『一寸とお尋ねします、此邊しほに芝といふ名字なづなで畫をかく人の家は御座いますまいか、此邊は少しも慣なれませんかから探しあぐんで

居るので御座いますが」

小僧は顔を突き出した。「何丁目です」と無愛想に言ふ。

「サア其れが可く解らないので御座いますが、たゞ何町とばかりで」と婦人は當惑の様、これを見て帳場に坐つて居た此屋の主人らしき男。

「丁目も番地も解らんでは何れ憎う御座いますが、事によると上島様のお屋敷内かも知れません。一つお屋敷で家が七十軒もあります。其差配が此處から二つ目の横丁の角で御座いますから、其處で聞いて御覧なさい、同番地ですから差配に聞けば解るでせう」と親切に教へてくれたので、婦人は禮を言ひ、二つ目の横町の角を忘れんやうにと口の内で繰返し店先を立ち去つた。

此時日は既に西に落ちて夕風寒く身に沁めば、婦人は肩をすぼめてシヨールを強く引きしめるのである。

東といふ名字の上に二丁目十六番地差配と朱書にした瓦斯燈には最早燈火が點いて寒さうな光を微に放つて居る。そして四邊近邊、宵ながら人影も見えない。

京橋から外には一年中出たこともないほどの婦人が、こんな淋しい場所へ來たので、

我知らず身の周圍を見まはすも無理ならぬことだらう。「はゞかりですが、お差配の中に芝田之助様といふお家が御座いますまいか」と門の外から問ふ聲さへ、氣味悪さうである。暫らくすると内で、

「下等の三號ぢやないか」と言ふのが女の聲、夫に續いて、

「谷口さんの隣りだらう」と男の聲で言ふのが外に聞えた。間もなく内から大きな聲で、「こゝから眞直に一丁ばかり行くと、野村と書いた瓦斯が出て居る家があります。それについて廻ると三軒目の家が芝様です」と怒鳴るやうに言つた。婦人は教へらるゝまゝに早足で歩いた。

「のむら」と假名で書いた瓦斯が出て居る家を見つけた時は、最早しめたと婦人は胸を擦つたのである。三軒目の家は直ぐ解つた。

内はひつそりとして人氣もなさうな、見るからして哀れな棟割長屋の前に立つた時は思はず足がすくみ、眼には涙の湧くばかり。氣を取り直して、

「もしく、芝様は御宅で御座いますか」と小さな聲でおとなうた。内から障子が開くや、洋燈の火影さつと射し、内庭に立つ婦人の顔をまともに照した。

『りさぢやないか、まアお前如何して來たの』と内なる人は思はず聲を上げた。見れば年頃二十一、頭に束ねた髪かみの亂れよりも先づ目につく其衣ころも此寒空に袷あは一衣、ひつかけし半纏はんてんの袖口そでぐちからは綿わたが見えるのである。りさは暫く口もきく得ない。この時小兒こどもの泣く聲と共に、男の優しい聲で、

『繁しげが泣くよ』と次の間で呼んだのは此家の主人らしい。年若き母親は直ぐ起つて内に入つたが、間もなく取れば三つになる乳飲兒ちのみこを抱いて出で、

『りさ、まアお上りな、其處ぢや話も出來ないから』と言はれて、りさも座ざに通れば、此處は三疊敷さんじょう敷の畳黒く、壁落かきち、坐すわるも氣味悪げであるのを、顔にも出さず、あらためて慇懃いんそんに手を突き、

『晝間の明るい中に早く上る積りで参りましたが、何分お宅が知れませんでしたので、まご／＼して居る中に日が暮れて遅くなつて失禮致しました。旦那様にもお嬢様にもお變りも御座おいませんか』と言はれて、答へるよりも問ひたきは父母の安否である。女主人は、

『暗くなつて尙ほ探し悪かつたらう、でもまア可たく訪ねておくれたつた。あれから私共は變りもないが、毎日々々氣にして居るのは父様ちちさまや母様かあさまのことばかり、父様も最早お歳

だから此寒さに中あたられでもなさるまいかと、そればかりを苦にして居るのよ』と言ふ中にも涙聲。りさも涙を拭ひながら、『きのふけふと思ふうち、お嬢様がお宅をお出になりましてから最早三年になりますから、旦那様のお弱りなさるのも無理は御座おいません、このごろの御様子ごやうすでは此冬が如何だらうかと御宅では皆な心配なすつてお居おになりませぬ。それで御座おいますから、出來ますことなら、父様の御存命中一度園子そのこに會あはしたいと母様は此頃そればかり苦にして、二言目にはお泣きになりますのを、私もお傍そばに見て居て辛いばかりか、私とても同じ心持で御座おいます。私の膝ひざでお育て申せば我兒も同じお嬢様で御座おいますもの。如何にかして、一度旦那様のお口から園そのに會あひたいと言つて戴おかうと、何かにつけてはお嬢様やお孫様のお噂うわさを致しますと、初はじめての中は顔を振つて折り折りは私の顔を睨にらんでお留めになりましたが、此頃ではたゞ眼をしばたゝいて横をお向きになるばかり、其後様子やうすを見て私が何で泣かずに居られませう。お嬢様、りさは眞實ほんとうに袖そでを嚙かんで突伏つつぶしては堪こたへて居ました。ところが昨日きのふのこと御座おいます。夕日が縁側えんがわの水仙すいせんに射さして居るのをガラス越しに見てお宅うちになりましたが、りさや、園そのは今でも水仙すいせんが好きだらうかとお言葉で御座おいます。私もこゝぞと、『お嬢様もお可哀あはれさうに

今では水仙どころぢや御座いますまい』と申し上げましたら、

『公然と會ふ譯には迎てもゆかぬが、何とかして今の中、顔でも見せてやりたいものだと被仰いました。サアメたと、私はそれで明晩にも一寸お連れ申しませうと申上げると、お前の宜いやうにしてくれとお言葉で御座いました。如何で御座いませう、お嬢様これから直ぐにお出かけになるわけには参りますまいか』と乳母の長物語。園は初めより頭も得あげず泣きながら聞いて居たがさて、何と返事を仕て可いか解らぬのである。直ぐにも行きたいは山々なれど、所夫が如何いふか、若し行くことはならぬと言はるれば、それきりで濟うか、りさの親切も無になるばかりか、父様も尙ほ片意地になつて、それなら死んでも會はぬと被仰るのは定つたこと、それならば所夫が可し直ぐに行けと許して下さるか、それは先づ望のないこと、兼てのお言葉でも解る話、多分襖子一重でりさの言ふのを聞いて立腹つて居らるゝかも知れぬ。さて如何したら可いものかと、暫時は言葉もなく、頭を垂れたまゝ考へて居る。その様子を、りさも見て黙つて居ると、次の間から、『園！』と鋭き一聲、『園！一寸此處へ！』

芝田之助は年若き畫家である。彼は貧苦の中に育ちながらも、父の腕を續ぎ母の心を

享け、天性豪毅なるが上にも非凡の技倆を持つて居るのである。

未だ美術學校に通つて居る頃、ふとしたことから大宮園子と相知つた。園子は容貌の秀麗なるばかりか、心情の美しきに、田之助は深くも戀したのである。戀の道行は別に變りもなく、何時か二人とも相傾倒し、終生離るまじき誓を立てた。それを園子の父なる大宮剛三が知つて甚く怒つて、二人を野合でもしたかの如く罵つたのである。

それで田之助は無論、園子も最後の決心を固め、假令父が如何に反對しやうと、斷じて二人の誓を破らないと、田之助は剛三に向つて斯ういふ意味の手紙を送つた――

二人は決して野合したのではない。二人は相愛したのである。相愛するのが罪だらうか。世には愛しない妻がある。夫がある。それは夫妻なるが故に罪でなく、吾々は相愛しても尙且つ未だ夫妻ならぬが故に罪だといふ理窟が如何して立つ。

自分を取るにも足らぬ一小美術家だ。第一それが貴殿のお氣に入らぬのであらう。若し自分が伯爵の若様か何かであつたら、大宮銀行頭取なる足下は野合呼はり仕ないのだらう。手短に言へば貴殿は吾々に向つて野合呼はりをする権利はないのである。貴殿は品行方正、未だ曾て一夫一婦の大義を破つたことのない君子人だと世間何人が許すだ

らうか。自分は自分の品行を吹聴するのではないが、若し貴殿が自分從來の品行中、一點不潔な事があつたと證明するなら、直に此問題は貴殿の命のまゝ處置して見せる。

こんな激烈な手紙を受取つて、人の親たる者、何で怒らずに居られう。剛三は眞赤になつて憤怒した。そして斯ういふ宣言した。二人の行動の善悪は最早言はぬ、我が存命中、斷じて芝田之助なる生意氣な無禮者には我娘を許さぬ。園子は我子である。我は園子の上に親權を行つて一步も假借しないと。

色々仲裁者が入つたが、二人とも如何しても下らない。けれども結極、田之助から謝罪することになり、剛三に向つて無禮を詫びた手紙を出した。處が剛三はそれを突返した。今度は田之助が承知しない。斷然園子に向つて家を出ることを求めた。園子は一夜泣き明したが、思ひ切つて大宮の家を出て芝田之助の許に投じたのである。

剛三は家族に宣告して、若し園子と消息するものがあれば何人と雖も直に大宮の家を追出すと、母親と乳母のりさは、泣きに泣いたが、如何ともすることが出来なかつた。

田之助と園子は小かなる一家を持ち、貧苦の中に生活しながらも先づ其日を楽しく送つて居たのである。たゞ園子の心の底には一點融く可らざる悲痛があつた。其中に二人

の中に玉の如き男兒が生れ、これを繁と命じた。

りさは母親の命で人知れず園子を二回ほど訪うたから、繁の出産は内々大宮家の者は知つて居たのである。

《下》

『園！一寸こゝへ』と言はれて、りさも思はず顔をあげ、二人は顔を見合はしたのである。りさが何か言はんとするを眼にて制め、園子は靜かに起つて次の間に入つた。

田之助は机に向つて書見をして居た身體を此方に向きかへ、正座して園子の入り来るを待つて居るのである。園子は黙つて其前に坐つた。繁は乳房を啣へてすやくと眠つて居る。

『園、りさは何しに來たのだ』と問はれて、園子暫時は繁の寝顔を見つめしまゝ黙つて居たが、思ひきつて、

『父から一寸と會ひに來てくれと迎へによこしたので御座います』

『お前、會ひにゆく積りか』

『父も病氣といふことですから、一寸會ひたいと思ひます』

『ウン、それぢやア會ふが可いだらう、けれど大宮園子でゆくが可いぞ、芝園子なら不承知だぞ。私は内證で自分の妻を何人にも會はすことは出来ないから其積りで決心したが可からう』

言ひ放たれて園子は首を垂れたまゝ身動きも爲ないのである。

『如何だ、如何決心した。』と問ひつめられ、

『それでは如何なつてもお許がないのですか』

『勿論、許したくも許す道理がない』

『何故ですか』

『何故だと？ お前にはそれが解らんか。お前は私の妻だぞ、其妻に私へは内證で遇ひたいといふ人があるなら、それが誰であらうと私に許すことが出来るか、出来ないか考へて見ろ！』

『解りました。よく解りました。私が悪う御座りました。さう言つてりさを歸へしませう』といふ園子の眼は一ぱいの涙である。

『それではりさに言ふが可い、若し大宮剛三さんが、私に手紙をよこして會ひたいから

一寸、お前の妻をよこしてくれないかと公然申し込んで来るなら直ぐにでも出しますと私が言つたと、さう歸宅つて言へつて。りさも遠い所を氣の毒であつたが仕方がない。』園子は起つて玄關に出ると、りさは突伏して袖を嚙んで泣いて居るのである。園子は傍にすり寄り、耳に口をつけて、

『お前も聞いたらう。所天のが被仰ることは無理のないのだから。私も如何することも出来ない。私も覺悟を決めて居るから最早父様に會ひたくない。歸つたらさう言つてお呉れ、芝田之助の妻は、田之助の許がなくては一足も外へは出ませんと。さう言つてお呉れ』

『お嬢様！ 私は何も申しません。随分お達者に……』りさは嗚咽で言ふことが出来ないのである。園子も半ばむせび、

『お前も達者にね……そして、父様を頼みますよ、どうか私に代つてね……母様も頼みますよ……』

りさは園子の手を執つて泣き泣くを園子はよう／＼なだめて外に送りだした。

園子は健氣にりさを追ひかへしたものの、其夜は勿論、翌日も心ひきたらず、所天と交

す言葉も自から少く、朝よりふさいで居るので田之助も亦た面白くない。頗る面白くない。

であるから畫餉を濟すと間もなく、畫板を肩にかけて飛び出した。園子は何處へとも問はなかつたのは、前以て其場所を知つて居たからである。

冬の空晴れ、日はうらゝかに照つて居るが、空氣は何となく霞んで、遠くは赤味を帯びたもやが立こめて居た。斯いふ日には風がないから、さまで寒くはない、のみならず歩いて居ると熱くなる位である。健脚の田之助は汗ばむほど急いで目的地に達し、兼ねて定めて置いた位置から寫生に取りかゝらうとしたが、さて如何も氣がひきたゝない。それで唯だ周邊をぶら／＼歩いて居る内、ふと思ひついた場所があるので、御苦勞にも更らに健脚を鼓して三錢で濟むところをどし／＼歩いた。ゆき／＼て高臺に出ると、冬の日脚短く、此時は既に西に傾いた日が左手の林の上に赤くかゝつて居る、右は林の缺けた處から廣い景色が見え、遠くは靄でどんよりして居る。田之助も一本路を眞直にどしどし歩いて、汽車の線路を一つ越えて、直ぐ石を見ると、四十間か五十間も離れた向に一の林がある。此林の夕陽を正面にうけて居る様が氣に入つたので直に寫生に取りか

かつた。橋の裾に座を構へて。

林の中央に大木がある。これを圍んで落葉樹が叢生つて居る。此落葉樹の中には脊の高い槻も雜つて居る。葉の未だ梢を離れざるは眞黄色に染つて居るので、日を受けて煌く様はさながら黄金の光である。

心に不安の思あれど、一度畫筆を執れば田之助の精神は全く畫幅と眞景の中に吸ひ取られて、最早や我もなく妻もなく、まして大宮剛三をや。利害得喪の念、愛着の情、頓に消滅し了れば、彼の心頭たゞ美の技術あるのみ。

四十分ばかり思はず経つた。中央の大木と、其左の樹五六本の根方まで書き了らぬ中に早や日はかげつてしまつたので、田之助は已むを得ず筆を止めた。そして彼は此畫を落成る爲め尙ほ四五回、此處に來る決心をした。

落成後、何と畫題を命すべき、これが又た畫家の苦心なり、樂みなりである。それよ、黄金の林！ 俗なれども彼は善しと思つた。

其所で彼は歸途に就いた。宅に歸つたのは五時過ぎて居た。

『お歸りなさいまし』と例の如くしとやかに挨拶はしたものの、顔色はやはり沈んで居る

ので、田之助も何時もの如く、元氣よく今日の寫生の模様を話すことが出来なかつた。それから夕飯が済むと、お園は臺所でかたづけものをして働いて居たが其間、田之助は繁を膝にのせて遊ばして居たのである。

愛らしい盛の繁は、父にあやさされ、初の内はにこくと笑つて餘念なく遊んで居たが、いつか疲れると今度は、母を慕つて泣きだしたので、園子は手をふきく座敷に入つて来て、

『よし／＼、さう泣かんでも……坊や如何したの、父様に抱こして遊ばして、戴いたの、さう』とまだろくに口もきゝ得ぬ小兒と一人問答して、繁を抱きとつた。

ところが繁は如何したのか、容易に泣き止まないの、園子は抱いたまゝ縁先に出て、兒守歌をうたひながら、縁を彼方此方と歩いて眠らさうとした。

繁は眠りさうにもしない、矢張り泣いて居る。園子は低き聲に調をつけて兒守歌を唄つて居た。

田之助は座敷に居て火鉢を擁したまゝ、聞くともなくこれを聞いて居た。暫くすると、田之助の頬を一滴二滴の涙が傳ふのであつた。

彼はこれまでと雖も、月日のたつにつれて園子の父母を懐はぬでない。彼は幼少の時に父母に離れて孤兒の生涯を送り、世を情けなく送つて來たので、心の底には人並すぐれし情愛の泉を湛へて居ながらも亦た頑執なる性をも何時の間にか養なひたれば、園子の父に對しても一途に憤恨を懐いて居たのである。けれども我が兒の生育につれ、我が愛の兒の上に加はりゆくに連れ、園子の父の心をも想ひやるやうになつたのである。されば、りさを追ひかへしたを一には心地よしと思ふ傍ら、一には淺ましいと感じて居たのである。其矢さき、宵闇淋しき縁邊にて園子が繁を抱き、節哀れなる歌うたふを聞いては、我知らず熱涙の湧きいづるを禁じ得なかつたのである。

『園！』と田之助は優しく呼んだ。園子は座につき所夫の顔を見て驚いた。

『園、お前はこれから京橋へ行つて父上に會つて來たら可からう。私もお宅の傍まで送つてやるから』

園子は更に驚いて口を開き得ない。

『斯う言へばお前驚くだらうが、私はつく／＼感じた、私共が繁を可愛がるのも大宮さんがお前を思ふのも親の情は同じことだと、解りきつた事だが、其を私は今つく／＼感

じたのだ。それで私が手紙を書くからそれを持つてお前は父上に會つて來るが可からう』
言はれて園子は先だつ涙を拭ひもあへず、『有難う御座います』と直ぐに仕度に懸つた、
其暇に田之助手紙をすらくと認めたり、妻は兒を脊負ひ夫婦は京橋さして家を出た。
大宮家の門近くまで來るや、園子は手紙を受取り、田之助は新橋附近の友の家に歸り
を待ち合はすことにし、二人は別れた。

突然の事で大宮の老父母は勿論、りさも驚きもし喜びもし、園子のみすぼらしき衣装
など眼にも止まらず、直ぐに父が病床に導いた。

『園か。』と老父は一言。『お父様、お久しう御座いました。』と園子は僅に言ひ得たるのみ、
一座は泣き伏して了つた。

芝田之助より大宮剛三に送つた手紙の文言は、『吾等夫婦が繁を思ふも、貴殿御夫婦の
園子を思ひ給ふも親子の情に變りあらんや。ゆるくお遇ひ被下度候』とのみ、されど
老父は讀み了ると直ぐに、

『田之助様は宅か』と尋ねた。

『御近處で私の歸りを待つて居ます』

『直ぐ呼びにやれ、大宮が是非お目に懸り度いと言つたと』

大宮剛三は田之助の手を執り、園子の母は繁を抱き上げ、情の涙にあらゆる我執は流
れ去られた。

『黄金の林』が落成るや、先づ老父の枕頭にかゝげられた。

18834



◀集步獨二第▶

大正七年三月廿五日印刷
大正七年七月廿八日發行
大正八年七月十五日八版

(定價金六拾錢)

著者

國木田獨步

發行者

東京市牛込區矢來町三番地中の丸
佐藤義亮

發行所

東京市牛込區矢來町三番地
新潮社
電話番町(八八九九番)

番二四七一(京東)總發

印刷所

東京市神田區宮本町五番地
下谷門〇六七番

印刷者

新潮社印刷部
高橋治一

日本に始めて出てたる一大詩集

大版特製▲價壹圓參拾錢
三百四十頁▲郵送料八錢

日本詩集

一九一九年
九年版

富田碎花 福士幸次郎共編
川路柳虹 佐藤惣之助共編
室生犀星 北原白秋編
山宮 允

現下詩壇に名を列する四十有餘氏のその最も自信ある作物を集め、更に之を七名家の嚴選を経て一卷となせるもの。泰西詩壇に倣ひ、毎年一回刊行の計畫の下に茲に先づ一千九百十九年版は公にせられたる也。是れ實に最近詩壇の鳥瞰圖にして、また我國詩壇の最高水準を示す一大集也。——大好評三版出來——

泰西

(1) ■ハイネ詩集 (既刊) 生田春月氏譯

(2) ■ホイットマン詩集 (既刊) 白鳥省吾氏譯

(3) ■ゲエテ詩集 (新刊) 生田春月氏譯

(4) ■ズルイエヌ詩集 (近刊) 川路柳虹氏譯

(5) ■バイロン詩集 (近刊) 佐藤春夫氏譯

選集

小形極美本紙數三百六十六頁
一冊價八拾五錢送料六錢

若うして逝ける天才石川啄木の全集新に出づ

啄木全集

全三冊 總洋布製一冊七百頁
定價一冊壹圓七拾錢
郵送料一冊八錢づゝ

天折せる天才石川啄木の全集出づ。啄木は其時代の先驅者たるに於て、その妥協し難き性格者たるに於て、其悲劇的なりし短かき生涯に於て、其業績の時代區劃的なる點に於て、其作品の斑々たる心血に彩られ、痛刻骨を刺すが如き點に於て、彼の透谷を偲ばしめ、彼の獨歩を思はしむるもの無くんばあらず。殊に、彼が先天の稟質として之を有せる社會的感情と、彼が熱情の限りを盡して之を謳へる民主的思想とは、これを透谷に見ず獨歩に得ざるところにして、ひとりよく我が啄木が現下の思想界に痛切なる共鳴を呼ぶ所以のものにあらずや。彼逝いて七年、即ちその七回忌に際し、小社は、生前の知己與謝野、金田一、土岐三氏に囑してその作品の全部を集め、こゝに啄木全集を刊することゝなれり。近時最も意味深き出版たることを自信す。

第一 小説集

(再版)

處女作『雲は天才である』以下深く筐底に藏して公にせざりし作品に加ふるに、長編『鳥影』『我等の一團』と彼等其の一切の作を集む。密字版七百頁の大巻也。

第二 詩歌集

(七月上旬發行)

第三

感想

書簡集

(九月中旬發行)

縮刷獨歩叢書

文豪國木獨歩の全集也

(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
戀愛日記	青年時代	第二獨歩集	濤聲	運命	獨歩書簡	獨歩集	武藏野及渚
「欺がざるの記」の後半。獨歩が自ら筆を執つて其烈しかりしこと火の如き戀の終始を記せる高名の告白録也	「欺かざるの記」を二卷に分つ、是れ其前半にして若き獨歩が悩みと欣びとを以て送迎せる青春の日の記録也	▼老人の泣き笑ひ▼湯ヶ原ゆき(附録一篇) ▼竹の木戸▼窮死▼都の友へ▼入郷記 ▼眩の侮辱▼湯ヶ原ゆき(附録一篇)	▼鎌倉夫人▼神の子▼少女▼帽子 ▼あの時分▼死▼波の音▼號外▼歸去 ▼來▼別天地▼戀を戀する人▼園遊會	▼運命論者▼巡査▼酒中日記▼馬の上 ▼の友▼惡魔▼畫の悲み▼空知川の岸 ▼邊▼非凡なる凡人▼日の出……	獨歩の書簡數百通を収む。中に其愛人に贈りて戀を語れるもの最も多く熱烈なる戀愛書簡集たるの觀あり。	▼富岡先生▼牛肉と馬鈴薯▼女難▼第三者▼正直者▼湯ヶ原より▼少年の悲哀▼夫婦▼春鳥……	「武藏野」は、獨歩が始めて公にせる第一の文集にして、不朽の名篇と稱せらるゝもの。「渚」は實に其絶筆也。
<p>錢六料送 ◀ (錢五十六下以編七) 錢十六各 ▶ 製金天紙表布</p>							

一人と藝術叢書

海外諸文豪の日記書簡回想記の類を輯め裏面乃至側面から直に其人と生活とを窮はしむるものである

第四編

巴里の三十年(新刊)

ドオテエ著 後藤末雄氏譯

佛蘭西の文豪ドオデエが晩年自ら筆をとりて、如何にして文學に志せしか、如何にして文壇の人となりしか、如何にして其の三十年の文壇生活を送れるかを述べたるもの。これを文豪生ひ立ちの記と見るも可、**文豪立志篇**と見るも亦可也。其文壇への憧憬と初陣、その作家としての悦樂と苦み、その交遊、その日常生活の巨細を、美しくしき筆に描ける所、文豪の樂屋觀として興趣極めて豊か也。

第一編

トルストイ書簡集

石田三治氏譯

第二編

トルストイ日記

昇曙夢氏譯

第三編

ドストエーフスキイ書簡集

山村暮鳥氏譯

◀ 錢六料送 ▶ 錢五十六金部一 ▶ 本美製上 ▶

ユーゴー著 豊島與志雄譯 第三卷迄既刊

レ・ミゼラブル

全四冊

- ▼ 總洋布箱入最上製
- ▼ 總紙數二千七百頁
- ▼ 一冊價壹圓六拾錢
- ▼ 郵送料 一冊 八錢

是れ佛蘭西近代浪漫派の巨匠ユーゴーの代表作にして、邦文に譯して堂々四千枚の大長篇也。その抱懷をジャン・ヴァルジャンなる一人物に寓して、波瀾多き慘苦の生涯を曲盡するの間、當時社會の各方面に、炬の如き批評の眼を放つ。全篇を貫いて鏗鏘として鳴るものは實に作者が濟生愛民の大精神にして、人道主義の大理想也。或はワロテルロオの戦場に千軍萬馬を叱咤する大ナポレオンを描き、或はパリの陋巷に、命運の哀しきに泣く一賣春婦を描く。幾十の人物、幾百の情景、その結構の複雑にして、規模の雄大なる、近代小説中これに匹敵し得可きは、獨リトルストイの『戦争と平和』あるのみならむ。新進作家の雄にして、少壯佛文學者たる豊島氏直ちに佛の原文より譯出せらる。我文壇、始めてユーゴーの眞面目を見るを得む也。

◎ユーゴー原作

哀史物語

縮刷

再版

定價五拾八錢 郵送料六錢

德田秋聲氏譯編 『レ・ミゼラブル』の精髓を小形の美本二百五十頁の間に撮みて、一讀下、直ちに原作の大綱を知り、原作の妙味を味ふことを得せしむる、極めて便利なる書なり。

